

町/辰
田中益三氏

白糸露人作家短篇集

アンケータ回答
座談会
対

記簡訳論
日書類
社文・跋
会評論

想記行品片
感雜紀小断

柳究論評筆
川研評書随

小説
歌句
歌句
詩短俳

題名

ジャンル

号面

巻
東京 五星書林

書誌紙名

北尾一木

署名

発行所

日(月)

年 月 日

6月5日

1943年

1943年

発行年月日

(定価 161)

神井我等と共に(イン・ス・ハイコク) 161
ニキイソカカ17(孤ロエイ・ネズメ・ロク) 185
良心(ソ・カルボスキ) 245

原看紹介
著者評訳者1
後記

305~312
313~316
317P

備考

老嶺の山々 (イン・ス・ハイコク) 5
タカルー・ズカル(コンスタンチン・ザブ・ロク) 41
ウズリ-地方の話(ニカラ・ズルスキ) 83
金の粒 (ウツチヤイ・サエモク) 83
ミロウシ・ミカハス)の最期(ホルヌ・ユリスキ) 115
◆ 全 317P

所蔵者名 (請求番号)

金

ウズリィ、マカール、マカール、コンスタンチン、サプーロフ

日系露人作家短篇集 北尾一水 譯

目次

三六

目次

老嶺の山々 (エン・ア・バイコフ) 五

ウズリィ、マカール、マカール (コンスタンチン・サプーロフ) 四

ウズリィ地方の話 (ニカライ・アムルスキー) 三

金の粒 (ゲンナヂイ・ナウーモフ) 八

ミイロウン・シヤバアノフの最期 (ホリス・ユリスキー)……………二五

神は我等と共に (エン・ア・ハイユフ)……………二六

十二キキイツカヤ門 (アルセニイ・ネスメーロフ)……………二七

十良 心 (ア・カルホスキ)……………二八

十一 選 逅 (ファイナ・チミツリーエフナ)……………二九

目次

老嶺の山々

エン・ア・ハイヨン

老嶺の山々

夏、六月の日も終りに近づいてゐた。陽は、既に老嶺山脈の向ふに隠れ、密林は、すっかり陽影になつてしまつた。鳥の囀る聲も、蟬の鳴聲も止み、何處か遠くの山の方で、ほうほうと言ふ、オホミミズクの唸る聲が聞えてゐた。河邊に沿つた灌木林には、巢の聲が木魂し、險阻な斷崖にある巢を抜け出た野山羊が鳴聲をあげ、その斷崖には谷川が噴き上り、その清らかな流れは、岩の多い狭つた水路を通つて流れてゐた。古びた西洋杉の鬱蒼たる先には、神秘の鳥ツヤオ(巢)が叫び聲をあげ、その單調な顫音は、密林の薄闇の靜けさの中にフルフルの様な響きを立てゝゐた。

假小屋の入口に構へられた燎火は、四方に火花を放ちながら、煙々と烟りを老嶺の山々

立て、小蟲や蚊が血に飢えた群になつて、吾々を襲ふてくるのを驅逐してゐた。野獸の様な犬、ツルジョクは、その燎火の側にくつたり身を伏せて、敏感な耳だけは、眠つた様な密林の底から起つてくる響きを、ちつと聽き澄してゐるのだつた。

既に二週間、私は、密林にゐる親友ポボウシンのお客となつて、横道河子驛から南へ四十露里離れた高地にある彼の堀立小屋に寝起してゐた。私達は、東部老嶺山脈中の鹽沼地や、松花江中流から朝鮮國境まで、高い巖石の連つた山脈の背が、北方に暗くなつて流れてゐる、幾百年も経た西洋杉の繁る山の邊などへ、鹿狩りに出掛けるのだつた。

「だけどさ、俺は行くぜ！」

ポボオシンは、煙管をへたくと、ラム酒の入つた茶をぐつと啜つて、低い聲を出した。

「陽も落ちて、すっかり夜だ！ ぼつ／＼、獣どもが穴から出てくるぞ！」

「密林の大人は、腰をあげて、小屋へ入つたかと思ふと、銃と彈藥を手に下げながら出て來たのだつた。」

「じや、鼻眼鏡先生、あばよ！」

銃を肩へ投げかけ、短かな獵刀のついた腹帯をぐつとつけると、彼は私に言った。

「達者でゐてくれよ。ともかく、ヅルウジョークをしつかり頼むぜ、此の前の様に、奴、俺に纏ひついて來たりしない様にね。さうだ、小屋にでもついでないぞくんだな。」

賢しい犬は、自分の名を聞きつけると、早くも、主人の後につかふとすのだつた。前方に飛び立とうとしたが、私に押へられて、仕方なく、腹這ふと私

老嶺の山々

をちつとみろめめだ。……野獸狩りの脊丈の高い姿が茂みの向ふに隠れ、唯、彼のぼるけた毛皮帽子だけが長い間、河邊の灌木林の綠色に光つた向ふに、きらめいてゐた。

ボボオシンが行つてしまふと、ヅルジョークは安心した様に、燎火の傍にべつたり、執拗く纏ひつく吸血蟲をよけながら、烟りの下に伏せてゐた。

私は鹽沼地へ行く用意を止めて、密林や岩だらけの砂地を歩いたので、すっかり傷んでしまつた靴の修理をやる事にした。

私の傍で、うとうととしてゐる様にみえるヅルジョークは、森の低地から起る一寸とした葉ずれの音でも、聴きのがすまいとして、絶えず、兩耳をばた／＼言はせてゐるのだつた。

私は、犬が頭をもたげ、耳を立て、何かを聴きつけ様とする恰好に目をつ

け始めた。彼は、山腹の斜面に眞黒くなつてゐる西洋杉のあたりをみつめたまま、私が、「ヅルウジオク！ どうした？」と言つても振り向かないのだつた。で、私もその方向に眼をやつたのだが、眠つた様な森は、四方から、吾々のゐる方にその暗い壁の様な影を投げかけてゐるだけで、何物も見えないのだ。急にあたりが暗くなつてしまつた。河の上には、螢が、小波の中へ閃光を落しながら飛んでゐた。空も亦、星の火華で、消えかゝつた朝焼けのほんのり蓄積色に光る様に、輝いてゐた。ヅルウジオクは、猶も聴き耳を立ててゐたが、やがて、身を起すと、犬の脊の毛は、急に總毛立つてゐるのだ。眼はちらちらと輝き、威嚇するかの様である。筋肉はぐつと引き締り、ぶる／＼と震へてゐた。二點をみつめたまま、彼は、私には見えない、何者かに近づいて行くかの様に、前進し始めたのだつた。

私も亦、起ち上つて、銃を執つて、靜かに犬の後に従いたのだが、ヅルジオ

老嶺の山々

クは、急に、茂みの中へ隠れてしまつた。

私は、獨り殘ると、木を楯にして、突發的に起つてくる危険に構へる姿勢を取つた。

此のあたりには、虎が横行することを私は知つてゐたので、密林の王者に出會ひたいと思つたが、犬の態度からすると、野獸はそこにゐないで、森のこんもりした中の、私の眼の届かない處に、どうやら、人間がゐる事に氣づいたのだつた。ヅルジオクは、それを嗅ぎつけたのか、すぐ出て來たからである。事實、五分も経たない中に、密林の靜けさを破つて、低く吠える聲がしたかと思ふと、人間の聲が聴え始めたのだつた。

「えい……主人はゐないのか？ 犬を連れてけ！ こつ、怖がることはねえ！ 俺は空手だ！」

私はやつと、ヅルジオクを呼びつけると、その未知らぬ男に近づいて行つた。

私の前に立つてゐる男は、背の高い、ひどく痩せこけた四十がらみの男で、ぼろ着を被て、肩には鞆をかけ、節だらけの杖を両手に持つてゐた。長い間、刈らないらしい眞黒な彼の頭髮にも、ぎつしり、シャベルの様に生えた顎鬚にも、處々、白髪がみられた。長い青銅色になつた彼の顔には、傷痕の様に、過去の皺が深くなつて、務めて笑はふとする妙にぎこちない表情の様にみえるのだつた。褐色の落ちくぼんだ眼は、不屈の意思と精力を示す様に、燃えてゐた。私は、咄嗟に、此の男は、インテリで、教養のある男だと思つた。

「僕は、浮浪者です……樺太から……流刑囚です……」

私が、びつたり、彼の前に立つた時、彼は口を切つたのである。

「朝から、ずつと僕は、あなた方をみてゐました。あなたの友人が、どうやら仕事に出かけられた様なので、密林を傳つて、僕はあなた方の燎火に近づかうと決心したんです。それに、あなたの鼻眼鏡をみて、……詰り、私

老嶺の山々

かう言ふと、男は、（さういふと、男は、どうも、何となく、無言のうちに、自分の口を閉ぢた。その時、彼は、自分の顔を、汗で濡らした。その汗は、眞黒く、陽灼けのした首のあたりを、拭くのを、止めた。彼は、名を告げると、従いてくる様に、彼を誘つた。その時、彼は、未知らぬ男の周囲を、ぐるぐると、廻りながら、嗅ぎつけてゐたが、怪しいものを、嗅ぎ出さなかつたのか、安心した様に、前になると、如何にも、勝ち誇つた様な、重々しい歩みをして、這ひ出したのだつた。）

「私達が小屋に戻つた時は、全く、密林の闇夜になつてしまつて、燎火の焰と私達の周りに飛んでゐる螢だけが、闇の中に閃めいてゐるだけであつた。私の忠告に従つて、男は、小屋の中に持物を置くと、谷川へ水浴に行つた。冷々とした急流の中で、彼は長い間水音を立てながら、下着を洗つてゐたが、一時間ばかりして、何となく、若返つて活氣づきながら返つて來た。」

トさつぱりしました。久瀧に石鹸でやつたんで……
ラム酒をたつぷりませた熱い茶を、私が出すと、彼は嬉し相にうけて言ふの
だつた。

―何もかも有難うござります。御親切さまに、神の御加護に依つて、あなた
の御長壽をお祈りします。

療火の傍へ、私と並んで腰を下ろすと、彼は足を組んで、ちつと火をみつめ
ながら考へ込んだ。私は、彼の物思ひに沈んだ沈黙を破らない様にと思つて、
牡鹿の串焼で夕食の仕度^{シヤク}に掛る事にした。食事が出来上ると、私は、彼に食べ
る様に勧めた。彼は、ひどく喜んで、ぼく／＼眞赤に焼けた肉を食ひ食つた。
全く、彼は、飢えた人間の様に、串焼の肉も骨も、がつ／＼鳴らしながら食ひ
食つたのだつた。

すつかり、肉を平けてしまふと、どうやら、彼も満腹したらしいので、私は、
老嶺の山々

口直しにと思つて、お茶を構へ、それに、ラム酒を存分注いでやつた。間もな
く、彼は、いゝ氣持に酔つたらしく、おしやべりになつて來た。密林の男の習
慣として、私は、彼の過去も訊かなかつたし、彼が何者なのか知らなかつたの
である。

男は、私が彼に興味を感じてゐる事を知ると、遂に、話し始めたのだつた。

―私は、十字架を背負つた様な苦難の道で、あなたの様な人に御逢ひした事
を、大變嬉しく思つてゐます。私は、私の考へてゐます事を、あなたには
非、聽いて頂きたいのです、私は、洗ひざらし申し上げたいのです。こり
や、どうも、逃げて來た、過去の人間に取つちや、嫌な事ですがね。まあ、
よけりや、すつかり、兜を脱いでお話致しませう。

彼は、煙草を吸ひ込むと、私の答へを待つ様に、ちつとみつめてゐた。

―是非聽かして下さいよ。どうぞ、氣を置かないで、さつくばらんに、交際

つて下さいよ。

私は、急いで、さう言ふと、ラム酒を彼のコップへ注いだ。

「どうも、更めて、お禮を申します。じゃ、最後まで、あけすけにお話しませう。こんな、人のゐない密林の中で、逃亡して来たロシアのインテリに逢ふなんて、全く、びつくりなさつた事と思ひます。ともかく、その謎は、是から説明致しませう、さて、私は、エフゲニー・ミイハイロウィツチ・クルトヤーロフと言ふんです。元々、私は、シベリヤの地方の富裕な地主の息子だつたのです。中學を出て、モスクワの大學に入り、物理科の三年までゐたのですが、突然、不幸が起りました。外國の宣傳にのせられました、或るテロ組織に入りましたが、その團體が檢舉されました、私も、宣傳文書などを持つてゐましたので、軍法會議に附せられ、二年間の徒刑をうけてゐます中に、或る友人と遂に逃亡したのです。是で、足掛け二年と老嶺の山々

言ふもの、逃げ迷ひながら、故郷にも歸へれず、自首したいと思ひながら逃げてゐたのです。私の友人は、密林の中で、肺病で死に、私は獨りぼつちになつてしまひました。と、突然、あなたにお逢ひしたのでした。

「どうして、此處で自首しないのです？ ロシヤまで歩いて行つたらどうですか？」

私は、一寸、口を入れた。

「さうです！ 私は、大きな罪人です。祖國に對して、國民に對して、皇帝に對して、實に罪深い人間です。苦難の盃を底まで呑み乾さねばならぬ人間です。」

懺悔した罪の子として、私を受け入れてくれる事と私は信じてゐますが、彼は、暫く口をつぐむと、頭を落して、言葉を呑み込んで居た。私は、この白けた間を破りたいと思つて、又、口を入れた。

「あなたは、一年以上も、ロシアへの旅を続けて居られるのだ。それに、とても、苦しまれたし、祖國に對する自身の罪を身にしてみても感じられたのだ。若い頃の過ちが、あなたの一生を台なしにするものじゃない。あなたの身體は、あなたのものじゃなくて、祖國のもんです。自分勝手な苦しみを捨てても、強い人間となつて、物事を眞正面に觀る事だと思ひます。此處でいいんです、自首しなさい。」この滿洲で、あなたの責務を神の前に、皇帝の前に、祖國の前にはつきり示す事です。その事なら、私も、御援助しますよ。えつ、よく考へて、決心なさい。躊躇することはしないでですよ。

彼は、火をちつとみつめながら、私の言葉を聽いてゐた。彼は、懸命に、たつた一言、諾か否かを言ふために決意をしやうと頭を働かしてゐる様だつた。

私は、彼の決意が、はつきりするまで、存分、考へさせてやりたいと思つて、燎火の傍に獨りにさせたまゝ、小屋へ入ると、思ひも寄らない此のお客のため

老嶺の山々

に寢床の準備に取り掛る事にした。

密林の夜の息吹きは生々としてゐた。西洋杉の林の奥には、オホミミズクが呻き聲をあげ、梟が鳴き叫び、溪河の灌木林からは、羊の鳴き聲が洩れ、小屋のあたりには、蚊や蛇が雲霞の襟に群りながら、人間の血に貪りつかうとして、押寄せてくるのだが、小屋の天井も床もびつたり彼等の侵入を防いで、入口には、燎火の烟りが立ち昇つてゐるので、どうしやうもなく、唯、唸り續けてゐるのだつた。樹の多い、老嶺の山頂には、月が昇つて、密林の低地に銀色の光を投げてゐた。虎山の頂は、針葉樹の森になつて、星空に暗影を映じて、月光に輝いた山の險しい勾配には、岩石が點々と光つてゐた。

「何んで、素晴らしいんだらうな、神の國の様だ！」

クルトサーロフは、私が、寢たらどうだね、と言はうと思つて小屋から出てくると、感に堪へた様に言ふのだつた。

—有難うございます。

彼は、パイプを吹かしながら、起ち上つた。

—こんな奇蹟の様な夜は、ねられませんか。谷川へ行つて、考へてみたいですよ。あなたの御説にすつかり、参りました。それに、自然の美は更に私の胸を搏ちました。お寝みなさい！

かう言ふと、彼は、近くの岩床に沿つて、白楊や西洋櫻の生え繁つた崖下を流れてゐる谷川の方へ歩いて行つた。

燎火の傍で、暫く、私は腰を下してゐたが、彼がなか／＼歸つて來相にもないので、小屋へ入ると、む／＼とする中で、牡鹿の毛にもぐり込んでしまつた。

長い間、この奇妙な邂逅の爲に取リ憑かれて、ねむれなかつたが、やがて、うつら／＼する中に、そのまゝ、ぐつすりねてしまつたのである。クルトヤローフが何時歸つたのか、知らなかつたが、彼も、ぐつすり安心した様に、大きな

老嶺の山々

駈さへ立て、寝てゐた。夜明け方、低く太い、此の小屋の主人の聲と、ゾルウジオクの嬉し相な聲が喧しく起つたので、私は眼を覺ました。

—鼻眼鏡先生！ 起きるんだぜ！ よくまあ、厚かましく寝こんだもんだ、

此の他人様の邸宅で、羽根蒲團にぬく／＼女を抱いてさ！

野獸狩りの大人は、身を屈めながら小屋の中へ入つて來た。

—そうら、鹿の袋角だ！ 神様は結構なものを授けて下さつたわい。測つてみるよ、二十封度はあるぜ。お茶を呑んだら、此奴を横道河子へ賣り込みに行くよ。早く行かなきゃ此の暑さだからな。

其奴は何んだい！ 何處から拾つて來たんだ？ 流刑囚か、それとも仲間

の獵師かね？

ボボオンは、小屋の中で眞直ぐ立てなかつた。と言ふのが、凄いのつばの彼は、小屋の中では、屈んでゐないと頭がつかへるからで、で、彼は私の側へ

しやがみ込んだのである。すつかり陽が出て、私は、はつきり、刺りの當つてゐない陽灼けのした、牡鹿の血にぬれた硬い彼の顔をみる事が出来た。

私は、彼に、簡単に、男と出會つた経緯と私達の話を傳へた。ポポオシンは、聴き終ると、短いパイプをぐつと吸ひ込んで唸り聲をあげた。

「こりやあ、お前、良心の問題さ！ 吾の言ふ通りだ。先生は、何も人を殺した譯でも、物を掠めたわけでもなしさ。詰りは、己れが至らんから、卑劣な不良共の偽に馬鹿みたわけじやよ。奴等、淺つていゝ氣なものさ。その口端の黄色い若僧は、とつつかまつて、牢屋にぶち込まれ、揚句の果に島流しとなつたのさ。その時さ、火の玉になつて、ぶち當るべきなんだ。その考へがついて居ればさ。とにかく、あゝして、若い者が身を誤るのが多いて！ 悪いのは、當事者ぢやよ！ 政府は、無政府主義者や、社會主義者や、無神論者や、一切の卑劣な連中の害毒から國民を保護せにやなら老嶺の山々

むのじや。俺に力があつたら、見る／＼中に、奴等の害毒を一掃して、ジャの大地を樂土にしてみせるぜ。我等の父なる皇帝を拜めたらな、母なる大地に伏して、この事は申し上げるがな！

密林の男の雷の様な聲は、遂に、眠つてゐた男を起したのか、彼は、身體を動かすと、起き上つて、熊皮の寢床に坐つた。ポポオシンは、上から下へ、彼は、人の好い微笑を浮べながらちろ／＼みつめてゐるが、やがて、破れた更紗のルバーシユカの襟を締め直すと、口を開いた。

「御免なさい！ 私の事はあの人に申し上げた通りです、で、あの人の御言葉通りしやうと思ふのですが、驛へ行く道を教へてくれませんか。

「そいつは良い事だ！ お前さんに取つちや、自首する外、術はないんだ、外んこたあ、駄目だぜ。

わしは、鹿の角を持つて驛へ行く處だ、よけりや、一緒に行かう。見た處、

あなたは、若くて丈夫相だで、わしに従いて行けるだらう。若し、見失なつたら、一本路を行きやいゝんだ、忘れちゃ駄目だぜ！ わしは、何時も山越で密林を抜けるんだが、此の方が、小路より近道なんだ、夜になりや、驛に着くからな。

かう言ふと、ポボオンは、早速と、小屋を出て、男が、袋の中に必要な食物や手廻り品などを詰め込んでゐるのには、眼もくれないでお茶を呑みに掛つた。

袋の中に縄にまれた鹿の袋角が、木の枝へぶら下つてゐた。野獸狩りの大人は、舌を鳴らしながら、其れを指して私達に言ふのだつた。

「大した獲物だらう！ 薬屋は、そいつにまゝ／＼五百留は出さあね、戯談じゃないんだぜ！ 此の金で、着物を買つてさ、クルトヤーロフさんがお上に出て行く時の恥しくない晴着にしようかな。

老嶺の山々

さて、流人先生、わしと行く事に決まつたら、早いとこ構へて下さいや、十分したら、わしや、出るからな、歩き出した日にや、もう、焚火の様なものだぜ。

ポボオンは、かう言ふと、廣い額をすり寄せてゐたヅルウジオクの額を撫でると、早くも、鹿の角を入れた袋を背負ひ銃を手に取つたのだつた。

クルトヤーロフも、既に準備をして、鞆を肩にかけて立つてゐた。

「よし来た！

お前は、鼻眼鏡先生とお留守番だ、俺が儲けたら、新調のネクタイをお前に買つて来てやるぜ、すりやあ、お前、横道河子に歸つたら、娘共に持てるぞお！ さあ、用意は出来たと、出掛けますかな、鼻眼鏡先生、お憫巧で居なされや。

密林の王者は、ヅルウジオクを木に結びつけた。

私は、彼に、哈爾濱の管區裁判所長ベ・ア・スクウォルツォフ宛の手紙を渡し、クルトヤーロフに協力して、出来る限り、寛大な處置を取つて貰ふ様にと言傳したのだつた。

「よし来た！ 萬事、よくならあ、安心しとれよ！」

野獸狩りの大人は、手紙を内ポケットに入れ、背の袋をぐつと引きしめた。

私は二人に従いて、一露里ばかり遠くの峠まで見送つたが、其處は、「シユハイ」の森が、雄大な遠景になつて拓けてゐて、地平線の彼方まで緑の波が流れ、朝日に輝いた花崗岩の「バイダヤン」の砦と、薔薇色の雲になつて裾をばかした「タツジンザ」山の頂がそより立つてゐた。

密林は、露にぬれて眼覺め、鳥の囀り、蟋蟀や蟬のじん／＼鳴く聲で騒々しくなつて来た。水晶の様に透き通つた山の大氣は、香りの高い花や強い若芽の香りにむせつてゐた。自然の中に漲る生命の精氣にふれて、呼吸は深く、緩やかであつた。

老嶺の山々

た。山底や谷間深くこもつてゐた夜のもやは、太陽の光にあたつて、綿の様に通りながら、西洋杉や針葉樹の鬱蒼たる頂きの彼方へ、立ち昇つて行くのである。高地の峠に私達は立つてゐた。私達の前には、神の國の美が、パノラマの如く拓け、唯、それに酔ふばかりだつた。

「ポポオンは、急に、大聲をあげて、搥たれた様な私達に言ふのだつた。

「おー おー おー

數回、是を繰返すと、彼の聲は、何重もの木魂になつて、ごおごおと反響した。それは、吸ひ込まれる様に、森の奥深く、山々の岩根の隅々へ流れ去つて、そこには、鶯が、巢の中で、木魂に驚いて、叫び聲をあげたのであらう、遙か彼方に、彼等の鳴き聲が、裂かれた大氣の中に聴えるのだつた。何處かの西洋杉の、幾百年も経た頂きから、神秘の鳥、ツヤオ（梟）が叫び聲をあげた。その透き通つた聲は、多くの聲の中に、くつきり、浮び出て美しかつた。

―游人の話では、この鳥には密林の中をさ迷つた人間の霊を宿してゐる、と言ふ事ぢやが。

パイプから、強いマホルカの烟を、くるく、吹かせながら、ボボオシンが言つた。

―そんな事もあるまいが、とにかく、あの鳥は變つた鳥じやよ。人間の様な聲を出して鳴くからね。泣く様な、訴へる様な、あいつに從いて行つた日にや、とんでもない處へ行くわい！

さあて、鼻眼鏡先生！ 歸へつた！ 歸へつた！ ズルウジオクが待つとるわい、首を長うして待つとるわい！ うっかりすりや、三日もかゝるぞ！ 俺の留守に牡鹿をみつけたら、驛へ持つて来てくれよ。俺を待つまでもねえさ。

じや、あばよ！
老嶺の山々

彼は、伴れを振りかへつて言つた。

―さあ行かう！

ぐづぐづすることあねえわい。

クルトヤーロフは、しつかり、私の手を握りしめると、鼻齧した聲をふるはせた。

―さやうなら！ 私は、あなたにお逢ひした事を、そして、あなたの御深切を決して忘れません。どうぞ、御幸福に！ 失禮致しました。

二人は、まもなく、小道を廻つて、森の中の絶崖の彼方へ姿を消してしまつた。

私は、時に猶も立つたまま、ツヤオ（藁）の透る聲を聞いてゐたが、深い谷を下つて山道を傳ひながら、険しい谷川邊りを上つて行つた。その向ふに、私達の小屋が白樺の若木の生え茂つた中に立つてゐた。

私をみつけたヅルウジオクは、勢ひ立つて、わん／＼吠えながら、鎖を断ち切らうとするのだ。犬を放すと、私は主の仕事に取掛つたが、先づ、留守中に、すつかり、蛇や蚊が群になつて小屋に押入つてゐたので、燎火を焚きつける事だつた。

ボボオシンが歸るまで、私は、毎日、鹽沼地に行つて、我慢強く、蚊に血を吸はせねばならなかつた。でないと、私は一つも鹿の角が獲られない。近くの開墾地には熊がゐて、ヅルウジオクが一緒だと、怯えて甲高い吠え方をするので、逃がしてしまふ事になる。熊は逃げるとしても、そいつに驚いた牡鹿は、鹽沼地に出て來なくなつてしまふからだ。

鹿の角の代りに、私は、谷川の淺瀬で肥つた鮭が、獲物を狙はふとして、流れに逆に頭を立てた時を見計つて、銃で射つて、數匹捕へたのだつた。彈丸に當つて傷つくと、すぐ様、鮭は水面にばたつくので、その時、さつと、掬ひあ

老嶺の山々

けて岸邊へ放り出す事である。でない、と、直ぐ、息を吹き返すと、溜り込んでしまふのだ。一ブード以上もある、ひどく肥つた鮭が獲れる事があつた。そいつを生きたまゝにして置くには、春の氾濫期から生簀にした池の中へ、放して置くのだ。晝飯や夕飯に、魚が欲しい時其の池へ行つて、魚技で鮭でも鮎でも取つてくればいゝのである。

夜になると、ヅルウジオクを、小屋の中へこつそり入れさせないと、この附近にゐる虎や豹が、夜になると密林を、のそ／＼、餌を求めてやつて來るので、すぐ、彼等の餌食になるからである。殆ど毎夜、犬のゐる事を嗅ぎつけた野獸共が小屋近くやつてくるので、ヅルウジオクを、吠えさせたり、飛び出させない様にしてゐた。唯、燎火の赫々と映る光は、彼等を威嚇してゐた。ヅルウジオクは、是を知つてゐたので、小屋の中にて、火の光りさへあれば、安全だと言ふ事をよく心得てゐたのだ。

鹽沼地でも、虎は、時々、牡鹿を見張つてゐて、時には、獵師と同時になる事もあるのだが、そんな時、人間のゐる事に氣づく、密林の王は、獲物を人間の方に譲つて逃げて行くのである。或時、ポボオシンが、牡鹿の代りに鹽沼地に出て来た仔虎を射ち殺した事があつた。すると、それ以來、その鹽沼地へは、とんと鹿が來なくなつたのだ。それと言ふのも、敏感な鹿は、偶然、獵師に撃たれた、怖ろしい野獸の血の匂ひを嗅ぎつけて、その場所を避けてゐたからである。

三日程経つた夕暮れ、私が鹽沼地へ行かうとすると、ポボオシンが驛から歸つて來た。

「いよう！ 鼻眼鏡先生！」

彼は、上衣と長靴を脱ぐなり、ぼんと放り出して言ふのだつた。

老嶺の山々

「あの大将には弱つたぜ！ 始めから、ゆつくり話すがね。先づ、冷つていお茶だ！ どうもかうも、咽喉がからつからになつてさ。」

奴、なか／＼、歩けるわい、俺に後れないからな。夜になる頃には、まづ、二人は着いたよ。ともかく、その晩は、君ん處の乾草納屋でねたさ。朝になつてパザールへ行き、俺は四百五十留で、知り合ひの藥劑師に、鹿の角は賣り込んだがね。其處から、奴をひつ叩いて、アギシェフの店へ連れ込んださ。で、まあ、頭の上から足の先まで、さつぱりさせてやつたよ。奴、何としても聞かなかつたがね。それから、理髮店へ引入れ、鬚鬚を剃らせ、頭を分けさせ、奴、鏡の前で、面みりや、誰方様かと訊いてやがらあ。そこで、御兩人、レストラント「エリイドラード」で、ぐつと腹ごしらへさ。所が、合憎く、お祭りで、ぐいと極樂壘を一本片付けてね。奴、いきなりで、ぐんにやりなつたが、直ぐ冷めた。その晩、又、「エリイドラード」へ

行つて、晩飯食つて、レコードを聞いたよ。シヤリヤピン、ヴァリツエフ、それから、何とか、ロシアの歌さ。クルトヤーロフ先生、到頭、感極つて赤ん坊の様に、ぼた／＼涙を出して、しゃくり上げる始末だ。店のお客は、すつかり、酔っぱらいだと思つて、げら／＼笑つてやがらあ。だが、先生、何にも飲まず、胸ふさぎ、心虚ろに、ひとり泣くばかりさ。そりやあ、さうだらう、此の世に二度目の誕生だからな、新生と言ふ奴だものな。さて、又、君ん處の牡鹿小屋で寝たさ。翌日、切符を買つてやつて、君の手紙を持たせ、哈爾濱へ發させたよ。鹿の角の賣上げは、百留殘つた。そいつをそつくり、奴の掌に、ぎゆつと握らせてやつた。で、俺は文無し、奴に入れ揚げさ。依て件の如しさ！ さあ、俺や眠るばかりだ、犬みたいにへとへとでな、明日は鹽沼地へ行つて、又ぞろ、鹿の角と收組むさ。さあ、お寝みなされや、鼻眼鏡先生！ 言ふこたあねえ。思ひだしたら、明日言老嶺の山々

はあ、俺だつて、朝になれば、何んでも思ひつくからな。さあ、俺はさうかう言つて、野獸狩りの大人は、小屋の中へ轉げ込むと、ぐつすり寢込んでしまつた。

その夜、私は鹽沼地へは行かなかつた、と言ふのが、天氣がくづれて、雨になつたからである。夕飯をすまして横になると、そのまゝ寢てしまつた。ウルウジオクが、妙にわんわん吠え小屋を飛び出しさうなので、私は眼が覺めた。直ぐ様、銃を握ると外へ出たのだが、ウルウジオクは、暗闇の中へ飛び込んで行くと姿を消してしまつた。まもなく、近くの繁みの中で、彼が吠え始めた。何しろ、眼玉をくりぬかれたつて分らん様な暗闇で、ウルウジオクが吠えてゐる方向に、何かしら火が閃めくのだ、その火は二つで、消えたり、光つたりしてゐる點から、私はてつきり、野獸だと思つたのである。併し、何かしら犬の具合からすると、虎でなければ、豹である事は明かで、でなければウルウジオ

クは小屋を飛び出す筈がなかつた。

「鼻眼鏡先生！止しなよ！豹だ！奴め、えらい奴に喰ひついたものだ！又ぞろ、犬に喰ひつくぜ。ヅルウジオクを呼び返して寝ることだ。」

密林の闇夜の静けさを破つて、雷の様な彼の聲が聞えて來た。と、すぐ、私も、自分の輕率を悟つたので、ヅルウジオクを呼び戻して、小屋へ歸ると、すつぱり、頭から夜着を被つて、寝込んだのだつた。翌朝、私達は、小屋の周圍をのそくと、犬を捜して歩いたら、生々しい足跡を見出したのである。

鹿狩りをすますと、私は横道河子驛の私の家へ歸へつた。暑い雨の多い夏が過ぎて、『黄金色に輝く滿洲の秋』になつた。密林は、あでやかな色に、すつかり、包まれてしまつた。朝の勤行の鐘が鳴り渡り、山々には、牡鹿の鳴き聲が、何重もの木魂となつて響き、密林の低地の静寂を破るのだつた。私は、親友ポオシンと出掛ける用意に取掛つてゐたら、ロシヤから、クルトヤーロフの手

老嶺の山々

紙がついて、それには、彼は、父親の友人、ベ・ア・ストルイビンの特別幹旋で、皇帝の御寛許を得て、今では、内務省の仕事に携つてゐると言ふ嬉しい報告だつた。その手紙の最後には次の様に書いてあつた。

私は、今にして、ロシヤの如何なるものかと言ふ事、如何に祖國を愛することが絶対であるかと言ふ事を悟りました。

ポオシンさんは如何ですか？ どうぞ、くれぐれも宜しくお傳へ下さい。あなた氣附で、爲替を送りますから、是で、あの人に御世話になつた金銭上の責を果したいと思ひます。滿洲の密林であなたと語り明かした思ひ出は、今も猶、まざまざと、浮んで來るのです。あなたの言葉とあの素晴らしい自然に搏たれたのです。私は、そこで、自己と言ふものさ、いさゝかり、把握し眞實と言ふものを知り、神を知りました。

私は今、單なる人間ではなくて、偉大なるロシヤ帝國の信奉者となつた。

です。

此の手紙を読んだボボオシンは、私を抱きしめて言ふのだつた。
「鼻眼鏡先生！ 俺は、奴は見所があると見抜いとつたからな。

老翁の山々

ダカール・マカール コンスタンチン・サプーロフ

ダカール・マカール

「さて、世の中はどうぢやない

パパは、眼鏡をかけながら机に向つた。

「人事、世事と……」

パパは、香が高くがつしりしてゐる。四十代に入つたばかりなんだが、實に、額のあたりは白くなつて、顔にも生活の疲れと苦勞がにじみ出てゐた。朝の九時から六時まで事務所に勤め、夜は何かと勉強してゐるのだつた。

今日は日曜日なので、一日中ゆつたり休んで、パパは焦々しないし、飾釘が見付からないからと言つては喚き出しもしない。さすがに、ゆつくり、お茶の匙をかきながら「ザリヤ」を擴げて読み耽つて居る。

ダカール・マカール

食堂にあるたつた一つの窓には、柔かい九月の朝の陽射しが流れ込んでゐた。換氣窓には、燕が、何時も下着を干す網に留まつて、心地よさ相に鳴き聲を塗つてゐた。チビのアーニヤは、お茶を皿に移してちゆちゆつと啜りながら、片方の眼で、燕をみつめながら思ひ込んだのである。秋林の店先でみた燕の方が肥つて、美しいし、第一、あの燕の方が遙かに本物に近い、何んて、其處にゐる燕は汚ならしくて、せつかちなんだらう」と。

「ツアリツイン下にて砲兵隊放砲、五十ヶ師團……えつ、何じやこりや？」

「パパは獨言を始めてゐる。抑揚をつけて、パパは、ゆつくり読み上げ出した。

「ダカールは、最近、米紙の最も注視しつゝある要衝にして、佛蘭西保護領にある西阿の此の港は、やがて、獨逸が米大陸攻撃開始の要點となるであらう。ダカールよりブラジル、ナタール港まで全程、一千八百六十二哩にして……」

「何ですつて？」

そのとき、丁度、焼き立てのロールパンを山盛りにした皿を持つて闕の處にママが現はれて來た。

「左様さ、アメリカ人共が、ダカールの事を書き始めたよ。分つた事じやないか、手前の方で、西アフリカを攻めやうつて算段さ。言ひ掛りを探してゐるんじや……」

「ママは、今日はとても忙しかつた、お祭りの料理を作つて、何でも、パパと娘を喜ばせなきやあ、と力んでゐたからだ。窯の中には、焦げない様にきちんとして、鐵網にロールパンが二列に並べてあつた。ママは、今日は政治ニニースどころではなかつた。

「さあ、お上んなさい、お前にもひとつ、牛乳入りのお茶をあげやうね。

「ママは、二等、ふんわりしたパンをアーニヤの皿につけてくれた。

ダカール・マカール

アーニヤは、ぐつぐつと口の中へ一杯、詰め込んでゐた。ママより、アーニヤの方が、ダカール問題に乘氣だつた。此の言葉は、その響きで彼女のお馴染みの人間を想ひ出させたからである。マカールーあれば、途方もなく大きい、毛むくじやらの、とても人の好い、毎日、家の窓の傍を樽を積んだ荷車を動かして行く男だつた。アレクセエフカに、家と牛があつて、牛乳を搾つてゐるのである。

アーニヤに、牛乳壺を毎日持つて来るのは、マカールのお内儀さんだつた。マカールは、アルコール工場から牛の爲に穀物を運び出し、牛は、彼の好意に答へてアーニヤにミルクを出してやる、と言つた事になつてゐた。此の相互關係を、八歳になるアーニヤは合點してゐたのだつた。アーニヤは、ロールパンを噛みしめながら、ふいと新語を思ひついたのか、大きな聲を張り上げて言ふのだつた。

—マカール・ダカール！

パパは、あつと驚いて、アーニヤをみつめた。アーニヤはにっこりして、獨創的な名前の説明を始めたが、パパとママがげら／＼笑ひ出すと、一緒になつて笑ひ出した。と、朝は何時も、おとなしく、卓子の下でねそべつてゐる筈のウグラスが這ひ出して来て、長い顔を突き出して不思議相に吠えるのである。アーニヤは、得意になつて、繰返してゐた。

—マカール・ダカール。マカール・ダカール！……

× ×

今日はお祭りで、學校へ行かなくともいい。だから、豫習が済んだら、一日中、外庭を走り廻つて遊んでもいいのだ。日曜日になると、近所の子供達が集まつて戦争ごつこをするのである。アーニヤも、一度、仲間に入れられ、敵陣突入に参加して殊勳を樹てた事があつた。何しろ、戦争はまつた、なしたつた、

—ダカール・マカール

敵陣から飛び出して来た男の子の一人に、アーニヤは頭を、一撃喰らつたのだから、その時、彼女の眼は飛び出さうになつたんだけど、負けるものかと力み返つて我慢したのだつた。

恰度、今、子供達の一團が外庭に集つて、何事か論議中だつた。で、アーニヤは、お茶のことも、食べ残しのロールパンのことも放り出したまゝ、一散に駆け出して行つた。あいや、五つしきや、ロールパンを食べなかつただけだよ、それどころか……

「何んだつて、あれが爆撃機だつて、ありや郵便飛行機だい、やいやい、爆撃機の翼は、ぐつと尖つてらあ、それみるよ、まるいじゃないか、え？」

九歳になるボウバは、ひどく、難しい顔をして、日頃の敵手スライアフカに喰つて掛つてゐた。

兩人共に航空知識の博識で、今、二人は、頭を空へ突き上げて、上空にぶん

ぶん喰りながら松花江の方に向つて飛んで行く飛行機をみつめてゐた。スライアフカは、長い間、後を追つてゐたが、やがて、鼻を細めながら、我誤てりと悟つたらしく。

「まるいや、まるい翼だ、ただいま、爆撃機にだつてあんなのもあるさ、
「へっ、胡魔化すね！」

隣りの離れ家の昇り段に、林檎を手に握つて、こいつを時々、嚙りながら、娘の子が立つてゐた。彼女は、ぎつと、男の子供達をみつめてゐた、と、男の子供達も彼女を黙つて、みつめるのである。

「傳家甸の商賣人は、みんな、林檎を匿したんだつてさ、昨日、伯父さんが来て話してたよ。林檎はとても手に入らないんだとき。」

突然、子供達の一人が言ひ出すのだ。

「昨日、僕は、ママと消費組合に行つたら、うんとことあつたよ。とつても

でつかいのが、両手で握める奴がさ……
「嘘つけ！」

子供達の仲間も、次第に増えて来た。まもなく、首領株では、戦争ごつことを始めていゝ位な人数になつたと思つた。とにかく、兵力不足の處へは、アーニヤを入れるのだ。アーニヤは陣地の中に立ち上つて、ボウバが、手下の列の中へ入れと叫ぶのを、息をこらして待つてゐた。

「第一、第二に分れえー！」

すると、皆は、敏速に、攻防兩陣に別れて、互ひに對峙するのだつた。ボウバが、敵將スラアファカをトレド刀で一撃の下に倒すと、敵軍は捕虜となつて降伏せねばならなかつた。勝利をあげた方では、敵兵の背に跨つて、外庭を行進するのである。やがて、樂隊が、「双頭の鷲」を口笛で演り出す。ボウバは、再び兵士達に、

「第一、第二に分れえー！！
と叫ぶのだつた。

x

x

アーニヤの眼の前には、内と外と、兩面から、大きな複雑な世界が廻轉してゐた。現れてくる世界の面は多様で、それに、一つ一つ影があつた。太陽の如く明るいものから、灰色の暗い、時には、憎々しい黒一色のものもあつたのだ。そんな時は、彼女はわな／＼と震へてゐた。

ママが病氣になつた時だつた。お醫者がやつて来て、歸へる時、玄關の處で、パパとお醫者は何か小聲で話し合つたのである。すると、パパは眞蒼になつて歩きながら、ちら／＼、アーニヤを、とても愁しい瞳をしてみるのだつた。彼女は泣き出したくなつた。家の中から、サモワールや、ミシンや、ママの飾り

ダカール・マカール

つけのある卓子椅、凝つた刺繍などが消えて去つた。夜になつて、アーニヤは、隣りの家にゐる祖母さんと、二人きりになるのが怖ろしかつた。部屋の隅々には、とても怖ろしい黒い影があつて、恰度、それは、誰かそこに隠れてゐて、今にも飛び出して来て、相手構はず、飛びつかうとするかの様だつた。……やがて、ママは元氣になつて、元通りになつた。だが、長い間、家ではロールパンも、お菓子も、煮物も、揚團子も食べられなかつた。此の頃、アーニヤは、パパとママが、夕方になると、ひそひそ話し合つては、いつも、何かしら算段をして、小聲で言ひ争つてゐるのに氣がつき出した。二人は、アーニヤが目を閉ぢるとすぐやり始めるのである。だが、彼女は寝た風をして、實際は、パパとママの話聞いてゐた。

！叔母さんが、死んだ時、あたしに金を遺しましたよ。だけども、最後の場合でない限り、出すんじゃないと、はつきり言はれたんだから、ねえ。

今、あなた、急に面白くないからつて、それじゃ、あたし、違、何にも残らないじゃないの？

ママが低い聲で言ふのだ。

ーさ、それはさうだが、ね、わしを信じてくれ、ね、今、玩具の製造をやるのは、實に儲け仕事なんだ、ね、材料はお前、手持だし、お前は、趣味もあり、工夫も巧いんだ、二人で型を作つてさ、とにかく、注文はどつと來らあ、ね、二人でやらう、都合に依りや、三人でもそれ以上でもさ……町の店で賣つてゐる玩具の高いこと、えッ、どうだ、あの……
パパが言ふのである。

獨立して自分の商賣をやり、毎日、嫌な倦きくする勤めから解放されたいと言ふ希ひは、謂はゞ、パパの信念であつた。ママはそれに負けてしまつたのだ。カブルコフの家で新しい生活が始まつた。アーニヤも一役受持つてゐた。

夕方になると、寄り合つては、何處の店にもない、そして、喝采を博する様な玩具の新型を工夫する相談をし合つた。

或時、パパが思ひつきを披露した。

「うむ、いゝかも知れないわ、だけどさ、そんな彩色は、誰がやるの？ それには、素敵な想像力を働かせなくちゃ……」

ママは、思ひつきに應じながらも、一言、言ふのだつた。

「どう、ウダローウィッチは？ 奴、彩色の名人だ、きつと巧くやるぜ。それに、型だつて作るんだからな。」

新しい玩具は、次の日曜日、アーニヤの知らない中に突如として現れたのだつた。果して、それは人気者になつた。

「何んで、凄いんだろ！」

アーニヤは、叫び聲を上げてしまつた。

「マカール・ダカールさ。」

パパが言ふのである。

マカール・ダカールは、四面相だつた「善良な、薔薇色の顔に、頭髮を束ねた百姓女の相と、メフィストの様な横顔をしてゐて、ロダンの「考へる人」の様
様に思ひに沈んだ面で、次は、フリードリフ・バーバロッサの様なにんじん髭
で、羽根つきの帽子をしかと被つた顔、それから、第四は、野蠻人の様な、黒
い、煙突掃除人が齒をむき出して、唇まで眞ッ黒になつた顔である。此の最後
の顔は、第一番に、アーニヤの氣に入つてしまつた。全體としては、是は、木
製の、四つ頭を上^{ウイッチ}に飾つた長い手になつてゐた。此の作品は、パパとウダロー
ウィッチの共同製作で、到る所で大いに問題^{センセーション}を起し、製作者を一躍、大金持に
させるに違ひない、とまあ、思つたのだつた。

パパは、マカール・ダカールが、家庭では少からず、受け^{受け}ない事に氣がつい
ダカール・マカール

た。ママは、お世辭で、そんな妙なものが、好きな客もあるかも知れないわ、などと云つたが、アーニヤは、性急に反対した。

—マカール・ダカールは、そんなんじゃない、パパ、そんなんじゃない—

—じや、お前流のマカール・ダカールは？

—そりや……大きな髻だらけの、そして、樽のある荷車の上に坐つてゐて、その傍に牛がゐるの。

—牛が？……

パパは、玩具の牛は、別に作つて、荷車と一緒にしない様にと、はつきり言つた。で、此の家族會議は終つたのである。

x

x

カブルウコフの彼等の家の向ふには、暗雲が滾ふてゐた。その雲は、大分前

から湧き起つてゐたのだが、やがて、雷を放つて閃めき始めたのである。

夜中に、眼を覺ましたアーニヤは、雷雨が襲つて來るのを感じた—彼女は、ママとパパが食堂で話し合つてゐるのを聞いたのだ。

—お前は、とつくに、此の話は、けりがついたつて事、知つてくれてゐた筈じやないか。

どうして又、今更、古傷をほじくり出すんだ。

焦々と聲を震はせながら、ぼつり／＼、パパが言ふ。

—ぢや、何故、あの女と文通を續けてるの？

アーニヤは、最初、是がママの聲かしらと疑つてゐた。それ程、その聲は、顫へてゐた。眼の前に、まさ／＼と、愛する男の隠れた世界が暴かれるのを見せつけられた屈辱の女の聲であつた。ママの外に、パパには女があつた……

—あなたは、あの時、約束してくれたじゃないの……ほんの三年前、何の關

ダカール・マカール

係も、あの女とは持たないことにするつて、……
それが、今になつて！ えッ？ どうして、あたしを欺すのよ？

「此の話は、みんな、すんだんじやないか。ええ？
パパの聲がつゞく。

「だつてさ、俺は、手紙を寄來すなつて、事までさ、どうにもならんじやないか。さうだよ。確かに、手紙は貰つたさ。

「ほうれ、御覽！ 貰つたんでせう！

「だけど、俺は、返事はしなかつたよ。

「そんなこと、あたしには判んないわ。若し、あんたが、返事をしてなきや、何も、續けて、寄來すわけがないじやないの？

「冗談じやない！ 止せ！

パパは、怒つたらしい、椅子をぐと引く音が聞える、パパは立ち上つたのだ。

アーニヤは、パパの聲が又、金屬的な調子を含み始めたのに氣がついた。彼女は、怖ろしい破滅の連続を、胸を押へて待つてゐる様なものだつた、両親が演じつゝあつた深刻な悲劇を、理解することよりは、感情でうけとつてゐただつた。

やがて、何時もの、新鮮な、石鹼で洗ひ立てた様な朝ではなしに、泥だらけの手で搦んだ様な、汚れくどつたまゝの、不愉快な陰氣な朝になつた。

アーニヤは、懸命になつて、突如として、起つた不幸の原因を思ひつゞけた。

「マカール・ダカール……

さうだ、あれがなかつた時は、家の中は萬事よかつたのだ。ロールパンも、煮物もあつたし、パパも、ママも、明るく元氣だつた。なのに今は、二人共、むつつりして、お互ひに、顔さへ正面に見合さないじやないか。

アーニヤは、何かしなくちやあ、と感じたのだが、パパとママに話し合へば

ダカール・マカール

いゝのだけど、さて、どう言へばいゝのかしら。それとも、ツウグラスに、パ
パ宛の手紙が来ない様に、郵便配達を咬みつかせた方が良策かな？ アイニヤ
はひどく、頭を使つてゐたのである。

x x

パパとママは、その夜、劇場へ行つて留守だつた。祖母さんは眠つてゐる。
時間も遅かつた。アイニヤは、寢台から、こつそり、這ひ下りて、戸棚のある
所へ近づいて行つた。マカール・ダカールを取出すと、台所へ入つて、料理台
をあけると、幸ひにも、大きな茶瓶が湯氣を立てゝゐた、で、アイニヤは、マカ
ール・ダカールを、ベーチカの口の中へ、べつと、放り込んだ。すると、マカ
ール・ダカールは、ぶすく〜と煙を吐きながら、青白い大きな目玉をむいて、ア
ーニヤを、狂ひ立つた様にもみつめるのだつた。アイニヤは、火搔きを取つて、

燃えてゐる長い人形の體をつゝき始めた。すると、燃え残りの石炭から青い焰
の舌を出して、マカール・ダカールは、益々火煙を吹きながら、遂に赤くなつ
て焼け落ちてしまつた。

アイニヤは、ぢつと、火が金色に燃えて、マカール・ダカールの全身を舐め
盡すのを見とゞけると、やがて、満足氣に言ふのだつた。

―是でいゝ、是でいゝ、…

x x

家の者は皆、眠つてゐた。祖母さんも、アイニヤも、犬のツウグラスも。パ
パとママは、足音に氣をつけながら、寢室に入つて來ると、すやく〜と寢台に
眠つてゐるアイニヤをみめた。娘の顔には、平和と安心と、義務を愚した満足
感が浮んでゐた。

マカール・ダカール

「パパとママは、娘に近づいて立ち止まつた。夢を見てゐるのであらう、娘は、
手を寢台の手すりに延ばして言ふのだつた。

―マカール・ダカール！

「ねんね、ねんね、

ママは、アイニヤに毛布を被せながら囁くやうに言つた。

二人は、寢台の傍に並んで、眠つて行く愛の結晶と言ふものを、まさ〜と
みたのである。二人の手は何時しか一つになり、若い、輝いた過去の日の如く、
心も融けて行つた。

台所では、料理台の茶瓶が、しゅん〜、湯氣を立てゝゐるのだつた。

(康徳九年十一月)

ウスリー地方の話 ニカライ・アムルスキ

ウスリー地方の話

第一話 白鳥

——南部ウスリーの話——

小さな湖「白鳥」の岸に沿つて、ぼとり／＼、足を曳すりながら、二人の男が歩いてゐた。ぎつしりと生え茂つた草と、じめついた沼地の爲に、二人の歩行はひどく難澁を極めてゐた、時々、彼等の全身が茂みの中から浮び出る事があつたが、多くは全く、茂みの中や叢に隠れて、唯、額のあたりを白い布で巻いた彼等の黒い頭と、貧しい衣具と衣類の包みを背負つた白い肩がみえるだけであつた。褐色の扁平な彼等の顔は、低い鼻と小さな服と、高い頬骨を持ち、

ウスリー地方の話

頭の毛も、口髭も鬚髯も黒くて薄く、かきあげた頭髪は、脳天の處できつり高く束ねてゐた、又、彼等の風體の奇妙さは、腰の中程までは、白布の短い土衣をつけてゐるが、殆ど區別のつかぬ程汚れ、上衣の裾は實に寛く取つて背にからけつける程で、手くびのあたりまで、末廣に締めた袖、股引はぐつと又寛くして、足の裏をまきつけ、支那式の革靴を履き、さて、彼等の言葉はアール音が強いのであつた。彼等は、南部ウスリー地方でカウールの名で呼ばれてゐる朝鮮人であつた。

二人は、夏の間中、ずつと、他の朝鮮人らと同じ様に、出稼ぎに来てゐた此の近くの朝鮮部落から、今、生れ故郷の半島へ歸らうとする處だつた。毎年春になると、彼等は、寂びれた北鮮から、一團となつて、此の南部ウスリー地方へ出稼ぎにやつて来た。そして、夏の終りか、秋になると、こつ／＼と貯め込んで家へ歸へるのである。中には、そのまゝ、止まつて、故郷の家族に幾らか

送つてすますものもあつた。

家へ歸へる朝鮮人達は、送金の委託をうけるのだが、彼等は稼ぎ高をすつかり渡しして、家族へ送る者もあり、で、時には、ロシア留で、數百、數千留に近い金を持つて行く事になるのだ。

大金を身につけた朝鮮人は、途中、慎重を期して行かねば、なか／＼に危険であつた。金は一禍ひの元、と彼等は、途々、念じながら旅をつゞけてゐた。途中、旅籠屋と言つても、支那人宿のカルタと阿片で陰惨を極めたもので、ともすれば、彼等は狡猾な支那人の手に管に乗せられてしまふのだ。

うつかり、彼等の勝負に入らうものなら、稼ぎ高は勿論、委託された他人の金までそつくり剥ぎ取られてしまふのである。是はよくあることで、時には、夕方から此の種の宿へ立寄つた朝鮮人が、朝になつても宿から出て来ず、しばらく経つて、近くの河岸に所在不明の屍體になつて轉げ出るのが關の山であつ

ウスリー地方の話

朝鮮人が最も怖れるのは、是をやる所謂「帽子狩りの露人」であつた。彼等はマウザと謂つて怖れてゐただ。此の連中は、故郷へ歸へる朝鮮人を襲つては、しこたまいゝ仕事をやつてゐた。人氣のない處で襲ひ掛ると、有金全部を出させ、いゝ位足蹴にした上で手放すと言つた遣り口である。

今、此處を行く二人の朝鮮人の口の端に、繰返へし上つてゐるのは、マウザのことであつた。二人は、つい近頃出て來たマウザの事を話し合つてゐた。最近、仲間の一人が、ニコリスクへ、西瓜とめろんを運搬の途中、最寄りの村へ辿りつく前に、大小一團となつたマウザに襲はれたのである。勿論、有金全部を掻きあげられた上、西瓜もめろんも、氣のすむまで掠奪され、荷車は道路にどんと、ひつくり返へされてしまつた。彼は、マウザの首領らしい男に、『大將』教けて下されや、おしは、大勢の家族を抱へてどう仕様もないのだから、とま

あ、哀願してみたが、執拗に纏りつくと、反つて、元も子もなく殺され相なので、つい泣寝入りに逃げて来たと言ふのだ。

二人は、此の話を想ひ出すと、すつかり沈み切つて、叢の草の葉がふと、さわめいても、ぎくりとしながら歩いてゐた。彼等はおどくと、湖の對岸をみつめながら足を運ばせた。

彼等の豫感は果せる哉、事實となつて現れたのだ。對岸の茂みの中には、びつたり、土に身をつけて、銃口を前にした二人のマウザが潜んでゐた。彼等は、朝鮮人の動きを吸ひつく様につけながら、機會を狙つてゐたのだつた、

朝鮮人が、岸の突端に近づいて、茂みの中から身を出した時である。

「バン！バン！」

と、二發、一時に起ると、その銃聲は湖面をかすめて木霊して行つた。

二人の朝鮮人は、ちーンとする恐怖のどん底に陥ちてしまつた。一人は、胸のウスリー地方の話

あたりを両手で掴み、よろ／＼とよろめき、前へめると、死んだ様に俯伏せになつてしまつた。今一人は、叫び聲をあげると茂みの中へ駆け込んで行つた。茂みの中の路の方に、絶望的な衣を裂く響きが聞えたかと思ふと、やがて、何ものが打倒れる音がして、衣を裂く響きはそのまま消えてしまつた。それは、まさしく、自らの處置をしたものであらう。

對岸の茂みの中から、やがて、二つの人影がむくりと立上ると、湖を周つて此方へ動いて来た。まもなく、手早い仕事が始まると、朝鮮人の衣服、荷物は、すつかり洗はれ、糸屑一つ残さないうで剥がれてしまつたのである。幾十人かの朝鮮人達の稼ぎはマウザ、且那の懷の中にせしめられた。やがて、獵を終へたマウザの連中は、襦袢を投げ棄て、半裸の朝鮮人の屍體を放り出したまゝ、ちよとした茶番位に思ひながら去つて行つた。

「白鳥」湖畔の事件は、噂があまりに高くなつてゐる中に、殺害者が分つてしまつたのである。

「あつしらは、過つて、奴等を撃つたんでさ。彼等は口を揃へて、言つたものである。」

「あの湖には、白鳥が多いんでござして。あつしらは、全くの處、獵に行つたんでさ。向ふ岸にゐるのは、てつきり、二羽の白鳥とばかり思ひ込みやして、はいはい。でまあ、一發やつた譯でござすよ。じゃ、ごわんせんか。えッ?! でいいち、朝鮮人と來たら、白い着物を被たまふ、向ふ岸で坐つてやしたからね。」

「何も、あつしらに、罪はねえでがすよ。剣ぎ奪り! そいつち、且那、あウスリー地方の話」

「つし共じゃ、ござせん。誰かお門違ひの連中であつしやろ。かうは、ごまことしやかに釋明したもの、裁判所では、受けつけず、ともかく、過失で白鳥の代りに朝鮮人を撃ち殺したマウザの獵師共は、無期徒刑となつてしまつたのである。」

第二話 イ・フウ氏

或る復活祭の時、私は、知り合ひの或る海軍士官の未亡人の家に立寄つた時だつた。その時、偶然に、食卓にゐた、小柄の貧相な皺だらけの老いた支那人と知り合つたのだつた。夫人は、山鶉の肉を切つたり、ハムを切つたり、其他、いそぐと食物を出して客を歡待してゐた。私が、部屋に入ると、二人が盛んに何か話し合つてゐたが、夫人と私の挨拶がすんで、彼女は、食卓の支那人を指さして私に紹介した。

「此の人、あたしのとても親しいお友達ですの、イ・フウさんです。」

「あゝさうですか。どんな又、御近かづきですか?」

「さあ、それが、あなた、とつても古い話ですの!」

ウスリー地方の話

彼女は、すぐ、他の話に移してしまつた。しばらくして、坐つてゐたその支那老人は、立ち上ると、夫人と兄妹の様な挨拶を交はしながら出て去つた。

「さあ、ひどづ、話して下さい。どうして又、あの支那人が、あなたの大切な人になつたんです。面白いロマンスがありそうですね。」

私は、夫人に追求してみた。

「さう、本當は、イ・フウさんは、あたしばかりじゃなく、あの人を知つてゐる、誰もにも、恩人なんですの。唯、あたしは、とても、個人的にあの人にお世話になりましたの。」

夫人は、かう言つて、イ・フウとの経緯を次の様に話し出したのであつた。

丁度、二十五年前の復活祭の事でした。この頃ほど、私の生涯で、惨めだつたことはなかつたのです。當時、夫は船に乗つて、外國へ行き、冬越しをして

ゐたのです。その船は秋には歸つてくる筈だつたのですが、どうした事か、その年は歸らないで、外國で冬越ししてしまつたのです。電報も手紙も、とんとなく、全く便りが絶えてしまひました。航海に出て秋には歸つてくる豫定でしたから、夫は金だつて僅かしか置いて行かなかつたのです。金のある知り合ひもなく、預金だつて、さしてなし、信用借りも出来なかつたんです。何かと手廻り品など賣つて、どうかにか、その年は過したんですが、春になると、どうにも、切端詰つてしまひました。海軍のものでさへなければ、子供達と死んでゐたかも知れなかつたのでした。出来る限りの仕事さへあれば、すぐ私はそれをやつたのです。祭りの日が近づくにつれて、私はいよゝゝ苦しくなつて來ました。賣るものもなくなつてしまひまして、乞食よりも惨めな祭りを迎へねばならなくなりました。どんな貧乏人だつて、お祭りには、甘いものゝ一つはあるのです。士官の妻が乞食も出来ません。お恥かしい話ですが、祭の傍で、スイブを

口移して、子供達と噓り合つたのです。私は泣くばかりでした。その頃の惨めさは、今、お話しやうたつて、言葉にもならないのです。丁度、そのどん詰りの時でした。私の家へ、籠を持つた人足の支那人がやつて来て、いろんなものを買つてくれと言ふのです。勿論、私は、金がないからと言つて拒つたのです。その男はどうしても聞かないのです。遂に、私は言ひなりになつてしまひました。けれど、その男が、私に物をやらうとは夢にも思はなかつたのです。驚いた事には、翌日、私の註文品をその男が夜明け方に、どつさり持つて來たのでした。とにかく、あまりの嬉しさに、私は、ニラや蒜、タバコなど混つた臭い男に接吻しやうとさへ思つた位です……。

私は、思ひも寄らぬこの恵みも、それがどんな日くつきになるかと、言ふ事など考へてみるだけの餘祐もありませんでした。私は、唯、若い支那人が、ほんの商賣を始めたばかりなので、お得意を掴みたい一方で、損得抜きで持込んだものと考へてゐたのです。

だが、まもなく、事實はさうでなかつたことが分りました。彼は此の土地の古い顔でした。彼は、海軍士官や一般船員達の留守宅に、それ／＼夫人連に融通したり、納品したり、謂へば、御用聞きだつたのです。私の知り合ひの或るマダムが、私の窮迫した事を知つて、此の支那人、つまり、イ・フウなんです。が、一に話掛けたので、彼は私の御用聞きとして來たのでした。で、それ以來、彼は、夫がゐない間、私の生活を何かと樂にしてくれました。

朝早く、こつくと、軽く、私の扉を叩く音がして、やがて、マダム、マダム、サモワールが吹いてまさあ、と柔い聲がよく聞えてくるのです。寢室を出て、食堂の卓子にはサモワールが湯氣をたて、すつかり用意が出來てゐるのでした。彼は、私の窯の始末までしてくれてゐました。彼は、私の前で煙草をつめるのも遠慮する程、氣をつかひ、一緒にお茶を飲まうとしても、腰もかけた

いふ、護衛して、さうくさと出て行かうとするのでした。……
……さうして、そんなに忙しくするの、まだ時間があるじやないの？
……あつしは、ジェルコフの奥さんそこへ、行かにやなりませんで、へい、肉
……を持って行かにやなりません。急がねいと、なか／＼向ふまで時間が掛り
……やす、それに、仕度もござるで、他に、船乗さんの處へも用があり、イワ
……ンフの奥さんそこへも行かにやなりません、……
……ほんの、ちよつぱり、お茶を呑むと、イ・フウは、ジェルコフの家へ出掛
……け、子供の笛をつくつてやつたり、又、イツノーバの家へ行くと、此處でも亦、
……薪を割つたり、水を運んだり、部屋の掃除からペーチカの焚きつけまでして
……るのでした。

航海に出た夫の留守宅へ行つて、マダム達の世話を何時に變らすするなどと
言ふ事は、ほんとうに、支那人でも珍しい男でした。

イ・フウは、確かに支那人仲間でも大きな信用をうけてゐました、それと言
ふのが、知り合ひの夫人連に百留もそれ以上の金でも、信用貸をしてゐたから
です。

イ・フウは、どんな時でも、例へば、彼の代理人が彼を胡麻化したリ、又は、
支拂ひをしなかつたり、屑物を押しつけたりしても決して失望しなかつたので
す。

……たつた一度、イ・フウが滅入り込んだことがあります。

……どんな事か、よく私は知りませんが、何んでも、彼は、すつかり誘惑されて、
阿片を飲み始め、何時しか完全に身を滅してしまつたらしいのです。しばらく
の間、イ・フウの姿は町にみえませんでした。やがて、再び、町に現れた時の
彼は、實に眼を反向ける様な姿になつてゐました。落ち込んだ眼をして、すつ
かりやせ衰へ、よ／＼として、丁度、囚人が無理に笑はうとする様な顔つき

ウスリー地方の話

なので。で、彼は、知合ひの處へ行つては、お情けにすがつてゐたのでした。そんな姿で、私の所へもやつて来ました。

「おう、イ・フウ、どこへ行つてたんだ？ 私の夫が彼に尋ねました。」

「貧乏です。食ふものありません。金ありません。」

「金は、どれ位、要るんだ？」

「二百留！」

「二百留で何をするのだ？」

「旦那！ 二百留あれば、商賣出来ます。蟹買ひます。蟹、チーフへ持つて行く、一封度六十仙、天津持つて行く、一封度、七十五仙、此處の市場、

一封度十五哥。

「うむ、よし、ぢや、三日したら来い、二百留やらう。」

夫は、イ・フウに恩返しの意味でさう言つたのです。

三日して、イ・フウがやつて来まして、二百留やりました。彼は、始めは嘘だらうと思つた様でしたが、金を手にすると、すつと、それを握んで、一言も言はずに、轉ぶやうにして部屋を出て行つてしまひました。

それ以來、しばらく、イ・フウの姿は町から消えてしまひました。

或日、家へ歸へらうとしますと、尖つた籠や、箱、包みなどを背負つた朝鮮人が列になつて行くのです。その先頭には、同じ様に兩手に包みを持つた、支那人が指圖しながら行くじやありませんか。近づいてみますと、それはイ・フウでした。

「あ、あなたなの！ どうしたの、是は？ 何處から来たの？」

「今日、チーフへ船で行きます、是は、あなたの所へ持つて行くものです。」

やがて、彼は私の家へやつて来ました。籠の中には、巴旦杏や林檎、其他の果物があつて、包みの中には、繭細、支那絹、其他の物があつて、何れも皆、

ウスリー地方の話

私への贈物でした。

私のやつた二百留で、イ・フウは、蟹を仲賣して八百留儲けたのでした。

それ以來、イ・フウはどん／＼よくなりました。町の何處かにやがて家を建て、店を開き、貸家も持つて、次第に物持ちになつて行つたのでした。

彼は、支那人だつたので、ロシア人には、ひどく馬鹿にされ、欺かれもしましたが、やつぱり、彼は、私共について来たのでした。

夫人はかう言つて、ぢつと私の顔をみあげたのだつた。

金の粒
ゲンナデイ・ナウーモフ

金の粒

支那人の村へやられた子、

苦の果の、愁しき子よ、……

—「ラモーザ」ア、ネスメーロー

李符瑾は、殆んど、生みの母親の事を記憶してゐなかつた。彼の知つてゐるのは、母はロシア人であると言ふこと、白いまるい顔で、輝いた頭髮をしてゐた事、そして、河岸にある白いさつぱりとした家……白樺の木柵……掘り起された島には鶏が、こつこつと動いてゐて……向ふにはリラの花が咲いた小山があつた……などであつた。

李は、父親も亦、ロシア人だつた事は知らなかつた。彼は母が死んでから、
金の粒

二人きりになつたあの瘦せた筋だらけの支那人を、自分の父だと思つてゐたのである。彼の記憶の中には、あの場面は決して蘇つて來なかつた。

黒龍江が凍りついて、夜の闇に包まれた時……冷たい雨が音を立て、降りそそぎ……波はボートを噛んで……母は、熱い手で彼を抱きしめ震へてゐた。支那人の船頭は、たつた一つの橈を力一杯漕いでゐた。

そして、しみのついた壁に圍れた、汚らしい支那宿の一家。土間に藁が投げ込まれ、母は膝の上に彼をしつかり抱きしめてゐた。鋭い眼をした筋だらけの瘦せた支那人がやつて來て、若い女を食ふやうに瞞めながら言ふのである。

—元の古巢へ歸えりたいか……たつた一つ術がある……俺と來ねえ……でなきや、置いてけつぱりさ。

母は、疲れ切つた溜息を洩らしながら起ち上り、赤ん坊を手に抱きながら、頭を伏せて支那人の後に従つて行つた。

母は、黒龍江を渡つて逃げ出すと、まもなく死んでしまったのである。

李は、ロシア語を一言もしやべれなかつた。支那人と違ふのは、唯、その顔形だけだつた。支那服を着た赤毛のひよる長い彼は、雑草の中の花の様であつた。通りへ出ると、支那人達は、立ち止まつて、ぢろく彼をみるのだつた。舌を出して、彼の赤毛を掴み、碧い眼をみつめながら、口々に言ふのである。

「此奴は兩河ウヤレンシ（あひの子）だい……ラモーザ（支那人はロシア人をかく言ふ）の子だ、……リ、タゲエセザ（のつぼのこと）だ！」

李は、混血兒と謂はれても、のつぼと謂はれても黙つてゐた。彼は、屈辱を我慢して、是に慣れる様に務めてゐた。だが、時には、たまらなくなつて、かつと譯もなく、悲しく狂ひ立つて、叫ぶのだつた。

「さうさ、俺等、ラモーザだい、何が悪いんだ……悪いのは、お前達、支那人ぢやないか……」

金の粒

支那人達も、腫はなくなり、顔をつき出すと、急いで遠のいて行くのだつた。父親と一緒にゐる李の土壁の家は、村のはづれの小高い處にあつた。野原の中間に、ぼつんと、殆んど倒れ相になつて立つてゐた。それと並んで、且て納屋が建つてゐたが、今は、扉柱だけが残つてゐた。脊の高い雑草が生えのぼつてゐて、それは恰も、絞首台の様であつた。一本の鎖だけで、よろく〜と崩れかゝつた扉に向つて、狭いやつと眼につく程の小路が聯つてゐた。李は、此處で少年時代を過したのだつた。此處は、生きる爲に彼が絶望的な争鬪をつとけて來た處だつた。決して誰からも彼は庇護をうけた事がなかつた。父親は、闇の仕事をやつてゐた。人の話では、彼は紅鬚子ベニヒゲと聯絡があつたと言ふ事だつた。一ヶ月も、彼は家に歸らないことがよくあつた。で、李は、何時も自分一人で生きて行かねばならなかつた。

父親は阿片吸飲者だつた。長い汚れた煙管で彼が吸ふ時は、左右に身體を揺

りながら、床の上に坐つて、どんより、腐つた魚の様な眼をするのであつた。すると、李は、隅つこで、射止められた動物の様に、小さくなつて坐り込むのである。かうした時、よく父親がすることを承知してゐた。彼は突然、落ちくぼんだ眼で李の方をみつめると、憎々し氣に喚くのだつた。

—馬鹿野郎！ 何を、のめく／＼坐つてやがるんだ！ 古龜め！ さあ、とつとと阿片持つてくるんだ！

李は何時も黙つてゐた。逆らうのが怖かつたのである。彼は、従順に床の上から這ひ下りて、暗がりの中で破れた支那靴を、足先で探り當てると、家を出て行くのだつた。勿論何處で阿片を手に入れるのか知らなかつたし、金も持つてはゐないのである。野面を唯、ほつつきながら、夜明しをするのであつた。草の露で彼の着物は、しつとり濡れ、彼は齒をがち／＼言はせながら身を震はせるのだつた。胸のあたりや、顔を温めるために、彼は丸くなつて身を締め、

金　　粒

以前の様に、今では、泣かなくなつてゐた。唯、黙々とすべてを我慢してゐたのである。時々、彼の魂は、悪魔の様に震ひ上つて、反抗心が湧き立つてくるのだつた。

父親が不漁しやてゐる日は、李は常に、一物も口に入れないで坐つてゐた。彼には、食物のことが言ひ出せなかつたのである。飲み物は、自身でつくらねばならなかつた。そんな日、李は近所の家へ行つて一日中働くのだつた。仕事はさして力の要るものではなかつた。家畜小屋を掃除したり、大きな白石を廻したり、燕麥や大豆の入つた袋を運ぶ事だつた。夕方になると、彼は僅かばかりだが報酬として、大餅二、三個と熱い茶、煮た高粱を貰つたのである。李の運命など、誰の關心事にもならなかつた。或日、父親は隣り村の支那女と一緒になつて、村を出て去つてしまつた。李は一人置き去りになつたが、その時、十五になつてゐた。

破れこけたその支那小屋の中で、彼の新しい生活が始まつて行つた。残つた道具と謂へば、汗や脂に汚れた父親の着物と數個の茶椀、箸、そして土瓶だけだつた。だが、李は不足には慣れてゐた。彼は本能的に、獨立獨歩の生活をやりぬく勇氣と意志を感じてゐたのだつた。彼は、自分自身を支那人と區別してゐたのである。

x

x

毛は混血娘だつた。彼女の母親はエミグランドで、彼女が十歳の時死んだのである。母親が死ぬと、毛は支那式の教育をうけ、二年間、村の學校へ通つたのだつた。彼女はロシア語を少しばかり話す事が出来た。切れ眼の美しさは母似で、巴旦杏の様にまろく、墨の様に眞黒い眼だつた。十六になつてゐたが、豊かなすんなりした毛の姿は、青の濃いイチハツの花の様であつた。

— 金の粒 —

二人が知り合つた時は、李は十五で、毛は十三だつた。その頃、毛の家族は遠い村から引越して來たばかりだつた。野生の葱を野原で採つてゐた二人が初めて知り合つた時、李は、世の中には愁しい事ばかりじゃないと思つた。突然楽しい事が、黒雲の中に閃めきやつてくる様に思はれ、その閃めきの様な喜びに心の中で燃えてくるのだつた。

二人は直ぐ仲好しになつてしまつた。殊に、二人は精神的に相似た感情で融け合つたのだつた。毛も亦、子供達に、クゐひの子とかクラモーザクなどと謂はれてゐた。李は、彼女の爲に或る日、起ち上つたのである。

暑いかん／＼照りの日だつた。李は毛の家から程遠くない道を歩いてゐた。

彼女は、その時、外庭で豚を追つてゐた。

— こんにちは —

李の聲に、彼女は、立止まつて手をかさし、李だと判ると、棒切れを振つて

みせた。

—河へ行かないか……

李は、道の向ふから聲をあげた。毛は、頭を振りながら、にっこり笑つて言ふのだつた。

—お仕事があるの……御飯がすんだら、ね、

二人は、一寸の間、嬉し相に笑ひながら立ち止まつてゐた。その時、突然、高梁畑の中から、五六名の少年が出てくると、大聲をあげてはやし立てたのだつた。

—毛はあひの子、李—のつば、毛はあひの子、李—のつば、馬鹿と馬鹿で大馬鹿だ。

李は、かつと怒ると、高梁畑へ駆け込んで行つた。

—誰が馬鹿だ？

金 の 粒

彼が眞赤な顔をして怒鳴りつけると、少年達は、黙り込んでしまった。李はその二人を曳きすり出して一撃、平手打を與へたのだつた。

—どうだ、あひの子の報いだぞ、こら……

その次の者が、眞赤になつた頬をして逃げ出すと、少年達は慌て、一散に逃げて行つた。李は、追ひ掛けながら浴せかけたのだつた。

—此度来てみる、ひどいめにあわすぞ—！

それ以來、少年達は毛を戲笑ふとはしなかつた。

三年経つ間に、二人は全く一心同體の關係になつてゐた。その間、二人の記憶に灼きついた事件があつた。

それは夏の事で、野原の草はすっかり高く伸びて、黄色くなつた百合や、オレンヂ色の鬼百合、濃紺色のイチハツの花が、美しい敷物の様に咲き亂れてゐた。その頃、李は毛の父親が持つてゐた厩で働いてゐた。日中、時々、彼は馬

を野原へ追ひ出し、毛と一緒に出掛けるのだつた。

その野原で、二人は食用の草を摘み、沼や池になつた處に出て、野鴨をみつけるのだつた。二人は縫れ合ひながら蝶々を追つたり。草の中にあるバッタを捕へたり、コホロギの鳴聲に耳を澄ましたり、鉄を持ち出しては、草を刈つたりしたのである。或日、毛が刈草をあつめてゐると、黄蜂が、ふいと來て噛みついたのだつた。彼女の眼は血走り、眞赤に爛れた様になつて行つた。草の上へべつたり、腰を落すと、彼女はわつと泣き出した。李はどうしやうもなかつた。娘の泣くのを見たのは始めてだつたし、どうしたものか、彼は迷つてしまつたのだつた。彼は泣きぢやくる毛の傍に立つたまゝ、唯、鼻息を出してゐるばかりで、眼だけは、妙に焦々させてゐるのだ、急に、彼は身體を動かすと、聲をあげて言つたのである。

「おいらが治してあげるよ……」

金の粒

李が思ひついた治療法は、なか／＼獨創的だつた。村から、採んで乾かしたヨモギの火絨を持つてくると、蜂の巢をみつけにかゝつた。蜂の巢は、黄色い燕の様になつて、河に近い叢の中にあつた。で、先づ、彼のブランは、燃えてゐる草をその巢へ放り込む事である。すると、強い奴は水の中へ飛び込んで行くのだ。先づ、是は成功した。李は、焼いた火絨を次に放り込んだのだつた。すると、蜂の巢は、ごう／＼と唸りを立て、動き出すのだつた。強い黄蜂は懸命になつて、飛び出さうとしてゐた。李は、河へ飛び出して行つたが、路には、ねば／＼とリヤン(蠶)が這つてゐたので、彼はのめつてしまつたのだ。すると、蜂は裸かの李の脊中へ、ぶん／＼襲つて來た。彼は、兩手を振つて、必死に蜂を防ぎながら、河の中へ駆け込んで行つた。彼の脊はみる／＼膨れあがり、火焙りにあつた様に身體中が燃え立つのだつた。唯、水の中へ、頭ぐるみ突ッ込めば、ほつとするのだつた。

夕方になると、彼は蒸を出してゐた。自分の家に歸へると、庭の上でのたうちながら、呻めきつゝけたのだつた。薄明りの中には、ぐる／＼大きな黒い王が、彼の顔の上に、迫つてくるかと思ふと、眞赤な舌をした大きな犬が現れてくる。玉と犬は、天井から部屋の隅へ飛んで来て、次第に彼の身邊に迫つてくるのである。その時、壁の向ふから、子供達の高い聲がわん／＼響いて来た。

—李—はのつぼ、あひの子だい！ 李は—のつぼ！……

毛が来た時、彼は幾分、快くなつてゐた。彼女は、燭台と茶瓶に支那酒を入れて持つて来てくれた。

—これを呑めばいゝのよ。

彼女は、枕元に茶碗を置いて言ふのだつた。

—熱いよう！

李は、干からびた唇を舐めながら言つた。

金の粒

「扇であほいであげるから……」
毛は、床に上ると彼の枕元に坐つて、支那酒を呑ませたり、大きな扇で彼の顔に風をあてゝやつたりするのでつた。その夜一夜、彼女はさうして坐つてゐた。燈心は、すっかり燃え盡して鈍い光になつてゐた。時々、李は眼を開け、毛の黄色い光に、ぼんやり、ぼやけた顔をみつけては、弱々しく微笑むのだつた。此の夜の記憶は、李の心の底へ、深く刻みこまれ、彼は毛に深い感謝を感じたのだつた。

x

x

十八になつた李は、人生を稍々違つた風を感じ始めた。一定の目的が出来てゐたのである。その考へは、毛と或る話をしてから突然、起つたものだつた。或夕暮れ、二人は高粱畑で逢つた。リラの花が、暗闇の中に立ちこめて、灰色

の支那家屋が枯草の山の様にぼやけ、村には、夕暮の慌たらしい聲が聞えてゐた。毛は、甘いショートケーキを持って来た。

—あたしが、五、六個取つて来たの……お客様があつたの。

彼女は、いそぐかう言つて、石臼に並んで腰を下ろすと、細かく割つて食べ始めた。

—おいしいよ……

李は、うき相にむしやぐやるのだつた。

—ほんとに、おいしいわね……

毛も、もぐぐさせながら言つた。

—お客様が持つて来たのよ……町でこしらへてるんですつて……

—誰が来たの？

—ヒールンヅンつて、鑛山の把頭とその番頭よ……

金の粒

—お……金持かい？……

李は、感歎の聲をあげたのだつた。

此の時、外庭から毛を呼ぶ聲が聞えたので、彼女は、急に飛び出したのだつた。

—待つてよ……直ぐ歸へるから……

やがて、毛は昂奮して戻つて来た。並んで腰を下ろすと、ときれぐに溜息をついて、急に、泣き出したのだつた。

—あの人達、あたしを買ひに来たの……扉の外で聞いたの……一年経つたら、私を差し上げますつて、父さんが言ふのよ……

毛は、こみ上げながら、言ふのだつた。李は、かつと血が逆流して、こめかみが冷たくなる様に思つた。と、彼は急に空虚な感情に襲はれて、一年がさつと流れ去つた様な感じになつた。彼には、此の時、どうでも扱まねばならぬと言ふ目的が定つたのだつた。支那人の習慣では、毛には三百留出すのだつた。

李はその夜、一睡もしなかつた。轉々として、遂には起き上り、部屋の中を歩いたり、又、横になつたりしてゐた。朝方、彼は、ヒイルンヅンに會ひに行つたのだつた。彼はひどく、傲慢な眼をして李をみつめた。派手な模様つきの黒い旅行用の寝巻を着た彼は、床に腰を下ろして、黄色い茶を啜つてゐた、敏だらけの彼の顔には、細い髯が顎の下まで垂れてゐて、病人の様に膨れた眼をしてゐた。彼の頭は、長い馬鈴薯を想ひ出させた。彼は、何となく、肥つた蛙の様だつた。

ヒイルンヅンは、厚い髯を舐めると、李の足の先から頭の上まで一瞥して言つたのである。

—何ぢや？

—ヒイルンヅンの旦那は、鑛山を持つてなさる相で……私は鑛山で働きたいんですが、……それで、お願ひに……

金の粒

李は頭を下げながら。言葉をつないだ。ヒイルンヅンは、ざつと、李をみつめてゐたが、李の心底を見抜いたかの如く、言つた。

—いゝさ、じやが、お前は少しした働きは出来まい、力が足らんからの。じやが、來たけりや、來るがいゝさ。

—私は働きたいんです……

李ははつきり答へたのだつた。

x

x

鑛山は、廣い盆地の中にあつて、それは、大きな綠色の長方形の皿の様だつた。白樺の樺に支へられて、汚れた土が山のように掘りかへされてゐた。

李は、朝早く鑛山へ着いたので、盆地の上には薄霧が垂れてゐた。ヒイルンヅンの番頭と稱する男は、彼を、隅つこの土地の處へ連れて行くと、言つたの

だつた。

此處が、お前の持場だ！ お前の親方はフン・チエン・リンだ……

そのフン・チエン・リンと言ふのは、見ると、彼の父親だつた。李は、一眼で彼と知つたのだつた。三年の間に、父親はひどく老いぼれ、瘦せこけて、彼の顔は焼リンゴの様になつてゐた。二人は、顔を見合すと、素氣のない短い言葉を取り交した丈だつた。挨拶もしないで、父親は、昨日別れたばかりと言つた風に訊くのだつた。

—働きに來たのか？

—ええ……

—俺ん受持區だな？

—ええ……

—よからう手前の場所は、隅つこの穴だ。

金の粒

かうして、李は働き始めた。仕事は非常に烈しく、朝三時から起きて、夕方晚く迄働くのだつた。乾燥した處にある砂を掘りあげると、トロツコへ積込んで運ぶ、やがて、特殊の洗鑛桶で砂を洗ふ谷川へトロツコを運んで行くのだ。で、砂金の採取高に依て稼ぎ高を貰ふのである。

父親との關係は、依然の様に、冷たく打ち融けないまゝだつた。處が或時、突然、態度が變つて、李はすっかり度膽を抜かれたのだつた。彼は李を飯店へ連れて行くと、甘さうな肉團子など取つて、御馳走する、と、熱い支那酒に眞赤になつた顔を李に向けて言ふのだつた。

—お前は若いんだ、だから、お前の面倒をみて呉れる人間が要る。他の野郎共が、お前の素性を隠つたつてさ、何も氣にすることはないさ、俺に言ひねえ俺がそいつらを怒鳴つてやるからな。

李は、今迄、自分を庇つて呉れた事のない父親の言葉に、すっかり感激して

聲を震はせて言つたのだつた。

「噓はれたつて、私は構はんですよ。慣れつこになつてますから。

それ以後、父親は、何かと李を庇ひ始めた。仕事の上でも、とかく、彼の側に立つて世話をするのだつた。風邪をひいて李が寝込んだ時など、父親は、片時も、離れないで看護するのである。李も亦、何時しか、寒さ、飢え、暗い夜の淋しさなど、父親に訴へて、二人は眞實の父と子の様になつてゐた。

或日、又、父親が李を御馳走に招いた。その夜は、生温い夏の夜だつた。一時間ばかりしたら、彼は夜業に出掛けねばならない、開いた窓へは、盆地の方からトロツコの軋る響きが流れてゐた。薄闇の中に灯がぼんやり浮び出た。李は今迄、感傷的になつた事は一度もなかつたのだが、此の夜、彼は妙に感傷的になつてゐた、毛の最近の便りは、一ヶ月前に來たもので、鑛山主のヒールンズンは毛を嫁に迎へに行つたと言ふ噂も聞いてゐたのだつた。だが李は、鑛山

金の粒

主が毛を連れて何時歸るかと言ふ事も、毛との關係も、それ以來知らず、たので、ひどく氣掛りになつてゐた。彼は、以前の様に、夢もなく、唯、心を傷めて感傷的になり、焦々と仕事の終りを待つばかりだつた。契約期間にはまだ一ヶ月残つてゐた。それ迄に、李は三百留稼いで、稼ぎ高は何時も、しつかり身體につけて盜られない様にしてゐた。労働者の中でよく盜まれるからだつた。

その夜、料理屋での父親の話は、金の話で、二人は、水煮きの肉團子を食べ終ると、父親は身體を寄せながら小聲で言ふのだつた。

「奴ら、お前を殺ちして有金、全部捲上げ様としてゐるんだぜ……俺は、ひとりと小耳にしたんだ。要心しなくちやあなあ……」

李は、眞蒼になつた。金を奪られる―それは唯一の希望を失ふ様なものだつた。

「有難うさんで、よく言ふて下さつた……」

父親は頭をあげると、急に、聲を柔らげ、妙に愛想よく、囁くのだつた。

「お前、隠したりしないで、そつくり、俺に預けときぬえ、えッ、すりや、お前、確かなもんさ。お前が家へ歸るときには、俺が返してやるさ、な。」

で、李はすつかり父親を信じてゐたので、言ふなりに金を出したのだつた。

契約の最後の日が来るまで、李は彼を信じてゐた。稼ぎ高は既に五百留になつてゐた。さて、出發の日になつてみると、父親は突然、姿を晦まし、李は、まさか、あれ程、よくなつてゐた、父親に欺され様とは思はなかつたのだつた。

事務所では、李の話聞いて皆、同情して言ふのだつた。

「此度、彼奴を搦へたら……奴は、紅鬚子の古狐でな、首を刎ねてやらなきやならん奴だよ。彼奴に欺されたのはお前一人じやぬえからな。」

「私は一體どうなるんがせう?……」

李は、悄然として言ふのだつた。だが、どうしやうもなかつた。喉が詰つた

金の粒

縁になつて、彼は事務所を出ると埃つばい道をとぼく歸へつて行つた。彼の懐には、飯を食ふ金も残つてゐなかつた。

數日経つて、故郷へ歸へつた時は夜も更けた時刻だつた。毛の家の外庭に立止まると彼は、耳を澄ました。其處は靜まり返つて、目張りの紙が窓に白く光つてゐた。株が軒に垂れ下つてさらくくと光り、李は胸が烈ける様な感情に襲はれた。此處は、彼が夢に描いてゐた最後の目的地だつた。愁しい胸を抱いたまゝ、李は暫く立止まつてゐたが、やがて、自分の家へすくく引返して行つた。

雑草と龍芽草が、小屋の周邊に生え繁つて、あの昔懐しい小路は、草の中に埋つてゐた。小屋の中は、昔のまゝに、空虚で靜かだつた。李は、その夜、泣きながらねたのだつた。

x

x

李は、又、烈しい、絶望的な明け暮れを始めねばならなかつた。彼は一日中、熱い汗を茶碗で呑むだけで、働きつゞけて行つた。

毛と逢ふのは稀だつた。歸へつて來た明るる日、彼女は再會を喜んで、飛び躍りながら嬉し相に歌など唄つたりして言ふのだつた。

「春になれば……」

彼女は、急に眞剣な顔つきになつて、強い口調で駄目を押した。

「あたしは、きつと、くく十回でも春を待つわ……」

「ヒイルンズの親爺は？」

彼女は、彼の頬をなでながら、暗い顔をして、靜かに言つた。

「あの人は……ねえ、あの人は、老いぼれよ！誰が、あんな人のお嫁なんか

李は、彼女の言葉に元氣づけられた。希望と勇氣を取り戻した。冬が音もなくやって来た。野鴨も鵝鳥も、沼と河邊から姿を消した。夜がくると到る處が凍った。何處の家の外庭も、野の黄色な作物で一杯になつてゐた。或夜、雪が降つて、野も、丘も、褐色の支那家屋もすっかり白くなつてしまつた。納屋の磨石がきしきし軋つて、煙突から勢よく烟りが立昇つてゐた。朝早くから、夜遅くまで村では、紛挽き機械の音が止まなかつた。

此の冬は、李には惨めな冬だつた。働きの烈しい割に、収入はほんの食ふだけだつた。夜は更に惨めで愁しかつた。破れた小屋の中で、夜を明かすには、高粱を伐つて部屋を暖めねばならなかつた。

雪嵐の夜は一睡も出来ないのである。小屋は、風に揺れて崩れ相になるのだつた。河向ふから、誰かゞ、凄しい響きを立てゝやつて来たかと思ふと、折れ

た木の枝を屋根へ叩きつけるのである。窓は強烈な音を立てゝ揺らぎ、床までがた／＼響き、胸も背も凍えて、李は震へながら朝を待つのだつた。

x

x

鑛山の事務所では、或時、新しい鑛脈を見つけた者には、政府から賞金を下さるぞと言ふ達しが出たのである。李は、この話を想ひ出して、彼は、特別、目當も、道具もなかつたのだが、何となく、希望をかけてゐた。金鑛を探す計畫を彼は何時しか樹て始めたのだつた。

黒い野に、緑色の草が出る春になつて、李は山へ出掛けた。冬中貯め込んだ金で、どうやら、一ヶ月は大丈夫だつたので、李は、村から村へ金鑛を尋ねて行つた。五日ばかり山を探ると、又、次の村へ出掛けて行くのだつた。

谷川や盆地などに入り込んで、鑛石を探し出すと、三回、神に祈つて割つ

てみるのだつた。彼の顔は、陽灼けがして益々男らしく、強くなつて行つた。密林の中では、彼は時々、獵師に出喰はした。昨日探したばかりだが、と言つて、彼等は、隠ふのだつた。で、二人は一緒に獵を始めたりなどしたのだが、李は飽迄、成功を確信してゐた。やがて、鳥が囀る頃になつて、郭公鳥が聲をあげ、ほうほうと梟が鳴き始め鶯が呻き出した、密林の春はひどくさわめいてゐた。夜がくると、焚火の前に腰を下して、白樺や松のさら／＼と言ふ響きを聴いてゐると、李は、妙に愁しくなるのだつた。感傷が襲ふてくると共に、自信がぼろ／＼と消えて行つた。

あてどもなく、来る日も来る日もさ迷つてゐる中に、彼は、遂に金鑛を發見したのだ。高くなつた山道から、彼はふと、思ひも寄らない處に砂金のあるのを見出した。そこは、前方が綠色に拓けた窪地になつてゐて、その間に黄色く光りながら、谷川が流れてゐた。その岸邊には、泥柳と白楊が茂つてゐた。高

い木の茂つた山がそこをぐるりと包んでゐたのである。

李は、わな／＼胸を震はせながら谷川に下りて行つた。岸邊からみると、川の中は、赭い砂が塊つてゐて、それに白い泡の様なものが點綴してゐたのだつた。土塊の一つをもぎ取つて、篩にかけて砂を洗つてみると、草の莖と一緒になつて、大きな金の粒が、きら／＼光つたのだつた。李は、胸まで金色になつた様に思つた。彼は躍り上つたのだつた。

川は、銀色の水になつて流れてゐた。白楊の枝が水面に髪の毛の様に垂れ下つて、さら／＼と山の静けさの中に音を立てゝゐた。

李は遂にすべてを獲得した。

白壁の小ざつぱりした河邊の家……白樺の木柵……掘り起された島には鶏がこつ／＼動いてゐて……毛が紺色の夜着を來て手を差し延べながら、やつて來る。彼女は嬉し相に微笑むでゐるのだつた。

(康徳九年十月)

金の粒

5

ミイロウン・シャバアノフの最期

ボリス・ユリスキ

ミイロウン・シアバアノフの最期

思ひ掛けもなく、私は、此の舊教徒の部落に入り込んでしまった。森林に囲まれて一租界を作つたロシア人村の中へ、當こみ商賣の商人と一緒に、私は、つひ、入り込む破目になつたのだが、彼は、哈爾濱から、下着類や、タオル、卓子掛、絹製の極く派手な色と切り込みのついた切れ地類を、しこたま持込んで来たのだつた。村では、彼は商品をへかす事にはならなかつた、で、精力的な一九四〇年代の行商人として、彼は、二十幾露里向ふの舊教徒の部落まで出掛けやうと決心したのだつた。

早速、同行してくれと、私は頼み込まれてしまつた。商人は、相當、教養のある男の様だつたし、彼の描いた原始的な滿洲にあるロシア人村の繪は、實に

ミイロウン・シアバアノフの最期

巧く描かれてゐて、記者の職業的好奇心を大いに惹くものがあつた。で、私は同意して、後悔しなかつたのである。

私達は、夜明け方に出發した。先づ、私の興味を惹いたのは、私達の案内女で、彼女は花模様のついた青いサラファン（袖なし帯付きの農婦の衣服）を着て、胸から下へエプロンをつけた巖丈なロシア女だつた。彼女の手は赤らんで、短く硬い指先をしてゐた。私が、驚歎した様に物を訊くと、彼女は氣輕に、森の租界地へバタを持って行つた歸りです、と言ふのである。男達が、獵に出たり家で働いてゐたりして忙しいからだつた。

都會文化で柔弱になつてゐる私共二人は、數時間、ぶつ通して、枕もスプリングもない一頭立のいともお粗末な村馬車で、擡られて行つた。舊教徒の村は、こんもり木の茂つた小山の向ふに拓けてゐて、古いシベリヤの村の名残りを殘してゐた。此の圖はロシアの風景であつた。兩側は、疎らに白樺と白楊のある

埃りつばい道が村へ流れてゐて、道脇の水溜りには、亞麻の様な白つばい頭をした素足の男の子が、二人、牛番をしてゐた。入口に近づくと、私達に向つて、犬が飛びついて来て、馬の顔にわん／＼と吠えかゝるのだつた。その時、私は、確かに、近くの農家の屋根の向ふに、ゆるりと垂れ下がつてゐた井戸の釣瓶がかすかに動くのを見とめたのである。

x

x

住民達は、古來から殆ど變らない生活を、そのまま續けてゐる。滿洲の地方にあるこの舊教徒の村は、少からず、奇妙な印象を與へるのだ。最近十年間の狂烈な文明の嵐は、此處にも流れて行つたが、實際は、生きるに必要なものだけを吸収し、餘分のものはずつかり捨て、彼等は傳統を守つたのだつた。

嚴丈な髯面の男達は、今でも、數世紀前、彼等の祖先が用ひてゐた着物をそ
 ミイロウン・シヤハアノフの最期

のまゝ着てゐるのである。女達のサラフアンも亦、昔變らぬもので、色々な色模様のついた胸下を硬く張つたものである。女達が未だつけてゐるものに、頭を包む布切れの一種で、シンヤシムールクと言ふのがある。又、會堂の人達だけではあるが、此處の老人達の名はイエーロン、ラリオーン、カルリストラト、エリコニーダ、ドロフエーヤーなどと言ふのがある。

彼等は蓄音器やレコードの中には、惡魔が巢喰つてゐるのだと信じ込んでゐるのである。老人達は、あれは、手品じや、頭で作り上げたベテンじや、人間の耳の不完全さにつけ込んだ欺瞞じやよ、などと言ふ。古書にも、そは世の末期にし現はるゝものなれ、とあるわいと言ふのだつた。村の住民の一人が、進んで、私の案内者になつてくれたのだが、彼は、骨ばつた瘡痕面の、鋭い眼をした、脊のさして高くない舊教徒だつた。

最初、彼は二週間ばかり、哈爾濱に居た事があり、従て、自分は他の誰より

も文明人だと自認してゐる旨を、性急に私に告げたのである。生れ故郷のこの村に對しては、彼は、稍々卑下した薄笑ひを浮べながら、都會生活の方がいゝですよと言ふのだ。ひどく、おしやべりで、どうやら彼は、峻嚴な舊教徒の孤立主義を守る村人達と、反りが合はない男の様だつた。ともかく、例外と言ふものは何處にでもあるものである。彼は、サムイール・エフセーウイツと謂つた。彼は、なか／＼良心的に、案内役の務めを盡してくれ、必要な時は進んで説明をしてくれるのだつた。

―あれが、ジノウビイ・シャバアノフの農家ですよ……寄つてみませんか？
彼が指したのは、村のはづれにある、丸太造りの、特別、特徴もない農家だつた。で、私は尋ねてみた。

―何かあるのかい？

―行つて御覽なさい……聞けば、新聞種になるものがありますかね。例へば、

・ミイロウン・シャバアノフの最期

ミイロウン・シャバアノフが紅鬚子と闘つた話など、書くのにいゝ材料ですよ。

盛んに彼が言ふのである。で、私達は、その家へ入つて行つた。

赤ん坊を抱へた若い女が出て来て、私達を見ると、急に赤ん坊を、物珍らし氣に、ちろ／＼私をみつめてゐた素足の女の子に渡して、一寸、頭を包んだ布切れに手をやると、早口に言ふのだつた。

―ジノビイーさは、茶園ですが、ちよつくら、あゝ、待ちやしてくらつせ、わしがひとつ走りぬてきやすで……

サムイールは、難しい顔をしながら、私の方に頭をふると、口を入れた。

―哈爾濱から來なさつたお方じやで、ミイロウンどんの話を聞きさ來なさつたじやが。

―待ちやんせ、待ちやんせ、ちよつくら、わしが……

若い女は、陽灼けのした顔に白味がかった碧い眼を、きらりと投げると急いで扉の向ふに消えてしまつた。

私は壁の側にあつた椅子に腰を下ろした。部屋の隅には、くすんだ舊教徒の聖像が、眼だけ光つて覗いてゐた。

—あれが、ミイロウンの肖像です……

私の案内者が、突然、言つた。

—何處のミイロウンだ？

何の事だか、一寸、見當がつかず、私は、彼の指す處へ眼をやると、そこに、額縁に入つた寫眞が掛つてゐた。

—それ、先程、申しましたあの男ですよ……あつしらの中じやあ、有名な男で、政府から表彰されましたよ。

私は掛つてゐる寫眞に近づいてみた。寫眞では、四十歳位の、巖丈な肩幅の

ミイロウン・シヤバアノフの最期

廣い男にみうけられた。二筋になつて、ぎつしり生えた顎鬚は、彼の胸まで垂れ下つて、輝いた眼は、眞正面をみつめてゐた。精力的な、意思の強い面魂で、何となく、私はコサツクの英雄、エルマークを思ひ出した。彼の眼は、きつと、灰色で、眼前のものを見る時は瞬もしないだらうと思つた。

やがて、女が歸つて来て、二十五歳位の、白く光つた口髻と顎鬚を疎らに生やした若者を連れて來たのだつた。帽子を脱いだ時、若者の額へ、藁の様な色をした、何となく奇妙な刈り方をした、豊かな頭髮の房がだらりと垂れ下がつてゐた。後で知つたのだが、舊教徒は一種特殊な方法で頭髮を刈るのである。

額の毛と後頭部の縮れを残し、頭髮の中間は、額から腦天へかけてと、兩横に、二筋十字形に刈るのである。

—こんにちは、……

無器用に、若者は頭を下げると、足を組んで腰を下ろした。で、私は口を切

つた。

「あなた方の様子を拜見に來たのです。御邪魔じやありませんか？ 御噂は承りましたが、あなたの御名前は、當地では、相當、知れ渡つてゐる様です
すね？」

「邪魔じやごわせんた……名前のこたあ、わし共は、シヤバアノフ一家でござして、わしさは、ジノヴィイちゆて、ミロリンが息子でがすが。

かう言つて、彼は素朴な調子で話すのだつた。シヤバアノフの家では、私達は長い間坐り込んで話してから、白く光つた頭を下げる主上、恵みあれと口誦さむジノヴィイと主婦とに送られて別れたのだつた。案内者は、通りへ出ると、私に言ふのだつた。

「ミロリンの話は面白いでせうが。新聞にお書きになりますでせう。なら、事務局で讀みますよ。

ミイロウン・シヤバアノフの最期

一九三〇年の初め頃、舊教徒の一團は、家族や家畜、家具一切を持つて、アムールの氷河を渡つて滿洲へやつて來た。その途中、彼等は沿岸で國境警備隊と闘つて來た。彼等は、追撃の敵を巧みに避けながら、器用に敵の眼玉を撃つて、一團の半數が無事、目的地に避難したのであつた。此の中に、家族を連れたミイロウン・シヤバアノフがゐたのである。昔のドニコノフのロシヤは、滿洲に移り、其處で原始的なシベリヤの村々を作つて、生活を打樹てゝ行つた。滿洲風の村の名稱を使つて、舊教徒はクシリインヘエと言ふ代りに、クシリインハと言つた風に、そのロシヤ名を捨てゝしまつた。

ミイロウンは、彼等の中で最も教育のある男とされてゐた。哈爾濱にも行つた事があり、舊教徒の代表達が土地問題で、詰り、滿洲領内へ移住許可申請に

出掛ける時には、彼は先頭に立つて盡力したもので、読み書きの出来る點でも彼が一番だった。

ミイロウン・シャバアノフが、村から半露里離れた、魚釣りの場所として區切られた様な河岸に、どうして、自分の家を建てる様になつたかは不明である。かうした村里離れた處は、紅鬚子ベニヒゲコの殘黨が現れる恰好の處で、夜は女子供ばかり居る一軒建ちの農家を襲ふてくるのだつた。ミイロウンが、長男のジノヴィイを連れて獵に出た留守の事で、歸へつてみると、家は焼かれて灰になり、彼の妻と三人の小さな子供達は殺されてゐたのだつた。此の事件が起つた時はかうだつた—或る朝、舊教徒の村からミイロウンの家のあるあたりから、烟りが燃え上つてゐるのが見えたので、村人達が出掛けてみると、既に家は焼けた後で、その焼け跡の中に、彼の妻と三人の子供達の屍體が眞黒くなつてゐたのだ。太い梁木がめらめらと烟りの中にくすぼるばかりで、手のつけ様もなかつたの

ミイロウン・シャバアノフの長期

悲惨な家族の破滅は、ミイロウン・シャバアノフの心に烈しい衝動を與へた。息子の話では、少しも、心の傷手を彼は口に出さなかつたと言ふ事だつたが、暗い顔をして、ひどく澁面をつくつたまま、黙り込んだ彼は、夜になるまで、呆然と、焼け残つた家の前に棒立ちになつてゐたのだつた。彼は、數日間、一言も口を利かなかつた。やがて、黙々と、醜しい顔をしながら、彼は村はづれに家を移し始めたのである。彼の愁しみを知つてゐる村の男達は、手傳ひにやつて來た。生き残つた長男のジノヴィイは、やつと十六歳になつたばかりだつた。その日から、ミイロウン・シャバアノフの空想的な逸話が、始まつたのである。彼は、殺害者を探さうとしなかつた。家が出來上ると、彼は、息子と共に新しい丸太小屋に移つて、まもなく、二日間ばかり姿を消してしまつた。やがて、歸へつてくると、長老の處へ行つて、黙つたまま、部屋の隅に、銃身に欲

形文字（紅鬚子賊の紋章たる）をつけた二挺の銃を放り出し、袋の中から二つの黒ずんだ血痕のある人間の耳を取り出したのだつた。是は何れも右の耳だつた。

かくして、彼は、慄慄な森の掃蕩者となり、紅鬚子さへ火をみる様に怖れ始めたのである。此の話を聞いた時、私は、はつきりと、ミイロウン・シヤバアノフの當時の不敵な姿を眼にみる事が出来た。脊丈が高く、肩幅の廣い、狭がつた青銅の様に硬い顎鬚を生やし、ぐつと高く眞直ぐな鼻、横に鋭く刻み込まれた額の皺、その生々しい顔を私は思ひ浮べた。密林の中に入り込んで、紅鬚子の巢窟へ野獸の足跡を辿りながら、のつしのつしと行く彼の姿が、又、はつきりと、浮んでくる。鍛ひ上げられた鋼鐵の如く、鋭い彼の眼は、密林の中に動く人影を求めて、らん／＼と輝くのであつた。はつきり、敵を見究めると、彼の手は、靜かに頬の小銃に延びて、微塵の假借もない狙ひが定まるのである。

ミイロウン・シヤバアノフの最期

ミイロウン・シヤバアノフは、生ける人の如く、私の眼前に立つてゐた。彼の後の経緯と悲劇の最期が、まさ／＼私の懸望を流れて行つた。

ミイロウン・シヤバアノフの手に掛つて、屍體となつた紅鬚子の数は、數知れない。彼は、一發の下に彼等を斃した。青銅心のついた鈍角のミイロウンの弾は、拳程の大きさになつて、敵の傷痕を残したのである。彼は、此の手製の銃弾を、特殊な型に詰めてゐた。ミイロウンは、常に毛を傷めない様に、弾痕の小さな跡を残すだけで、野獸を射殺してゐた。ミイロウンは、堅い木で作つたステツキに切口をつけて、屍體の數を算へてゐたと謂はれてゐる。私は、そのステツキをみなかつたが、ミイロウンが村から姿を消して以來、誰も、そのステツキをみたものがない相である。

ミイロウンは、よく、殺した男の武器を持ち歸へる事があつた。その武器は、近くの町の森林警備隊へ、寄贈してゐた。で、彼はその褒賞として、郡の長官署名の感状と金一封をうけてゐたのだつた。郡でも、地區の探査を彼に依頼し、ミイロウンも、進んで出掛けると共に、時には、小銃やモーゼル銃など獲物を得て歸つてくるのだつた。

その頃、森林地帯を横行してゐたのは、紅鬚子の一團の中の殘黨で、ミイロウンは、此の手合も亦、容赦なく片付けてゐた。或時、此の一味は、日頃狙つてゐた敵、ミイロウンをどうしても殺してしまふと言ふ所から、彼が山へ探査にくる時期を狙つて、組織的な尾行を始め、遂に八方から包圍攻めにする事になつた。最初、連中は、彼を生捕りにして、頭領の位置を與へ、どつさり金をやつて、仲間に入れやうと思つてゐたらしい。で、彼の處へ一味の使者がやつて來たのだが、彼はその返答として、使ひの男を撃殺したのだつた。で、いよ

ミイロウン・シャバアノフの長期

いよ一味の包圍襲撃をうけてしまつた。

ミイロウンを包圍した一味は、四十に近い銃口を差し向けて來た。朝から陽が落ちるまで、一人の男と四十幾人かが渡り合つたのであつた。陽が西に傾いた頃、ミイロウンの彈藥函には、手持六十發の中、二十發しか残つてゐなかつた。二度ばかり、紅鬚子の一味は、クタアツ！と言ふ野獸の様な喚聲をあげながら、ミイロウン・シャバアノフの伏せてゐる一面、木の生え詰つた頂上に向つて突撃をやつたのだつたが、二回共、目的を達しないで、伏せたまゝ再び、ちぐさぐさを射撃が開かれて行つた。ミイロウンは、無駄な弾は使はない、一味が行つた此の二回の突撃の際にも、十名餘の紅鬚子を打倒したのである。その後、更に十名ばかりを、身を乗り出して撃ちとめてしまつた。夕方になつて、月明りが出てくると、ミイロウンは包圍から抜け出て、残つた敵をそのまゝに逃げ出したのだつた。その翌朝、舊教徒の人達が争鬭の現場に行つてみると、そ

ここには、國民黨のマークや赤色記章をつけた灰色の外套を着た賊兵の屍體が十
七ばかり轉がつてゐるのをみつけたのである。殘念ながら。銃は二挺しか残つ
てゐなかつた。殺された賊の彈藥と共に、其の他の武器彈藥一切、目ぼしいも
のは持ち去つて行つたのだつた。

此の争鬭があつてから、益々復讐心に燃えた紅鬚子の一味は、村はづれにあ
るミイロウンの柵造りの出來てゐない家を夜襲し、遠くから、二度、窓と扉に
向けて一斉射撃を加へたのだつた。彼等の作戰では、寝てゐるミイロウンは、
あはてて玄關に馳け出し、眞直ぐ銃口に向つてくるだらうと思つてゐたのだつ
たが、案に相違して、ミイロウンは落着き拂つて、息子に床に伏せよと命じ、
自身は、下着のまゝで、銃を握ると、反對側に出た窓を越えて出たのだつた。
紅鬚子の一味は、一寸の間、待伏せてゐたが、急いで引返したのだが、既に銃
聲を聞いて、村人達は眼を覺ましてゐたし、犬も又、烈しく吠え立てゝゐた。

ミイロウン・シヤバアノフの最期

馳け出して來た村人達は、紅胡子の一團を逆襲し始めた。あちこちへ逃げまど
つて、一味の残つたものは僅かだつた。三名の紅胡子は、鬨討をやつたばかり
に生命を落し、彼等の首は、三挺の銃と一緒に、森林警備隊本部へ持つて行か
れたのだつた。

× ×
ミイロウン・シヤバアノフが、若し、その日、森の租界地へ出掛けなかつた
ら、何の事もなかつたのだが、宿命と言はふか、彼は、行くことになつたので
ある。

狭い軌道車の沿線にある租界地には、ロシア人の従業員が勤めてゐた。數年
間経つ中に、其處には、商店が出來、飯店が開かれ、郵便局などが建つて一應
の村になつたのだつた。村は河上にあつた。夏になると、従業員達の處へは哈

兩濱から親戚がやつて來た。それらの夫人連や娘達は、派手なビジャマや麥藁帽子と言つた避暑地風だつた。そして、その姿で、村のあちこちや河、べりをぶらつくだので、滿洲人の若い連中にはセンチションを起し、舊教徒はひどく憤慨して、彼等が近づくと反つぽ向いて唾を吐くと言つた風だつた。

アンナ・ヴィクトローフナは、二週間ばかり、姉の家に滞在してゐた。彼女は、伐材工場の管理者と結婚したのだが、一年前に、夫と別れて、今では、言ひ寄つてくる男達や、舞踏會や夜毎に誘ひをかけ、時には、無様な態度をする男女達等から逃れて此處へやつて來たばかりだつた。

彼女は、三十六だつたが、全く娘の様に若々しい豐滿な身體をしてゐた。彼女の笑顔と金髪は、時々、以前の夫より遙かに立派な相手を捉へる手段ともなつてゐたのである。彼女の周邊には、常に、金のある讚美者がつき纏つてゐたが、彼は、心秘かに何時かは、彼女が目廻狂しい享樂や御接待に根まけをして、

ミイロウン・シャバアノフの最期

自分と結婚してしまふだらう、と言つた夢を描いて彼女に仕へてゐる男であつた。この男は波蘭人で、スンデエツキーと言つて、中肉中脊の、硬い口鬚を生やした頭の禿げた男で、心から深切で氣のつく様子だつた。アンナ・ヴィクトローフナに對しては、彼は何時も、念の入つた波蘭人式の禮儀で、彼女の手に接吻してお世辭をのべ、何かと接待に努めるのである。然も、最も大切な事は、彼は、ほんの瞬間的な歡心でもいゝから彼女を歡ばし、そして、かう言つた事につきつかり彼女が倦くのを我慢強く待つてゐるのだつた。避暑には、スンデエツキーはアンナ・ヴィクトローフナと一緒にやつて來て、土地の従業員の一部屋を貸り取つたのだつた。

かうして、この村で、ミイロウン・シャバアノフとアンナ、ヴィクトロノフナが、一つの運命に弄ばれる結果となつた。

ミイロウンは、此處へは買物に來たのだつた。馬を居酒屋に残すと、彼は店

から店へ飛び廻つて、買物に夢中になつてゐた。その時、或店先から出たとたんに、突然、彼を呼びとめたものがあつた。

「ミイロウン！」

振返つてみると、彼の方へ、ゆる／＼近づいて来る男は、伐材工場の管理人をやつてゐるソフロノフだつた。――彼と並んで、都會風の見知らない女と、白いバナマを被つた餘り背の高い男がやつて来た。ソフロノフとミイロウンの關係は、取引の上であつて、ソフロノフは肉の代りに、彼に、彈丸鑄造用の火藥と鉛を調達してゐたのだつた。で、ミイロウンは、薄青い服を着た都會の女をみつめながら、立止まると頭を下げた。

「どうだい、おめえの事あ、新聞で書き出したじやねえか？……」

ミイロウンに近づくと、ソフロノフは鼻眼鏡を通して眼を細めながら陽気にしゃべり始めた。金髪の女は、思ひのこもつた眼差しをして、ミイロウンを

ミイロウン・シヤバアノフの最期

みつめてゐた。彼は、ぢろりと、彼女を一瞥したが、女が眼を伏せないので、視線を反らすと一寸、眉をしかめた。何となく奇妙に不安な感情が、彼を押し覆せて来るのだつた、彼は、突然、此の場から逃げねばならぬ様に思はれた。此の時の感情は、後になつて、彼自身の口から、彼女に告白したのだつたが、彼は踏み止つてゐた。

「有難てえこつた！」

ミイロウンは、無器用に、嚙れ聲でかう言ふと、肩をすぼめた。金しほりになつた様に氣詰りな感情が、ます／＼彼の全身をまきつける様に流れ始めた。ソフロノフは、新聞紙上に書いてゐる彼の活躍ぶりを、べら／＼としゃべり続けるのだつた。

ミイロウン・シヤバアノフの勇名は哈爾濱まで響いてゐた。哈爾濱の新聞記者の一人が、偶々此の事を聞き込んで、現代の傳説的英雄、密林のロビンツツ

トなどとでか〜と報道したのだつた。その記事の大半以上は、報道者の空想を擴大描寫したもので、その中には、紅鬚子の女頭目「シンファウデオ」と謂ふ、通稱、黄金の女々と呼ばれる女で、次に頑強極まるシャーズ等主なる紅鬚子を夫々出し、ミイロウンの姓は何故か、チャバアロフとなつてゐた。

女と、パナマ帽の小さな男は、ソフロノフと並んで近づいて來ると、ミイロウンの胸を挽き亂す様な香水の匂ひがぶんとした。此の女が傍にゐることは、彼の神経を妙に昇ぶらせる。密林の男の本能として、彼は無意識に敵意を感じたのだつた。彼は其場を去らうと思つた。新聞の話の續きも忘れて、彼はソフロノフと別れ様とした時だつた。女が口を切つたのである。

ミアレクサンドル・パブロウイツチ、妾達を紹介して下さいな。素晴らしいわい。

金髪の女は、慮した風も、羞かしい顔もしないで、氣樂に、自分から、ミイロウン・シャバアノフの最期

ミイロウン・シャバアノフの眼を正面にみつめながら、手を差し伸べたのだつた。その手は、彼の大きな掌の中に握り込まれてしまつた。ミイロウンの顔は、強烈な血の逆流を感じて稍々暗くなつた。香水の匂ひは彼を包み込んだ。やがて、彼は、口髯の愛想よく微笑してゐる男の手を握つてゐた。それは、全く、遠いぼやけた印象の中に起伏してゐる光景の様であつた。然も彼自身がそこにゐたのである。かうした痴れた様な感覚の中に、彼は何かしら、運命の不可抗力な避け難いものを知つたのだつた。

その日、ミイロウン・シャバアノフは、豫定してゐた通り、家へ歸らなかつた。夕方から、ソフロノフの灯の點いたヴェランダに腰を下ろし、妙にぎこちなく膝頭を抱きながら坐つてゐた。緑色に染め上げたルバシーユカの襟が、ひどく、彼の首まはりに締つて來た。脇から反映してくる電燈の光りで、褐色になつた彼の顔は、青銅色になつた鬚髪と共に、黝んだ木を浮彫りにした様に

つて、革の彈藥筒を肩に掛た彼の姿は、幻想的な人物の如くにみえてゐた。深い驕を持つた鋭い額の皺が、ぐつと、走つてゐた。アンナ・ヴィクトローナは、惹きつけられた様に彼をみつめてゐた。ミイロウンは、原始的な男で、指導者であり、男性的な闘士だつた。膝の上に置かれた彼の手は、力強い筋肉が、ぐつと盛り上つてゐた。アンナ・ヴィクトロノフナは彼の手を見つめながら、今まで見た事もない、その魅惹に唯、吸ひ入られる様な感情になつてゐた。

その夜、ミイロウンは、生れて始めて、重くるしい憫みと言ふものを知つたのだつた。彼は、腰を下ろしたまゝ、軋る蓄音器のレコードの中から、美しい女が、ロシア語とは違つた銀色に流れる唄の聲に耳を傾けてゐた。レコードの唄聲は、やがて、感傷的な天鷲絨の如きバリトンとなつた。この唄は、此の世にかくも美しい碧い眼はないと言ふ唄だつた。

アンナ、ヴィクトロノフナは碧い眼だつた。ミイロウンは、東那人の居酒屋
ミイロウン・シャバアノフの最期

に泊つたのだが、朝方、密林の向ふに金色の太陽が映え始めた時、彼は家へ歸へつて行つた。

彼の魂は、雪に掩はれた野に立つた様に、空虚であつた。その空虚な感じは怖ろしいものだつた、そこに、彼は、不可避な運命を感じ得たからである。

二日ばかりして、アンナ・ヴィクトロノフナは、姉と一緒に舊教徒の村へやつて來た。二人は馬に乗つて來ると、長老の家へ立寄つたのだつた。ミイロウン・シャバアノフは、射殺した鹿を背負つて、獵から歸へる途中で、ぼつたり彼女等に逢つた、二人はかうして、彼の丸太小屋へ足を入れたのである。

翌日、ミイロウンは、再び、租界地に出掛けて行つた。歸へるとすぐ、一日置いて又も出掛けて行つた。かうして、彼は毎日の様に租界地へ出掛け始めた。

ミイロウンは、彼女に魅せられてしまつた事を知つた。レコードのロシヤの女でない美女の銀色の聲と、死と幸福に引づりこむ様な碧い眼の愁しい唄に惹きつけられてしまつたのだつた。ソフロノフの處へ来た哈爾濱の金髪女は、魔女であつた。その妖女の前に立つと、あらゆる昔の愛憎も、たちまち、崩落してしまふのである。彼女は、妙に不可解な焰となつて、ミイロウンの魂にめらめらと焼きつくのだつた。

彼は今まで、この様な経験を一度だつてした事がなかつた。彼は、ロシヤにゐた頃結婚し、彼の妻は善良な主婦だつたし、六年の間に五人の子供を生んだのである。一人の子は赤ん坊の時死に、三人は母と一緒に殺されたのだが、彼の妻は、何時も疲れ切つた、鈍い眼をして、今、彼が経験してゐる様な潮の様な血の昂ぶりを起させた事はなかつた。

ミイロウンは、二度、ソフロノフの家へ泊つたのだが、朝になると、ヴェ
ミイロウン・シヤバノフの最期

ラングで、アンナ・ヴィクトロノフナと顔を合せた。彼女は、何時も、潑刺として嬉し相に、毎日名附け日が来る様な喜ばしさを顔中に溢れさせてゐた。彼女の絹の朝着は、朝の櫻の園の様に柔いリズムをたてゝゐた。今、洗つたばかりと言ひたげな、薔薇色の顔をして、額へ金髪の縮れ毛を、わざと垂れ落して出て来るのである。彼女が手をあげると、寬い袖は、肩のあたりまですれ下つて、ふと、ミイロウンは顔を暗くしながら眼を反らすのだつた。この媚態も亦彼が抗す事の出来ない妖しく惱めかしいものであつた。

アンナ・ヴィクトロノフナの二週間の避暑が、終りに近づいて、出發二日前の日だつた。スндеエツキーが哈爾濱へ發つので、アンナは、狭い軌道車の驛へ見送りに出掛けたのだが、ミイロウンもそこに居合せた。

その日、ミイロウンの顔はひどく變つて、焦々と或る思ひつめた感情に、悶えてゐる様だつた。以前は、彼が笑ふのは稀だつた、何時も聲を出さずに苦笑

ひをするだけだつた。處が今は、全く打つて變つた、ゆるやかに、彼の顔が内
部からかう謂へば、照りあがつてくるのである。丁度、ランプの光が次第に光
度を増す様に、ゆるくと、彼の顔が輝やき始め、微笑も又、ゆるやかに、誰
かの手が光を包む様に消えて行くのである。

やがて、思ひもよらぬ事件が起つたのだ。それは、爆彈の炸烈の様なもの
であつた。アンナ・ヴィクトロフナが町へ引揚げると、ミイロウン・シヤバ
アも彼女と一緒に出發したのだ。

村の長老に宛て、彼は、自分の家と一切の家財は、十九歳になつたばかり
の息子に残して行くと書いた手紙を置いたまゝで、彼は、獵で稼いだ金だけを
身につけて行つたのだつた。アンナ・ヴィクトロフナとミイロウンが、何時、
しめし合せたのか誰も知らなかつた。恐らく、出發の前の晩に出來上つた話で
あらう。

ミイロウン・シヤバアノフの長期

ソフロノフも、彼の妻も、ミイロウンが繁々、通つてくる事は知つてゐた
が、まさか、二人が馳落ちしやうとは思はなかつた。或時、お茶を喫みながら、
ソフロノフが、笑ひながら、アンナの事を言ふと、彼は、一寸、顔をしかめ
たが、すぐ笑つて、手を振つた事があつたと彼は言ふのである。それにしても、
最後まで、ミイロウンは不可解な行動をとつたものである。

舊教徒達の會議の末、ミイロウンは除名され、彼の家は息子が襲ぐことにな
つた。それから二ヶ月程経つて、チノヴィーは隣りの娘と結婚したのだつた。
主婦なしでは、若い男ひとりの生活は出來なかつたからだ。この祝言のあつた
日、ミイロウンの事には一言も觸れないで、灰色頭の教會の司祭は、一寸、眉
をしかめながら、チノヴィーを祝福して、言ふのだつた。

「信じて生くべし、父の如きことあるべからず、信じる者に救ひあり……
ミイロウン・シヤバアノフは、惡鬼の如き誘惑の眼のきらめく、怖ろしい節

會の奈落の中へ陥没して行つた。だが、同村の人達は、誰一人、彼を破滅に導いた第一の誘惑が、銀色のロシヤには無い聲をした、女の唄であつたらうとは思ひもよらなかつたのである。

その後、同村の人達は、ミイロウン・シヤバアノフが都會でどうなつたかと言ふ事を、知つたのだが、それは、ソフロノフがミイロウンの死ぬ前に彼の口から聞いた話である。

アンナ・ヴィクトロノフナは氣まぐれな女だつた。すぐ、幻想の奴隷になるのだが夢が醒めると異常な享樂の終末を早速と見抜いて、慳巧に立ち廻つた。で、彼女は、打つて變つた態度になるのである。

ミイロウン・シヤバアノフは、彼女の眼には最初、アメリカ西部の安つばい
ミイロウン・シヤバアノフの長期

活劇映畫の主人公の様に思はれたのだつた。例へば、ジャック・ロンドンや、カワレドの小説に出てくる様な、カナダの森林を征服する巨人として、彼女は憧れ、都會でもまた、素晴らしい男として生きて行けるものと思つてゐただつた。併し彼等は、アメリカの都會生活者以下であつた。

ミイロウンは都會に來たのだが、それは、慣れた生活、根のある生活とは斷絶し切れないまゝの、短い夢の様なものだつた。永久に、都會に踏み止まつて生活すると言ふ事とは、まるで違つたものだつた。

哈爾濱驛に着くと、二人はスンデエツキーに迎へられた。アンナ・ヴィクトロノフナは、豫め手紙で、森林の野蠻人を本當の人間にしあげてみたいと言ふ、熱のこもつた幻想を書き綴つて出してゐたからだつた。都會には、あんな人間も必要だと思ひます。彼に方向さへ示してやれば、きつと素晴らしい事をやつてのけますわ。彼は生れつきの闘士です！ 彼はすべてを征服します。と言つ

た風に。

スンデエツキーは、ミイロウンをホテルへ案内した。そして、都會の人達の眼を惹く様な、異常な密林の風態を早く脱がせるために、既製品の服屋へ彼を連れ込んだのである。

二時間ばかりすると、ミイロウンは、灰色の背廣を着込んで、黄色い短靴と夏帽と言ふスマートな姿になつて、店先に現れたのだつた。さて、最後は、顎鬚を剃つて頭を刈り、すつかり都會人になる事だつた。

理髮店の扉に立つと、ミイロウンは、瞬間、顔をしかめたのだつたが、やりかゝつた事はどうにもやり遂げねばならなかつた。で、彼は、覺悟をきめて硝子扉を押したのだつた。

理髮店を出た彼は、すつかり、別人になつてゐた。スンデエツキーは、自動車を呼んで、彼をアンナ・ヴィクトロフナの家へ連れて行つた。彼女は、彼

ミイロウン・シヤバアノフの最期

を待ち焦れてゐたのだつた。呼鈴が鳴ると、彼女は慌しく馳出して來た。スンデエツキーが、何時もの様に、念の入つた甘つたるい挨拶をするのだつたが、それには眼もくれないで、彼女は、灰色の服に包まれた男をまざ〜とみつめてゐた。彼は、無器用な恰好をして、帽子を脱ると、汗ばんだ額を熊の様な掌で拭ふのだつた。彼はしかめ面をしてゐた。陽灼けのした彼の顔の上部は、暗褐色になり、顎鬚を落した下の方は、變に白つぱくす〜としてゐた。テンカフを振りかけた頬にはたら〜と、汗が流れてゐた。刈りあげた頭の髪は、化粧水の匂ひがして、びつたり貼りつけた縮れ毛が立つてゐた。頬はまるく、額も變つたこともなく、その顔には何の特徴もなかつた。額にある鋭い皺だけが彼の名残りを止めてゐた。彼女は、此の新しい、何となく味氣のないどうしやうもない顔に近づく氣がしなくなつたのだつた。

—ミイロウン！ ああ

アンナ・ヴィクトロノフナは、叫び聲をあげて言った。新しいミイロウンは、精神的な映畫や小説の英雄と凡そ似ても似つかない顔になつてゐた。彼は無様に、手の帽子を弄くりながら足を踏み鳴らしてゐるのだ。彼の手は大きく、赤く、切り株の様に短い指と、ひどく不恰好な爪を持つてゐたのだつた。

x

x

是は惨めな幻滅であつた。アンナ・ヴィクトロノフナは、出来る限りの努力をして、手を盡したのだつたが、まもなく、すべて、無駄な事を彼女は悟つたのである。

肩を落し、絶えず、たれてくるカラーとネクタイを引き上げねばならない都會風になつた彼の無様加減は、原始的な密林の英雄、男性的な闘士、指導者と言つた風な、彼女の胸に刻まれた彼の片鱗は、カケラも残つてゐなかつたのだ

ミイロウン・シヤバアノフの最期

つた。それは、實に、都會風に構へ込んだ田舎の不恰好なノラクラ者の姿だつた。彼自身も、是に苦しめられてゐたのである。スンデエツキーは、金齒を輝かしながら、手を拭くのであつた。かうした結果を、彼は、最初から待つてゐたのだ。

破綻は二週間ばかりして彼等を襲ふて來た。彼女の女友達の一人だが、ひどく毒々しい笑ひ方をする、派手な装束好きの肥つた女で、アンナの最近の噂を意味あり氣に、知り合ひ仲間で、べら／＼しゃべり散らしたのだつた。是は最後の止めになつてしまつた。ミイロウン・シヤバアノフは、必然的に、永久に歸へらない覺悟で、彼女の家を出て行かねばならなくなつた。

その頃、ミイロウンは、ウオトカの味を知り始めてゐた。彼は五日間、考へもなく、打つ通しで飲みつゞけ、五日目には全く金を費ひ果してしまつた事に氣がついたのだつた。残るものもなくなつた彼は、一日中、頭を抱へたまゝ、

部屋の一隅に坐り込んでゐた。明日は、起ち上つて仕事を探しに行かねばならなかつた。密林へ歸る事は嫌だつた。それこそ、自殺より拙い事だつた。

半月程経つて、ミイロウン・シヤバアノフは、ぼろけた辻馬車の馱者ととなつたのである。それ以來、彼は、かうして呑みつゞけたのだつた。金が入つて閑になると、彼は、ナハロフカの小部屋で同宿してゐる馱者の連中と、ウオトカをあふつて、胡散な處をうろつき廻るのだつた。

ミイロウンは、次第に、酔ふと狂暴になつて行つた。或夜、満人商店の近くで知り合つた飲み連中と挨拶を交はしてゐる中に、何時しか、遂に、無意識状態になつて、ヤがて、彼は脊中のあたりを何かしら重いもので打たれると、そのまゝ、のめつてしまつたのだつた。一時間ばかり経つた頃、行掛りの人にみつけられて市の浮浪病者收容所へ連れて行かれた。

ミイロウン・シヤバアノフの最後

x

x

彼は病院の中で正氣に返つた。ミイロウンの眼に最初映つたのは、脊の高いどつしり肥つた、口髭の様にもじや／＼生えた眉毛を動かしてゐる醫者の顔だつた。彼は、朦朧とした意識の中をさ迷ふてゐたのだつた。石の様な冷さを感じ始めると、彼は、ぼやけた冷たい太陽の照つてゐる冬の森林が映つて來たのだつた。

氣がつくと、彼は咳き込みながら、動すんだ血塊を吐き出した。醫者は頭を振つてゐた。

—し、死にますか？…

彼は血走つた眼で醫者を見つめながら、嗅れ聲で囁く様に言ふのだつた。醫者は眉を動かして、又、頭を振つてみせた。

—誰が一體、あなたをこんな目に合せたんじや？

醫者は、獨言の様にかう言ふと、自信あり氣に言ふのだつた。

—あなたは強い身體をもつたもんじや！他の人間なら、とつくの昔、あの世へ行つとるわい。振り返つた瞬間、背中をやられたんだね？ えつ？

ミイロウンは、眼を閉ぢた。ぼんやり、店の近くで酔つたまゝ争つた揚句、後をつけられた事を想ひ出した。

ミイロウン・シヤバアノフの身體は、實に、鐵の様であつた。醫者は頭を振つたのだが、一週間ばかり経つと、彼は、元通り、歩ける様になつたのだつた。だが、背の打撲傷は彼の持病になつた。内臓器官に故障を與へた事は確かで、彼は屈んで歩く様になつた。夜になると、彼はひどく、咳こんで、血の塊りを吐き出し、べつとり汗をかくのだつた。或夜、さうして咳こみながら、彼は、長がねえ、と思つたのである。

ミイロウン・シヤバアノフの最期

數日経つて、病院から書つけが届けられた。彼には今、たつた一つ、贖罪の神サヴァアノフの命のまゝに、自分の罪滅ぼしをするばかりだと思つてゐたのだ。ミイロウンは、どうしても是を實現せねばならなかつた。

x

x

秋が来て、駒ずんた鋼はらの様に冷い河岸は、早や、凍つてゐた。氷雨が降つた後、凍りついた茂みには、硝子の様になつた氷花が風にゆれてゐた。

その様な日であつた、ミイロウン・シャバアノフは生れ故郷の村へ歸つて來たのである。

最初は、誰も彼とは氣がつかなかつた。瘦せこけて、髯を生やした、土色の顔をしながら、彼は、とぼく、足を曳すつて村を歩いて行つた。或家の外庭から、犬が吠えかゝつて來たので、彼は立ち止まつた。家の中から、ひよいと顔

を出した女は、あつと言つて身を隠すと、びしやりと扉を開めきつてしまつた。半時間ばかり経つと、村中に、ミイロウン・シャバアノフが歸へつた事が知れ渡り、今、長老の家にあると言ふ事が傳はつたのだつた。男達は、苦くる苦くるしく、しかめ面をしながら、長老の家へ集つて來た。灰色頭の司祭も其處へ來てゐた。外庭に、立つてゐる村人達と村長の前に立つて、ミイロウンは、眼を伏せたまま嘸れ聲で言ふのだつた。

—お詫びに來やした……許して下さい……

村長から、四十日間、村人との同住を禁ずと言ふ達しをうけたので、彼は河岸の古い小屋の中で、罪滅しをせねばならなかつた。四十日経つて、懺悔が済むと、彼は元通りになつて、祈禱室で千遍、大地に頭をすりつけねばならなかつた。

ミイロウンは一言も言はず去つて行つた。夕方、チノヴィーの妻が、冷い小屋へ馬革とシュールバと夕飯を持つて行くと、彼は、眼を閉ぢて、机の上に横はつてゐた。恐らく、彼は、その瞬間、夏の夜のヴェランダと、ランプの柔い光、死よりも強かつた碧い眼の歌を唄ふ愁しい天鷲絨の聲を想ひ浮べてゐたのであらう。

小屋には、音もない黒い夜の帷りが下りてゐた。

その翌日、チノヴィーが父親を訪ねてみると、ミイロウン・シャバアノフは椅子の上に、同じ様に横になつたまゝであつた。リラ色になつた彼の唇は、かすかに微笑みながら歪んでゐた。

「あゝ！」

思はず、扉口に立つたまゝ、チノヴィーは叫んだのだつた。

怖ろしい形相に變つた父親の姿をみて、彼は、恐怖を感じた。ミイロウンは、

身動きもしない、その彼の眼は閉ぢたまゝ、青い影が深くきざまれてゐた。

「やあ、……」

チノヴィーは、大聲をあげて、椅子に駆け寄ると、靜かに兩手を胸にのせてやつた。その瞬間、彼の指先がびりりと縮んでしまつた。ミイロウンの手は石の様に冷たくなつてゐた。チノヴィーは、慌はてゝ帽子を脱ると、十字を切つて、全く、小道を飛ぶ様にして、通りへ走り出たのだつた。

本物の初雪が降つて來た。大地は經帷子を着た様に眞白くなつて、人の足跡は忽ち、白い煙幕の下に掩はれてしまふのだつた。

(康徳九年十月)

ミイロウン・シャバアノフの最後

⑥

神は我等と共に
エン・ア・バイヨフ

神は我等と共に

かなり、多くのロシアエミグラント達が安住してゐる滿洲帝國には、本職の獵師も多いのだが、彼等は、廣大な邊境地域を松花江から、北へ、東へ、山々に掩はれた森林や、ステップで、鳥や獸を獲つて生活してゐるのである。是等、野獸狩りの獵師達の大多數は、エミグラントとしては最良の、活動的な、そして、働き手の、精力的な、精神も肉體もしつかりした、確固たる國民精神とコミンテルンを斷乎、排撃する、愛國心の強い人達である。彼等の多くは、すつかり、所謂、クーバーや、メイנקリッドの描く、眞の密林の追究者になつてしまつて、此の魅惑的な寓話的な、そして又、危険な困難な仕事に一身を投げ

神は我等と共に

出してゐるのだ。

未開の森林で、峻烈な原始的な生存闘争をせねばならぬ生活は、是等の人達の様な、人類愛と犠牲心と英雄精神を發揮して、活動出来る、特性のある人でなければ駄目である。

是等の人々の生活に就いては、グスタフ、エマールや、ジャワタ・ロンドン式に、多くの興味ある著書がなされる事だらうが、とまれ、此處では、私は、數年前、彼等の一人から私が聞き込んだ、或る挿話として、お話する事にする。緩芬河と穆稜河上流の、太平嶺の密林中の野獸狩を業としてゐる、或る顔馴染みの獵師が、ひよつこり、私の處へやつて來た。姓も、野獸そのまゝのボリコフ(狼)と言つて、名は、セラヒム(六つの翼を持つた天使)と謂つた。姓名共によく彼の精神と肉體を表はしてゐた。脊丈の高い、やせた強靱な彼は、誠に、狼を思はせるものがあり、鷲の様な横顔をした暗い青銅色の顔、奥深い

灰色の眼、剃つた後の濃い鬚、それらは皆、不屈の精力と強固な意思を表はしてゐた。セラヒムと言ふ名は、又、彼の精神を是以上よく表現した名はないので、純粹なキリスト的世界觀を持つた、善良極まる男で、それに、實に熱烈なロシヤの愛國者であり、國粹主義者である。ウスリー地方の獵師の家に生れた、ポルコフは、幼年時代から密林に住み、最も優秀な野獸狩りの獵師の一人となり、又、沿海州の虎狩りの第一人者となつたのだ。

彼の妻の、カザツクの血をうけたフモクラは、夫に劣らぬ大膽な、進取的な、活動的な女であつた。ほんの世の中に顔を出したばかりの若い娘つ子の時代から、ずつと、夫と共に、獵に出て、眞に信頼すべき片腕となつて、家庭ばかりでなく、密林の中でも、まことに、よき女房だつた。或時など、虎狩りの際、仔を奪はられて、怒り狂つた仔持ちの牝虎が、猛然、夫に襲ひかゝつて來たのを、彼女がゐて救はれた事もあつた。夫の傍にゐた彼女は、虎の襲撃を、我が身に――神は我等を共に

引受けて、一發、虎の頭に撃ち込んだのだ。子供が出來て、夫に従つて行く閑がなくになると、夫のために、あらゆる氣配りをして、家庭の慰安と仕事の疲れを癒す事につくす様になつた。

一九二〇年、ヴォリシエヴィキが、魔手を延ばし始めた頃、ポルコフは、他の多くの愛國者の様に、ヴォリシエヴィキを排撃して、國境越えを決意したが彼のゐた村は、全村、十家族だつたので、それらを引き連れて、密林を百露里も行けば着く滿洲へと、西路を取つたのである。國境地では、彼等は、追究して來た國境警備隊やゲ・ベ・ウの一隊と烈しい戦闘を行つたが、野獸狩りの獵師達は、その名に恥ぢない、果敢な應戦をして、三名を失ひ、三名傷ついたので、何れも、國外へ逃れることが出來た。ヴォリシエヴィキの死傷者は、はつきりしないが、「ソ聯邊境地」の赤色脱走者の話に依ると、國境警備隊では六名、ゲ・ベ・ウの隊員は十四名で、その中には、ユダヤ系の隊長も射られて

あると言ふ事だつた。ヴォリシエヴィキの側には、傷者は、僅かに二名だつた。と言ふのは、獵師は、射損じと言ふ事がないので、必殺の頭を狙ふからである。女子供の死傷者はなかつた。緑色の木枝で偽装した荷車と一緒に、豫め、國境を越えさせてゐたからだ。十五名の獵師が荷車の掩護に當つて先導したが、その中、二名の國境警備隊員が、逃走者に加はり、交戦にも参加して、彼等と共に國境を越えたのだつた。

獵師の妻女も數名、男達と一緒に交戦し、ヴォリシエヴィキの頭に、小銃を撃ち込んだのである。その中には、子供を、老母に預けて戦つたフェクラ、ポルコオバもゐた。應戦しつつ、國境を越えるのには、二時間たつぶり掛つたが、その日の夕暮れには、元の東支鐵道のシャオスイフィン驛に着いてゐた。

哈爾濱へ用向きで來た時、一ブード以上もある野猪の美事な腿肉を、土産に持つて、私の家へやつて來たセラヒム・ボルコフは、ざつとまあ、以上の様子を神は我等と共に

引受けて、一發、虎の頭に撃ち込んだのだ。子供が出來て、夫に従つて行く間がなくになると、夫のために、あらゆる氣配りをして、家庭の慰安と仕事の疲れを癒す事につくす様になつた。

一九二〇年、ヴォリシエヴィキが、魔手を延ばし始めた頃、ボルコフは、他の多くの愛國者の様に、ヴォリシエヴィキを排撃して、國境越えを決意したが、彼のゐた村は、全村、十家族だつたので、それらを引き連れて、密林を百露里。行けば着く滿洲へと、西路を取つたのである。國境地では、彼等は、追究して來た國境警備隊やゲ・ベ・ウの一隊と烈しい戦闘を行つたが、野獸狩りの獵師達は、その名に恥ぢない、果敢な應戦をして、三名を失ひ、三名傷ついたのだが、何れも、國外へ逃れることが出來た。ヴォリシエヴィキの死傷者は、はつきりしないが、「ソ聯邊境地」の赤色脱走者の話に依ると、國境警備隊では八名、ゲ・ベ・ウの隊員は十四名で、その中には、ユダヤ系の隊長も射られて

ると言ふ事だつた。ヴォリシエヴィキの側には、傷者は、僅かに二名だつた。言ふのは、獵師は、射損じと言ふ事がないので、必殺の頭を狙ふからである。女子供の死傷者はなかつた。緑色の木枝で偽装した荷車と一緒に、豫め、國を越えさせてゐたからだ。十五名の獵師が荷車の掩護に當つて先導したが、中、二名の國境警備隊員が、逃走者に加はり、交戦にも参加して、彼等とに國境を越えたのだつた。

獵師の妻女も数名、男達と一緒に交戦し、ヴォリシエヴィキの頭に、小銃をち込んだのである。その中には、子供を、老母に預けて戦つたフェクラ、ポコオバもゐた。應戦しつゝ、國境を越えるのには、一二時間たつぷり掛つたが、日の夕暮れには、元の東支鐵道のシャオスイフィン驛に着いてゐた。

哈爾濱へ用向きで來た時、一ブード以上もある野猪の美事な腿肉を、土産につて、私の家へやつて來たセラヒム・ポルコフは、ざつとまあ、以上の様な神は我等と共に

經歷の男である。

當時の滿洲には、日本人もなく、邊境地帯は、中國國民黨が支配してゐて、無事の住民に暴力を以て、掠奪、暴行を恣にし、かてゝ、紅鬚子賊やコミンテルンの派遺者共が勝手氣儘な横行振りをしてゐたのである。國境地域には、赤色バルチザンが自由に、跳梁して、ロシヤエミグラントを殺めたり、國境越えて、ソ聯へ拉致したりしてゐたのだ。國民黨の當局は、是等すべての不法を、簡単に黙認するばかりで、おまけに、その暴行、不法に手を藉してゐたのだつた。是を知つてゐる私は、此の事を言ふ積りで、彼に質問したのだつた。

「君は、危ない處へ獵に行くんだね。頭を突き出す様なものじゃないか。もつと、西の、例へば、横道河子か葦沙河又はヤプロニ、あたりへでも行つた方がいゝんじゃないか？ 若し、君に萬一の事があつたら、家族は路頭に迷ふじゃないか！」

「さうだ！ わし等の土地は危険なんだ。とにかく、あそこじゃ、ロシア人の獵師は「壁に耳立て」と居なくちゃならねえ。だが、何んでもないさ。お祈りさへして居れば、神様の御加護で、惡の力はどうにもならんのだよ！ 密林に入りや、わしが天下じやからな、紅鬚子賊も、赤の奴らも、怖れやせんよ、唯、用心は肝心だがね。うつかりしてゐると、それこそ、譯の分らぬ中に、ひよいとやられて、誰も知らん處へ落ち込むのだ！ とにかく、密林さんは、御戯談が大嫌ひだからな。密林の掟は、しつかり守らなきや、身を滅ぼすからな。

密林の中ぢや、わしは、我が家も同然だが、ぼんやりは出來ん、常に、萬一の覺悟は肝心じやよ！

―所で、……

私は彼の言葉を遮つて、口を入れた。

神は我等を共に

「君は、相當、紅鬚子や、赤色バルチザンに、密林の中で、出喰はした事だらうが、その話をして下さらんか？

「そりや、勿論、一度ならず出喰はしたが、わしは、藪から棒にやられんがね。

密林の男は、眼を輝かしながら、二列に並んだ暗い硬い齒並を、眞黒な口髭の下から出した。

―去年の夏、牡鹿狩りに行つた處、角を切るのに、どうした事か、手間取つたのを、すると、四方から紅鬚子共に圍まれてしまつた。奴ら、ざつと、十三名、機關銃をもつとるのだ。さ、一寸、勝手が悪いわい。逃げる術はない、まづい事になりよつた。とにかく、策略しかない。そこで、わしは考へた。

先づ、帽子とジャケットを樹枝にかけ、牡鹿を脊ふと、四つ這ひになつて、

出来るだけ、奴らの圍みを突き抜ける道を探さうと構へ込んだのだ。紅鬃子の馬鹿共は、まんまと、わしの鼠に掛つて、案山子を奴ら、小銃や機關銃で撃ちよるんじや。時機を失せず、十分ばかり経つた頃、わしは、飛び掛つて来た二名を、獵刀で突き倒すと、奴らの一角を突いて出たさ。その時、奴らの射撃が一寸、止んだと思つたら、わしの鼠に氣づいて、追跡し始めたよ。どつこい、さうはさせんよ！ 時々、わしは立ち止まつて、ぐつと、引寄せて置いて、狙ひ撃ちさ。三度ばかり止まつたが、奴ら、諦めやがつて、そのまゝさ。このバチくで、ざつと、十名ばかり殺つつけた。かうして、どうやら、わしは助かつて、顔見知りの獵師の房子へ泊り込み、翌日の晩方、穆稜驛の、わが家へ歸りやしたよ。紅鬃子と言ふのは、馬鹿者で敷し易いが、奴らが、大勢だと、一人残らず殺つつける事だ。赤色バルチザンじやが、此奴は、一寸、違ふでな、用心の上に用心が肝要なんだ。神は我等と共に

ちよいと、拙い當り方をやると、シチュウの中の籬の様なもんで、一たまりもねえ、奴の爪に掛つちやお前さん、どうしやうもねえからな。

かう言ふと、彼は、言葉を切つて、パイプを吹かし始めた。興に乗つて來た話を、續けて、聞きたかつたので、私は、又、何處で、何時、バルチザンに出會つたのだ？ で、どうなつたんだ？ などとあれこれ聞いてみたのだつた。しばらく、考へてゐた彼は、やがて、私の問ひに答へて言つた。

―夏と秋の獵期には、わしは、よく、奴等に出喰はしたが、お蔭と、事なく済んだがね。一度、わし等二人連れで、而も、夜、國境のすぐ傍で、突然、バルチザンの一團を取つつかまへたんだ。奴ら、八名だつたが、わし等は、連中を小屋へ連れ込んで眠らせると、すぐ、武器を取り上げてやつた。奴等の中には、政治部員が二名、一人は波蘭土人、一人はユダヤ人だつた。有無を言はせず、その場で、連中を殺つつけ、残りのロシア人は、許して

やつたが、その中、二人の若僧はソヴェートの天國へ歸りたがらんだよ。で、滿洲に残つて、密林の獵師になりよつた。皆、残りたがつたのだが、ニコリスクにゐる家族の事が氣になつて戻つて行つた。罐詰や肉をやつて、奴らに、神様の御名に依て、歸してやつたんだ。銃も返してやつたが、こりやあ、コムエラスト仲間じや、武器を失ふと銃殺されるからだ。別れ際に、連中は、神様に生命拾ひを感謝し、こんな目に會ふのもソ聯政府のためだと罵つとつたよ。

すべての密林の男の如く、彼も亦、内氣で、慎み深く、無口で、唯、尋ねられた事だけを答へるので、今少し、立入つた事を聞かうと思ふと、又、質問せねばならなかつた。

「君が國境を越えて、赤に連れ出されたと言ふ事を聞いたが、若し本當なら、どうしてさうなつたのか、連中の圍みを破つて助かつた様子など、聞かし神は我等を共に

てくれないかね？」

彼は、一寸、考へ込んでゐたが、又、消えかゝつたパイプを吹かすと、ぼつ、言ふのだつた。

「そいつは、かうなんだ！ 或時、わしが同郷の友人で、ヤコブ・ツィロフと言ふのと獵に出掛けだが、綏芬河の上流で牡鹿狩りをして、角を切るのにまあ、冬越しをしとつたんだ。一人は、交代に獵をして、牡牛を撃つと、ペーチカでペーコンにしたが、射止めた野獸は皆、三岔口に滿人を呼び出して賣りつけたんだ。

わしらが冬越しをやつとつた處から、國境までは、さつと、四十露里程だつたが、密林の中やあ、一度も、紅鬚子にも、赤の連中にも出喰はさなかつた。處で、或日、牡鹿を撃つて、冬越しの小屋へ歸らうとすると、突然、凄い音なんだ。わしの友の姿は、影も形もない。で、直感的に、赤の

バルチザンに連れ込まれたなと思つたよ。ほんの二、三時間前の事なんだ。足跡から観ると、どうやら、九人程の騎乗の連中だ。ぐづぐづする事はない、わしは、乾菓と銃薬筒を身につけると、奴らから、先生を救ひ出さねばならんので、飛び出したんだ。あんな匪賊共の捕虜にはさせとけないからな。夕方、國境のすぐ傍の谷合ひで、奴らに追ひついた。そこで、夜になるのを待つて、樹に縛り上げられた友人に近づいて行つたのだ。匪賊達は、燎火の傍で、先生を放つたらからしで、飲んだるのだ。まあ、捕虜は逃げる心配はないとも思つてゐたのだらう。奴らが、すつかり、寝込んだのを見すますと、わしは、先生の傍へ這ひ寄つて、繩を切りに掛つたのさ。處が、丁度、それを切り遂げたと思つたら、残念な事に、又、何と言ふか、奴らの馬を狙つてゐた虎が近づいたので、馬の奴、妙に騒ぎ出したのだ。で、連中、眼を覺ますと、ツローフの足の繩を切つてゐたわしを、取り圍んで神は我等と共に

しまつたのだよ。わしは、獵刀を振つて、向つたのだが、到頭、奴らに捕まつてしまつた。薬を折る力もなしさ。わしは、五人の男に押へられて、樹にくくりつけられてしまつた。ツローフと並んでね。最初、口汚く罵倒したり、殴りつけたり、侮辱したりしとつたが、やがて、酒を取り出すと、酔つばらつてしまつて、戯つたり、笑つたり、揚句の果は、手の繩を解いてくれるのだ。二三人近づいて來ると、肩など叩いて、一貫様、白色匪賊だが、確りものだ！俺等の處へ連れて行つてやるから、赤軍で働け！われくも、お前の様な男なら、必要だからな。どうだ、俺等のウオトカを飲めよ。何あに、怖がる事あねえ。俺等の仲間入りをして、暮せば、いぎ。刑巧者なら、結構、いゝ暮しが出来るぞ、などと、言ふのだ。わしは、呑みもせねば、口も利かず、どうして逃げ出すか、樹にくられた繩をどうして解くかと言つた事を、考へ續けてゐたわけだ。ツローフも手だ

げは解かれて、二人共、熱い茶を呑まされたのだ。……
すつかり、真夜中になつた。連中は、燎火の傍で寝たが、若い見張りが、
わしら二人を監視してゐるのさ。初めの中は、二人の傍に腰を下ろしてゐ
たが、やがて、鼻をくすくす鳴らし始めると、手の銃を放り出して、ぐつ
すり寝込みやがつた。さあ、わしは今だと思つた。で、獵刀を引き寄せる
と、足の繩を切り、ツローフの繩も切つてしまつた。その時、馬を繋いで
あつた樹の側にゐた馬が、突然、虎が間近かに來たのを感じいて、燎火に
向つて飛び出したのだ。連中、慌てふためいて、小銃を握つたが、野獸を
みると、四方八方へ散りくりに逃げ出してしまつた。勿論、わしらも、こ
のどさくさと、暗闇に乗じて逃げ出したのだ。わしらを追つて來る形跡は
なし、又、出來なかつたのだ。で、二人は、小路に出ると二時間ばかりし
て、獵師の房子に辿りついて、まあ、その夜を明かした譯だ。翌朝、殺芥
神は我等と共に

河の山の絶崖に陽が昇るとすぐ、道を取つて、冬越しの小屋へ歸りつゝ
た。そこに一日ゐるが、翌朝は、早速と、穆稜の我が家へ引揚げたよ。所
で、一寸、言ひ忘れたが、連中から逃げ出す時、わしは、抜目なく、見張
りの男の銃と彈藥筒を失敬して來たんだが、今、獵に使つるのは、その
銃さ。

ヴオリシエヴィキと言ふ奴は、神を知らぬ奴らじやで、神様が見棄てゝな
さるからな。わしらには、ちやんと、かう、神様の御加護があつたものだ。
とにか、わしは、今でも信じて疑はないのは、神様が、折も折、わしら
を救ひ出して下さる爲に、虎を遣はされた事だ。それ以來、わしとツロー
フは、虎は撃たん事にしたよ。虎はなか／＼金目になるが、どうにも、あ
れ以來、神様の御使で下された虎に手をあげる事は出來ん様になつた。
滿洲でも、沿海洲でも、わしは今まで、虎を十八頭射止めたが、生捕りは

十二頭、相當な儲けになつたものだ。

だが、お蔭と、パンも食へて、何一つ不足のない暮しが出来るのに、是以上、何が要るものかね！ 唯、ヴォリシエヴィキ共が倒れて、わし等が祖國へ歸へれる日を待つばかりさ。お客に行くはよし、我が家は、猶良しさ
ニ！

かう言つて、密林の大人は、びつたり、口をつぐんでしまつた。で、是以上、私は、何を聞いても、短かい同じ様な返答ばかりなので、どうにも、聞き出すものがなくなつてしまつた。

さて、ホルコフの長男は、十六で、父によく似た密林の若者で、父と全じ様に、達者な密林の男だつた。容貌も性質も、すつかり、父親そっくりで、年に似合はず、發達した、眞面目な少年だつた。幼年時代から、父親に連れられて獵に出て、彼は、密林を愛し、古い森林の獵師達に劣らぬ一人前の馴れた獵師
神は我等と共に

になつてゐた。十二の時、彼は初めて、~~密林~~を撃ち殺し、十四の時、父親と一緒に虎狩りに行つたのである。で、かうした事で、彼は學校の方が、お留守になつたが、それでも、きちんと中學を出て、建築技師になりたいと思つて、専門學校を夢想してゐたのだつた。

ホルコフの家族は、妻と、息子、娘・(三才)と、祖母、妻の母親で、此の上もなく人の善い、マリヤ・イリイコシュナの六人で、家の事は、二頭の馬、三頭の牛、多くの鶏、鴨、それに蜜蜂と菜園等は一切、馴れたマリヤ・イリイコシュナが、小まめに、切り廻してゐたのである。

政治的信念として、ホルコフは、帝制主義者で、彼の簡素で暖い居心地のいゝ家の最も目立つた第一等の場處には、ニコライ二世と皇太子の御肖像が掲げてあつた、彼の息子も亦、はつきりした國粹主義者で、滿洲に安住して、希望をつないでゐる多くのエミングラントと同じ様で、ロシア再建を夢みてゐた。

ポロヂヤは、素晴らしい耳をてしめて、十才の時に、早くも、バラライカと手風琴を鳴らすことを憶え込み、すっかり、家では、家族の慰安者になつてゐた。ポルコフは、獵でよく働くので、今では、日本の銀行には、相當な貯金をしてゐて、困つた人には、惜し氣もなく助けてやるのだ。尤も、中には、人のいのちにつけ込む手合もあるのだが。

マリイヤ・イリイニシュニヤは、世馴れのした辛い甘いもなめて來た女だけに、婿のお人好しが氣掛りで、ともすると、さうした事で言ひ争つては、すっかり、ポルコフは負かされて、そこで、まあ、欺される事もなく、家の内も圓く納まるのだつた。ポルコフの妻は、姑と婿の問題などには、まるつきり、口をはさまず、先づ、「中立」の態度を持って、分を守つてゐた。

或るよく晴れた秋の日、ポルコフは、學校が始まつてゐたので、息子は連れずに一人で、獵に出掛けたのだつた。すると、ポロヂヤは、すっかり腹を立て、神は我等と共に

日曜日と重なつた八月十五日の祭日がくると、母親にも告げないで、父親の跡を追つて密林へ向つたのである。夕暮れ、野豬を撃ち止めて、彼は、燎火をどんどん焚いてねたのだが、その赫々燃えた火は、すっかり、紅鬚子の狙ふ的になつてしまつた。匪賊の一團は、少年を取まいて強迫に掛つた處が、彼は、銃の火蓋を切つて返答したのだから、渡り合ひになつてしまつて、その銃聲は、山の奥深く木魂して行つた。

その頃、息子の居る地點から、十露里ばかりの處で、父親のポルコフは燎火の傍で腰を下ろしてゐたのだつた。で、彼は、誰かと、紅鬚子に襲はれたのを知つたので、早速と、銃を取ると、助勢に飛び出した。すぐ様、交戦の中に近づくと、形勢を呑み込んだ彼は、得意の必殺の銃口を紅鬚子の背後から浴せかけたのだ。此のロシア人獵師の凄い銃弾をうけた連中は、たまりかねて、十名ばかり、屍體になつたまま、逃げ出してしまつた。

渡り合ひがすんでみると、父親は、自分の子が、茂みの中から、ひよつこり、
灼けた銃を持つて出て来たので、驚いてしまったのである。

「何だ、お前は又、どうして、こんな處へ來やがつたんだ？」

ボルコフは、嬉し相に、髭のない子供っぽい顔をしながら立つてゐる息子に
近づくと、叫び聲をあげた。

「御免なさい。パパ、言ふ事聞かないで。でも、紅鬚子の事が氣になつて、
一人、家に残つて居れなかつたんだもの。」

「うゝむ、さうか。わしは怒りはせん。だが、密林は一人歩きしちや、いか
ん。まだ、お前は若いんだ。密林の知恵と言ふ奴を、もちつと、憶え込ま
なきやいかんぞ。わしが、銃聲を聞かなかつたら、お前は、とつくの昔、
くたばつとるわ。じゃが、わしらには神様がついて御座る。神様は何時も、
わしらを守つて下さる。さあ、夜の仕度としやう！ 朝は、夜より、人を
神は我等を共に

削巧にするで！

半時間ばかり経つて、父と子は、燎火の傍で、猪の肉を食ひ、茶をのみなが
ら、並んで坐つてゐた。

薄暗い西洋杉が、彼等の頭上にざわめき、眠りを誘ふ密林の子守唄が聞え始め
てゐた。

ニキイツカヤ門 アルセエニイ・ネスメーロフ

ニキイツカヤ門

1.

此の日、モスクワは、粉雪と細かい氷雨に濡れてゐた。止んだかと思ふと又
屋根のすぐ上まで垂れてゐた鉛色の雲の中から、ちらちら落ちてくるのだつた。
夕暮れになると、しめつぽい雪になつた。早や薄暗くなつて、燈が黄色く輝き
始めてゐた。一九一七年十月二十五日の黄昏が來たのだつた。

嫌な天氣だつたが、ツピョルスカヤの廣通りを人群れがぞろぞろ流れて、殊
に、軍人と女が多かつた。寒さも雪も無關心に、兵士達は、處構はず、向日葵
の殻をまき散らしながら、歩いてゐた。女達は、大聲をあげて笑つたり、言ひ
争つたり、かと思ふと、何かを取り決めたりしつゝ歩いてゐた。人々は、次第

に鏡り合ひながら、モスクワ兒らしく、門を潜るもの、小路に入るもの、壁へ壁へと奔り行つた。弧形の門の下へ行くのは、やはり、兵士達と娘達であつた。そこは、風雪を避けて、ひそやかに、小箱にステアリン燭などを置いて、一團の兵士と職人達が、凄い眼付きで、時には拳銃や剣を握みあげながら、カルタの點數を奪ひ合つてゐたのだ。

今は、勞働者と兵士達の代表者の集會所となつた總督邸の前の廣場には、青銅の馬に乗つた青銅のスコベエレフが馳け上つてゐた。彼の劍は見えなかつたが、高く振りあげた將軍の手は、降りくる綿雪の中へ突きあがつてゐた。將軍の眞向ひには、雪の夕闇の中に、赫々と燈をつけ放した窓が、代表集會所をくつきり浮彫りにしてゐる。どの窓の鏝戸も開け放されて、硝子の向ふに、多くの男達の影が動いてゐた。入口には、歩哨が立つてて、雪が彼等のチエルケス帽と肩に積つてゐた。歩哨は一入々々入つてくる男達を調べた。押詰めた様に低く

警笛を鳴らして、入口に装甲自動車がかつてくると、彼等の前にぐつと止まるのだつた。

この火氣のなくなつた夕暮れ、ミンスクからモスクワに着いた客車には、若い中尉ムウヒン・ニカライ・ニカラエウイツテ、が乗つてゐた。中尉は、無期限の休暇になつてゐた。彼の勤務部隊では、將校はする事がなくなつて、唯、ヴオリジエヴィキが聯隊にのさばるばかりで、聯隊旗だけは、しつかり、イズマイルで握つてゐた。

だが、ゴリヤ・ムウヒンには、塊太利軍と和睦した聯隊にゐるのが癪だつたし、と言つて、後備へ廻るのもそれ以上、嫌だつた。到る處で、卑怯な無節操な脱走兵の成り上り者がのさばつてゐるのを思ふと彼は無性に腹が立つた。脱走兵共は、三等客車にも、仕切り室にも、食堂にも、むん／＼喚き立つてゐるのだ。奴等は、尤もらしく、誰かに不當な侮辱をうけたので、それを根據に、

意氣まいて、事毎に口を尖らせ、何時でも、聯隊の武器を執るぞと言ふ面構へなんだ。殺されたくない連中は、我儘な駄々つ子と物を言ふ様に、脱走兵と話合ひ、如何にも卑屈に、眞實を捨て、今、危機に瀕しつゝあるロシアに眼をそむけて、心にもない謔言をしやべつてゐるのだ。

だが、ムウヒン中尉は、そひつが嫌だ、彼は、くるりと脊を向けて、恥さらしになるものかと覺悟してゐた。ロシアは、當然、眞實を叫ぶべき人間から見棄てられた、否、彼等は、憶病にも沈黙を守つて虚偽を装つたのだ。若い將校の彼は、國內の秩序を回復せしむべき、強烈な指令を叫び上げたいと思つた。だが、何處からもその叫びは聞えないのだ。

コーリヤ・ムウヒンは、彼に話しかけてくる乗客を避けて、新聞の中へ顔を突込んでゐたが、あゝ、その新聞も、實にあの兵士の長靴の前に、實に無意味な、憎むべき、ヴォリシエヴィキの前に、唾を出してくどくお世話を並べて

ゐるに過ぎない。

遂に彼は、モスクワに著いたのである。モスクワの暗い通りを、濡れた一頭立の馬車に乗つた彼は、馭者の聲に妙に氣がひけてゐた。アレクサンドロフスキー驛から、マアラヤ・ブロンナまではさして遠くなかつた。

—大丈夫でさ、

馭者の老人は、濡れた髯面を將校の方へ向けながら、話しかけた。

—大丈夫でさ、且那、半時間もすりや、著きませ。きばつて行きやあ、半時間で著きやすよ。

何處か近くで、銃聲が鳴つたかと思ふと、遠くの方でもバンバンと鳴つた。

—誰だね、撃つてるのは？

ムウヒンは、眼を光らせた、

—誰だか知らねえが。

ニキイツカヤ門

大きな息を吐きながら、馭者が答へた。

「煽動者ちゆこつた。奴ら、うよ／＼しとるで。ヴォリシエヴィキも居りや、市の憲兵もゐる。パンはなし、是ちゆて食ふ物もねえ始末さ。どうだね、

旦那！

彼は、くるりと、ムウヒンを振り返つた。

「ねえ、若い旦那、餌がなうて、お前さん、馬に何、やるかね。攪亂者共が、あの通り、うよ／＼しとるでな。のさばり歩いとるわい。何が何やら、分りやせんが。旦那衆と奴ら、一悶着つけやせうがな。旦那なしで、お前さん、そりや、難しいこつた。旦那衆は、留、出して食ふても、ちつた食へますかね。稼ぎ人は剥ぎ取られや、それ迄でさ。何が何だか分りやしねえや。食ひ物が干上つちや、何がさ、金持が隠したつて、いゝ加減な事を吐かしやがるね。食ひ物がねえのに、何が、ロシアの改革じやい！」

彼は、突然、手綱をひくと、鞭を納めたのだつた。

夕暮れになつて、市長ミイノールの檄文が家々の壁に貼りつけられた。それには、ヴォリシエヴィキが、ベトログラードで、政權獲得の爲、蜂起し様としてゐること、同じ様に、モスクワでも、連中が集合しつゝある事を指示してゐた。ペエルヴォオプレストールの住民は、義勇軍として召集され、臨時政府を守備する軍隊となつたとも、書かれてあつた。

兵士達は、向日葵の殻を、その貼紙に打ちつけながら、無關心な顔つきをして讀んでゐた。彼等にとつては、それはどうでもいゝ事だつた。ミイノールであれ、レーニンであれ、二度と前線へ出さないうで、カルタ遊びと向日葵が密ぢ

ニキイフカヤ門

れたら、それでいゝと言ふ連中だつたのだ。ヴオリシエヴィキを憎む者は皆、歪められたロシアの顔を見ると、ぞつとして、敢然と、國を紊す無頼の徒に打ち向ふのだ。

事實、まだ、眞の闘争への召集はなされてゐない、謂はゞ、人集めであるのだ。だが、バオリシエジイキは打倒すべきだ。何らかの形でやるべきだ！眞にロシアの爲に起つ若者の手は、武器を握りしめてゐたのだ。

夜九時、ツビヨルスカヤの河口の近くに、ロスクウツナヤ・ホテルがあつた。それは、アレクサンドロフスクの軍人会館のあるアルバートの廣場にあつた。陸軍幼年學校の近くのレフォルトフや其他、首都の各所には、外套の腕に白布をつけた巡警が、初めて現れてゐた。是等の白い腕章は、クレムリンを占據し、そこにゐた第五十六豫備大隊の兵を武装解除して、兵士、労働者の代表者よりなるソヴエト擁護者に、先づ先手を打つたのである。

病院から逃げ出した頃太利の捕虜將校は、ヴオロヴィエの山に、ヴオリシエヴィキが据えつけた重砲のコナドを既にひいてゐたのである。砲弾が市街に炸裂し、轟々と鳴り響いて、クレムリンのそゞり立つた尖塔が無残に破壊された。「モスクワの鐵の橋」に最も近い處も、すつかり、崩壊された。此の古代尖塔の上層は木ツ葉微塵になつたのだつた。

「瞬間、ツビヨルスカヤも、アルバート遊歩道も陥没したのである。狂つた様な兵士共は、銃をくれる處へ走り寄つた。何と言ふ事はない、ロシアの爲に戦はない事を知つてゐるヴオリシエヴィキ共が、銃を呉れてやつたのだ。如何にも、尤もらしく、自由を餌にして、兵士共をすつかりベテンにかけたのだ。かうして、モスクワ全面に、砲彈の低い聲が擴がり、死んだ様な街の到る所に、銃弾が、きゅんきゅん、鳴り響いてゐた。

「どえらい時に、ニコライシヤは来たもんだ！
一時間もかかつて、モスクワの状態をムウヒンに報せたのは、彼の弟で士官
學校を出たばかりの、言語學の學生、ミーシヤだつた。」

「われ〜とヴォリシエヴィキとの關係は、最終點に来てしまつたんです。
今日われ〜はやりませす。兵力は匹敵しません。奴等は、モスクワ守備隊
で、千から六百位ですが、われ〜は、三千です。皆、モスクワの士官候
補生と將校と言つた處です。事實、將校達はさ程、統一がありません。そ
の外、士官學校の生徒ですが、とにかく、種々雑多で、ヴォリシエヴィキ
に加はる奴もゐるのです。」

「ああ、

彼は懐中時計をちらとみて、言つた。

「半時間だ、すぐ行きますから。どうぞ、母さんには何にも言はないで下さ

So.

ニコライは微笑してゐた。

「と、何んだね、お前は闘ひに出る、俺は残ると言ふ事になるのかい？」

「だつて、あんたは、前線から歸へつたばかりだもの。」

「それが何んだ？ 俺は、何んだぞ、闘争となれば、お前より必要な人間だ
ぞ。彈丸の當らん男だからな。」

「だつて、コーリヤ、……誰にだつて、それ〜、策と時期がある事だし……」

母さんのこと考へて下さい！

「お前はだ、ミイシユニヤ、残り！ 若いんだから。」

「そいつは不可ん！ 考へて下さいよ、僕は中隊の半数を指揮する事になつ

ニキイツカヤ門

てゐるんです。

「さうか。だけど、俺は、こんな晩、家に残るなんて事は出来んぞ。」

「コーリヤ、勿論だ！ だが、お母さんですよ、母さんは、僕達二人を引止
める力があるんだから。」

「俺達、何にも言ふまい。俺は、お前を學校まで送つて行つた事にしとかう。
現に、今夜、夜警だつて言つたらう。」

「でも、二人とも殺られたら、母さん獨りでどうなるでせう？」

「同じ事さ、二人が、母さんの傍に居たつてさ。ヴォリシエヴィキ共がゐる
んだからな。奴等が勝てば、われ〜三人共死さ。」

「そりや、勿論だ。所で、早いか遅いかな。」

「俺は、早いと思ふ。」

「よし来た！ 御命のまゝ、はッ、中尉殿！」

ミーシャは、半ば戯談まじりに、半ば、眞剣になつて、兄の前に直立した。

—さあ、構へて下さい。

五分ばかり経つと、兄弟二人は、早くも、階段を降りてゐた。やせてけて、頭髮の灰色になつた母親、オリガ・イヴァノフナ・ムウヒナは、靜かに、把手を握りながら、扉の側に立つてゐた。

—コリユンニカ、お前は行かなくなつて、いゝじやないかね。今来たばかりで、又出て行くなつて、ミーシャは一人でいけない事もあるまいに。

—さうですよ、殘つて下さい。えッ！ くる必要ありませんよ。

ミハイルが兄をたしなめた。

—いや、いゝえ、母さん、用事があるんです。聯隊長ヤスツレブツオフに至急親畏の書簡を持つて行かねばならんです。ミーシャの指揮官にも、直接、手渡しせねばならんです。御安心なさい。すぐ歸へりますから。じ

ニキイツカヤ門

や、お母さん！

ニカライは、母親の手に接吻すると、石段を駆け降りて行つた。扉が、淋しく、音をたてながら閉められた。

十二ヶ年の間に二度、モスクワは、戦亂の巻と化し、暴徒と幾世紀經たロシアの大地を守る人々との間に鎗を割り合つたのである。だが、此の時の敵の本據は、すぐ近くで、双方、目と鼻の間に對持したのであつた。—アレクサンドロフの陸軍士官學校と、兵士、勞働者の代表ソヴェエトたる總督邸とは、遊歩道とツビヨルスカヤの數棟の住宅を境とするだけだつた。その代表ソヴェエトのある處は、首都の中央部をがらり、環の縁に取巻いた、モスクワの勞働者の家屋と密接に聯つてゐた。

一九〇五年とは、全く違つた状態だつた。當時、叛徒は、赤く燃えた炬火を、プロホロフスカヤの製造所を本據としたプレスニイにかざし、若いロマンチスト達は、バクロフカに近いフィグネルの實習専門學校にバリケードを築いてゐた。叛徒の各峰起地點は、夫々、分散されてゐて、個々にバリケードが築かれて、侵入の軍隊を、隨時、その場で撃破する様にしてあつた。是等のバリケードで、有合せの拳銃を持つた大學生や中學生が闘つたのである。

叛徒に壓迫されてゐたカザツクの援助に、親衛大隊から成るミーン將軍とリマン將軍の鎮壓隊が、ベテルブルグから急走したので、叛徒は慘敗し、數日間で鎮壓されたのだつた。

だが、此の時は、全く、情勢が違つてゐた。クレムリンを占據し、そこから第五十六大隊の兵士を武装解除してしまつた白軍は、實は、ヴォリシエウイキ

の散在する、モスクワの労働者家屋のある一環の中で、恰も、網の目の中にあらる様に、アレクサンドフスクの陸軍士官學校の周圍をぐるりと、半徑を描いて立つてゐた。是等の家屋は、徐々に武装化され、全區のヴォリシエヴィキ委員會は、巡警と監察隊の軍事本部となつてしまつた。叛亂が起るや否や、白軍に走らうとした一連の連中は、ヴォリシエヴィキとの戦争が始まると共に、それは全く不可能となつた。

最初の攻撃で、叛徒は、各要所で戦果を擧げたが、この戦果は擴大出来なかつた。彼等は援軍を何處からも仰げなかつたからだ。だが、白軍の全滅は數日に迫つてゐた。彼等を救ふものは、唯、奇蹟あるのみだつた。前線から援助するなどと言ふ事は夢にすぎない。それは、彼等の間に取り決めてはゐるのだが、さうは行かなかつた。鐵道従業員組合の執行委員ビクシエリが、モスクワへの部隊輸送を一切、差止めてゐたからである。

事實、一九一九年の五年、鐵道線の罷業が、モスクワの叛亂を起したのだから、當時、リーマンとミイン將軍は、頑強な鐵道従業員を抑壓する事が出来たからである。

火災を起したモスクワは、めらくと燃え續けた。殆どすべての大砲は、赤軍の手中に歸し、彼等は假借なく砲彈を、市街へ浴せかけた。労働者ムラアロフと少尉のアロオセエフ及び、パプロフが、ヴォリシエヴィキ共を指揮してゐた。彼等が、クレムリンを、そのままにして置いたのは、首都の聖地を占據した白軍は、其處に立てこもつて孤立してしまふだらうと思つたからである。門から出さねばいいと言ふ作戦だつたのだ。

彼等は、その最初の、そして決定的な攻撃を、ニキイツカヤ門に向けた、と言ふのは、モスクワ市のその地點には、大小二つのニキイツカヤ門があつて、遊歩道を挟んでゐたからである。此處が、アレクサンドロフスクの陸軍士官學

ニキイツカヤ門

校から出て、恰度中心點を出て、その半徑の末端に當つてゐて、白軍を代表集會所へ引寄せる事が出来たのだ。此の地點から向ふへは行けなかつたし、ツビヨルスカヤ遊歩道の末端にあるツロイツツカヤの學生集會所の建物に集注するだけだつた。敵に眞面向くとすれば、此の建物へは左から一ブロンナヤ河口からであつた。

ツロイツツカヤの學生集會所を占據した隊長は、ミーシャ・ムウヒンであつた。實際上の指揮者は、ニカライ・ムウヒン中尉である。白軍蜂起當初、隊は、八十五名の士官候補生と少數の本部附きの、特にまだ學生の若い連中がゐた。ムウヒンの隊と本隊との聯絡は、市内の電話で保たれてゐたが、やがて、斷絶すると、傳令を使つてゐた。猶、白軍の持つてゐた唯一の装甲車が、士官學校からやつて來た。

本部へ届いた最初の傳令は、その様に傳へたのであつた。

ツビヨルスカヤ、遊歩道半距離まで、ブーシユキン記念碑寄りに進出す。記念碑附近には、相當兵力を赤軍は集結し、支離滅裂なる砲火を吾が攻撃路に浴せつゝあり。赤軍を撃つは易し、彼等は辛くも攻戦しあるに過ぎず。ツロイツツカヤ集會所より、我が主力を未だ分散し得ず、即ち、ニキツツカヤ大門に攻撃し來たる形勢あり、赤軍はチエルスイシヨフスキー小路を進行中なり。如何すべきや？ ムウヒン中尉

夜三時

是に對する指令は、

記念碑より赤軍を掃蕩し、ツビヨルスカヤ通りへ出で、代表集會所へ至る
ニキイツツカヤ門

進路を開くべし。ニキイツツカヤ門掃蕩に装甲車を送付す。

午前五時、ニキイツツカヤの各門と、ツビヨルスカヤ遊歩道は、赤軍の重砲に砲撃されたが、砲弾は右側ヴェリシエヴィキの陣地に落ちた。大砲の響が靜かになつた瞬間、遠くの方で、號泣する様な砲聲が聽えてゐた。ばちばちと鳴る小銃の響きは、間斷なく射ち續いて、彈丸は、遊歩道の並樹の上をかすめて行つた。

—ミーシャ、行かう！

ムウヒン中尉が口を切つた。

—奴ら、すぐ逃げだすぞ俺の言ふ通りだ。

—勿論！ すぐ、突撃やるか？

中尉は、冷たいニッケルの口笛を唇へもつていつた。

「ミーシャ、お前は左側へ行け。俺は右側へ行くから。木株の間の草を這つて行くんだ。笛を吹いたらね。士官候補生達は突撃だ！ 先頭行くんだ。」

士官學校の連中は俺ん處へ廻せ！ 早いこと！

互ひに、隣りにゐる戦友の荒い息づかひが通ひ、足を搏つ響き、總身の力を振つて引く口環の音、銃底の鈍い響きがはつきり、耳に入る。前方には、遊歩道の並木が、次第に、高く大きく、黒くなつてくる。ブーシユキン記念碑かな、さうだ！

「ウラア！」

隊長の低く太い聲だ。それに應じて、しぼる様なロシア語の叫び聲が破裂した。

「ウララア！」

ニキイツカヤ門

記念碑は占據した。その下には、數個の屍體が横はり、その一つは、記念碑の鐵鎖にぶら下つてゐた。「ストラアスヌイ」修道院の高く聳えた鐘塔から、前方廣場にかけては、全く砂漠の様になつてゐた。ツビヨルスカヤ通りは、左と右へ流れてゐる。右側は、たつた二棟、住宅があつて、それが、ムウヒンの隊と代表集會所を仕切つてゐた。そついを占據し、一氣にヴォリシエヴィキの頭を刎ねたら、それこそ叛徒を撃つ白軍の完全な勝利だ！ 今だ、これをやるのは、今だ！ 今直ぐやるべきだ！

「ミーシャ！」

「はい！」

「突入しやう！」

「小人數だ！」

「だが、本隊と連絡する間に、もう一隊居ればね。唯の一中隊だ！ 何かに同じ事だ、やつてみやう！ 装甲車が今すぐ、ツビヨルスカヤ通りへ突入する！」

「ミーシャ、お前は、左側を、家屋にびつたりついて行け、俺は右側だ！ 隊は、ツビヨルスカヤ通りを進んだ。その時、前方に號泣する様な叫びが起つた。」

「くるぞ！ 奴ら来るぞ！」

「装甲車は此處だ！ 何處だ装甲車は？」

「喚くな、馬鹿！ 靜かに……這つてくる奴を殺つつけるんだ！」

前方には、靜かに、だが頑強に近づく大圓柱の如く重い足音がする。

「船員さん！ 船員さん！」

ツビヨルスカヤ通りの眞暗な闇の中から、ヒステリカルな女の叫び聲が前方に起つた。

ニキイツカヤ門

ベトログラードから来た人よ！ 兄弟じやないか！

ミーシャの左に居たルイスが鈍い音をたて、倒れ、中尉ムウヒンと並んでゐたコリイトが聲をあげた。闇の前方は、唸り、わつと起る叫聲に搖るぎ、砲火に破裂した。船員達は止まつた。突入は駄目だ。彼等は這つたまゝ、銃口を切つて應戦せねばならなかつた。士官候補生の處までは届かなかつたが、手榴弾が、きゆうん、きゆうんと飛んで來た。

やがて、前方に、數台の自動車のモーターが唸つた。装甲車が動き出したのだ。ムウヒン中尉は、直ちに、隊をブーシユキン記念碑まで後退させた。隊には死傷者がある。装甲車は廣場へ歸つた。ツビヨルスキー遊歩道に向つて、眞向ふに敵の砲火が飛んで來たのだつた。

夜明けになつて、赤軍は、士官候補生の占めてゐたモスクワ各區を射撃し始めたが、やがて益々、烈しい集中射撃になつて來た。重砲に撃たれたツロイツカヤ集會所は、火災を起し、リヤブシンスキーの數階建の邸宅も、ツビヨルスキーの遊歩道に出張つた傍屋も火焰に包まれてしまつた。

ムウヒン中尉は、本部に次の様な報告をした。

午前四時、ツビヨルスカヤ通りを辛うじて突破、代表集會所へ半戸ばかり動く。敵の優勢兵力に會ひ、「アブローラ」號船員捕虜の言に依れば、ベトログラードより到着せるものゝ如し。若干の死傷者を出し、ブーシユキン記念碑に退く。されど装甲車の攻撃ありて支持ならず。ツロイツカヤに防戦す。ヴォリシエヴィキは、スツラアストナヤ廣場に野砲を構へ、直射しニキイツカヤ門

て學生集會所を撃たんとしあり。本部の義勇兵らは、夜間、吾を捨てたり。指令を待つ。

此の返答は、

萬難を排し支持せよ。ボゴロウドスクより、精銳大隊到着の望みあり。装甲師團と交渉し、中立を守らしめん。午後三時詳細判明すべし。

本隊の返書によむと、ムウヒン中尉は言つた。

―行き給へ。最後の彈藥を出すんだ。せめて、五百個でも手榴弾があれば、

―中尉殿！

青年は、死人の様に眞蒼になつて言つた。

「ニキイツカヤの遊歩道は赤軍に奪られてゐます。私は、やつと抜けて來ました。傷をうけてゐます。」

彼は、血にぬれた首すぢをみせた。耳の後から流れ出た血は、外套の襟を眞赤に染めてゐた。

その時、ムウヒン中尉は、脊後を突かれはしないかと危惧したので、弟に、機關銃隊を連れて、ニキイツカヤ門に向ふ様に命じたのだつた。彼自身も、情勢を見極めるために、單身出て行つた。彼は、集會所の扉口で、數分間、士官候補生の隊に志願して來た、彼と同じ、前線の將校に引き留められたのだつた。その將校の名前は知らなかつた。

「どうする積りだい？」

手を振りながら、將校は訊きとがめた。

「われ／＼の形勢は、明らかに敗北だ！」

ニキイツカヤ門

「どうしても支持するのだ。是が命令だ。三時間したら、援隊がくる望みがある。」

「支へたところでさ、最早や、窮迫するばかりだ。」

「此の時、砲彈が唸りながら、集會所の建物を搖るがした。煉瓦が裂け、建物の内部は、だら／＼と碎け落ちた。彈痕と破れた窓から、一齊に、こん／＼と、火を吐いて黒煙が立ち昇つた。集會所は燃え始めたのだつた。」

機關銃の射撃が弱くなるのを狙つて、赤軍は、スツラアスナヤ廣場に砲を置いて、ぐん／＼砲身を延ばして、遊歩道のはづれに向つて、直射した。集會所は、既に眞赤になつてゐた。ニキイツカヤの門を支へる事は、最早や、何の意味もなくなつたのだつた。

退却するとすれば、何處へ？ 住宅に沿つて逃げる？ 一人々々捕るか、殺されるだけぢやないか。アトキサンゴフクの陣地へ突破せねばならぬ。ムウ

ビンの頭に閃めいたのは是だつた。

彼は、笛を吹いて、まるで、頭上に剣を振つてみせた。此處だ！ 此處だ！ 火焰の中から隊員を呼び出して、ニキツツカヤの隅で燃え上つてゐた家を抜け出したのだつた。士官候補生達は、彼に従いて来た——一睡もしない彼等の顔は、疲労と苦惱にやせこけてゐた。彼等の一人が、ムウヒンの袖口を握つて叫んだのである。

—中尉殿、弟さんが。

—何?!

—向ふです！

彼の手の指した處は、ニキイツカヤの遊歩道の家の隅を出た機關銃の目標になる處である。二人の士官候補生が、その危険な場所から、ルイスと木箱を引づつてくる、今一人は、ミイシヤを抱きあげ様として身を屈めてゐるのだ。

ニキイツカヤ門

ムウヒン中尉は、弟のゐる處へ馳け出した。彼をみつけた士官候補生は直立して言つた。

—顎額をやられました。

錐にもまれる様な烈しい痛みが、將校の胸を一杯にした、それをぐつと、押しのかげ様とすると、突然、それは胸を震はせながら、小さな塊りになつて詰つて来た。ムウヒン中尉は、弟の身體の上に身を屈めた。彼の頭は眞赤な血にまみれてゐる。貫通銃剣をうけた、彼の頭蓋骨からは、クワスの様にどろりと白い脳漿がハミ出てゐた。奴を運び出す？ 何處へ？ ママの處へ？ 駄目だ！ あゝ、神よ！ 彼の頭の中は、こんがらがつて来た。

彼は唯、屍體の上に棒立ちになつたまま、手の下し様もなくみつめるばかりだつた。涙が、ごく／＼と彼の眼から溢れ出た。涙にうるんだ眼をあげると、
道の向ふに、家の反対側の隅から、卸の外れた短かい黒の上衣に庇のない水兵

帽の大きな男が馳け出して来るのを見とめた。青い二本のリボンがひら／＼と水兵帽の後にひらめいてゐた。その男の手には、銃底の長い拳銃が握られ、將校を捜すかの様に、銃をあげた。ムウヒン中尉は、ケースから七連發の短銃を取り出すと、それを上げないで、水兵に向つて行つた。水夫は、一發、二發、射ち放したが、拳銃を地面へ向けたまゝ向つて来る將校をみつめて、ぞつとしたらしい。二發とも當らなかつたのだ。水夫は焦つてゐた。三回目の弾丸を射つ勇氣が彼には出なかつた。七連發の弾丸は彼の口の中を貫通した。齒を碎き後頭部を貫いたのだ。ムウヒンは、水兵の傷口から血が吹き出てくるのを、ぢつとみつめてゐた。やがて、彼は、ミーンヤを忘れた様に、隊の方へ歸へつて行つた。

ニキイツカヤ門

少くなつた隊を連れ、ムウヒン中尉が、士官學校へ向つて突破するのは、眞晝間の時間しかなかつた。士官候補生の一人で、通路の門を整備してゐる者がゐたので、助けになつた。彼を威嚇したり罵倒したりして、やうやく、重い鐵門の潜りを開きにかゝつた。聲を震はせながら、すがる様に、彼等の後から言ふのだつた。

—駄目です。私には權利がありません。禁止されてゐるのです。

—誰が？

—知りません。あなた方の様な人が来て、誰にも通路の門を開けちやならんと命ぜられたのです。何だか、インテリ風の士官候補生でした……

—あゝ、それは仲間だ！
—知りません！ 禁止されてゐますから。

—馬鹿！ 開ける！ 命令だ。でなきや、手榴弾を打ち込むぞ？

ムウヒン中尉は、遂に我慢ならなくなつて叫んだ。やがて、潜り戸の門ががちゃ／＼と鳴つた。その向ふには、ラザレフスキー學院の制服を看た學生がベルダン銃を持つて、立つてゐた。學生の脊越しに、文官服に劍を吊つた若者が、恐怖に歪んだ顔を覗かせてゐるのだ。

ちらと二人を見て、ムウヒンは、又、門を閉めて、士官候補生以外は誰も入れてはならんと命じたのだつた。彼等は、外庭を通り抜けて次の小路に出張つた門へ來た。その反対側には、士官學校の練兵場を圍んでゐる煉瓦の壁が並んでゐた。

通路を抜けて行くと、やがて、彼等は、首都の平和な住民達の姿を見出したのだつた。

彈丸を避けた家々の壁、家から家へ逃げまどつた住民は、外庭に群がつてゐた。彼等は事件のニュースを傳へ合つたり、何處からか手に茶瓶や何かを手にして出て来るのだつた。女達が多くて、男は稀で、ムウヒンは、數名、さ程の年でもない將校の姿をみ出した。その一人で、大尉の肩章をつけた男が、彼の傍へ馳け寄つて來ると、息を弾ませて言つた。

—やあ、中尉殿、吾軍はやつたかね？

—知らんですよ。あんたと同じでね。われわれは不利になるらしい。

ムウヒンは、是だけ言ふと、先は聞かうともしないで、ぐんぐん歩いて行つた。

隊は、外庭の第二の門に近づいた。と、或る昇り段から、茶色のレインコートを着た十歳位の娘の子が馳け出して來た。彼女は、中尉の眼の前に、びつたり立つて、並んで行く士官候補生の手を掴むと、大聲で嬉し相に叫ぶのだつた。

—ミーシャ、到頭、歸つたわね。ママは、二晩、泣いてばかりゐるの。あたしは、もう、あんたを離さないから。

ミーシャか？ ムウヒン中尉は、ふと、胸の中に鈍い痛みを憶えた。始めて、彼は、その士官候補生の顔を、まぎん／＼とみたのである。疲れ果てた顔だが、白つばい眉毛をした、まだほんの子供であつた。彼の妹の手を離さうとして焦つてゐるのだ。

—何んて言ふのだ？

何故か、中尉は、聞いてみたくなつた。娘の子の瞳は、憎惡にみちて光つてゐる様だつた。

—コロブコフです。中尉殿！

士官候補生が答へた。

まるで、俺のミーシャそつくりだ。何故、彼を連れて行くのだ？ 俺達は、

ニキイツカヤ門

どの道、殺られる！ ムウヒンは、鋭い聲で彼に言った。
—士官候補生、コロブコフ、歸宅を命ず。着更しう。銃は俺に渡せ！

！でも、中尉殿。

—是は、命令だぞ！

娘は、ムウヒンに飛びついた。彼は、自分の頬に小さな口づけを、瞬間、感
じたのだつた。

—ミィシヤ、ミィシヤ、あんたは行けるのよ！ おつしやる通りにするんだ
わ。ママが泣いてるから。

—行つた！ 行つた！ どうして、皆んなが、……僕は、何でもない、行けよ！

士官候補生は呻めく様に叫んだ。

—命令として言ふんだぞ！

門のすぐ側で、ムウヒン中尉は彼に向つて言った。

—言ふ通りするんだ。是等の家を利用して、着更へし、隠れるんだ。われ／＼
のやる事は、君自身知つてるだらう。徒らに死ぬだけが能じやない。戦ひ

は始まつたばかりだ。一ヶ月もしたら、又、君の身體が必要になるのだ。

いゝか！

他の士官候補生も、ムウヒン中尉の言葉に従て彼を止めなかつた。彼等は、
娘に、連れて歸へれと言ふばかりである。身を守る勇士の美しい態度だつた。

數分経つて、隊は、士官學校の戦火に埋つた廣庭に立つてゐた。此處へ來る
と、彼等は急に、ぐつたり疲勞を憶えたのだつた。飲むことより、食ふことよ
り、唯、無性に眠たかつた。士官學校の寢室に入ると、彼等は、ベッドと言は
ず、床と言はず、轉んだ處で、ねてしまつた。

ニキイツカヤ門

—中尉殿— 中尉殿—

ムウヒンは眼を開いたが、數秒間、全然、意識がはつきりしなかつた。彼は
前線の自分の聯隊で、同じ生れ故郷の連中と一緒にゐて、彼の肩を揺すつた兵
士は、奧太利軍の攻撃を報告してゐるのだとばかり思つてゐた、だが、彼の眼
に寫つたのは、故郷ではなくて、たゞ廣い眞暗がりの部屋の中だつた。彼のね
てゐる、寢床から稍々離れた處に、ケロシンラムプが燃えてゐた。

—何んだい？

七連發の拳銃を、ふいと、彼は習慣で、握りながら起ち上つた。

—本隊から御呼びです。

—あ！ さうか！

ムウヒン中尉は、すべてを思ひ出した、やうやく理解したのだつた。くつき
り、浮び上つて來た意識の中に、血にまみれて、汚れた丸石の上に横つたミィ

シズメの頭が、きざりと、閃めた。丸石の下は血の池の様になつてゐた、何かしら、胸の中へ、糸針を突き通す様な、痛みが起つた、彼は、瞬間、眼蓋を閉ぢて、深く息を吸ひ込むと、金属張りの聲をあげた。

「よし、行くから……」
十五分して、ムウヒンは、次の様な指令をうけたのだつた。「大學に程近い小路に閉ぢ籠つてゐた士官學校の候補生の一團を、引渡しに行く事だつた——。彼は冷たい茶をぐつと呑み込み、パンの上皮だけ残つたのを嚙ぢると、目的地へ如何にして行かうかと頭を働かせてゐた、卓上にあるモスクワの見取圖には、各通りや小路を細かく刻み込んであつた。パンをポケットへ入れると、ムウヒンはちつと、圖面をみつめながら考へ込んだ。茶を呑んでしまふと、彼は、士官學校の紋章のついた陶器のコップを置いて、小聲で言ふのだつた。

「さうだ。さうすりや、いじな。君達、用意じたか？……」
ニ、キイツカヤ門

ムウヒン中尉は、頭をあげると、卓子の側に立つてゐた騎兵下士をみた。
「はつ、出来てゐます。候補生達は全部、揃つてゐます。」

「よしや、後は天に任せて、……」
士官候補生の一隊は、劍や銃をがちゃ／＼言はせながら、階段を下りると出口へ出て士官學校の廣庭を横切り、高い石壁の小門をぬけて、ムウヒンが、先に隊を外庭の通路へ連れて來たその小路へ出たのだつた。今は、大學區に出るには、こどうでも小路を通らねばならなかつた。

モスクワは、一瞬の休みもなく、砲聲がどうこうと鳴り響き、炸裂する硬じい音がして、青い星空に、死の神秘的なメロデーの如き、きゆん、きゆんと言ふ銃弾が聞えてゐた。

「ヴオリシエヴィキは、惜し氣もなく、銃弾をうち、砲弾を飛ばすのだ。」

風のなき晴れた朝を想ふ家々の嚴しびなき夜にあつた。……

Main body of handwritten text on page 22, starting with '...のちうけいせい...'.

Second paragraph of handwritten text on page 22, starting with '...のちうけいせい...'.

Third paragraph of handwritten text on page 22, starting with '...のちうけいせい...'.

Handwritten section header: 二つとすうんきり

Text block on page 23, starting with '...のちうけいせい...'.

Main body of handwritten text on page 23, starting with '...のちうけいせい...'.

Main body of handwritten text on page 23, starting with '...のちうけいせい...'.

灰色の髪の毛のまじつた、年配の主婦が、彼等に愛想よく言ふのだつた。

「腹充つれば、憂ひなしですよ。どうぞ、御氣樂に、さ！ あなた方が勝つ

て下さればロシアは未來永劫に幸ひです。

「有難うござります。

」ムウヒン中尉は、夫人の手に接吻した。

「出来ませうれば、何か茶瓶にでも、見張りの者にも、御願ひ致したいのです

」だが、

「いえ、いえ、今直ぐ用意します。

」幼年學校の生徒は、悪いそくとして言つた。

「僕が持つて来ますよ。いいえ、僕が持つて行きますよ。ママ、シヤムも

持つていよの？」

「此處で、ムウヒン中尉は、初めて、二晝夜分の熱い、濃い、甘いお茶を呑ん

ニキイツカヤ門

だのだつた。彼は、遠慮なく、上等のバターを塗つたパン切れを食べた。

半時間して、隊の居場所が暴露れてしまつた。路次の兩方の入口は、拾づめ

にされた様に、赤軍の装甲車に塞がれてしまつた。ヤホントラの家の附近には、

砲彈が落ちて來た。彼等の投げた手榴彈の一つは、ムウヒン中尉の十歩ばかり

の處に落ちて彼は打倒れると共に意識を失つてしまつた。進んでムウヒン中尉

と共に出た、幼年學校の少年はその破片に當つて死んだのだつた。

倒れた隊長と、少年の屍體を、士官候補生達は、ヤホシトフの家へ運び入れ

ると、彼等は、辯護士トルブウジンの家の廣い庭園を楯にして、次の通りへ這

ひ出ると散りかゝりになつた。或者は、知り合ひや他人の家などへ巧く潜り込み、

或者は赤軍の手に捕へられて、無残にも殺されたのだつた。

ムウヒン中尉は、一週間ばかりすると回復した。二晝夜と言ふもの、彼は意識を失ひ、五日間は枕から頭をあげる事が出来ず、後頭部の痛みは烈しく、殆ど狂はんばかりだつたのだ。

彼が、身を屈めて様子を見てゐる娘に最初に言つた言葉は、かうだつた。

「お願ひですから……」マアラヤ、ブロンナの三二一〇番地へ行つて下さ

い……私の母が居ます。……ムウヒンです、……私は生きてゐること、あ

なたの家に居ること、……私の弟、ミーシヤは街から逃げ出した事を傳へ

て下さい。……弟は殺られたんですが、是は母に言はなさい下さい。

「……さうすわ。きつと、お傳へしますから。」

「ムウヒンは、蜂起隊の事を思ひ出した。」

「戦團は續いてゐますか？」えッ？

ニキイツカヤ門

新聞でも、公式の話でも、市民の間でも、「元將校」と言ふ新語が使はれ始めた。モスクワの生活は、重苦しく、血腥く、途つた軌道に乗つて行つた。かうした日の或日、ニキイツカヤ門に近い、ツロイツカヤの士官學校生徒集會所の燒跡へ、前線から着くとすぐ、ムウヒンの指揮する士官候補生の半ケ中隊に入り、中隊と共に、叛亂の第一夜に参戦したその將校がやつて來た。だが、今は、彼は私服で、毛皮の襟のついた外套に、フェルト帽を被つてゐた。モスクワツ見で、モスクワ擲弾兵だつた。彼は、ムウヒンが士官候補生達を、ニキイツカヤ門に連れ出したその朝、活路を見出して助かつたのだつた。情勢の不利を悟つた彼は、士官候補生の跡を追はないで、毀れた窓から、知り合ひの小さな紙屋へ潜り込んだのだつた。それは、憶病だつたからではない、正しい判断をした結果で、反撃が成らない以上、來るべき闘争に生命を永らへる必要があつたからだ。

ニキイツカヤ門

廢墟となつた跡を、彼は、肉親の様な懐しさと愛着を憶えながら、みつめてゐた。且その夜あつた處のものは、既に、何もものもなく、恐怖もなかつた。否、其處にある思ひ出は、實に一六勝負の様に思はれて來た。カルダをすられただけの事だ。勝負はまだ、終つてゐないのだ。今一度、やる事だ。

彼は又、思ひ出に耽つた。士官候補生を指揮した中尉は、偉い奴だつた。大膽不敵な奴だ。沈著で、不敵だ。彼奴が生きて居れば、みつげ出して、逢ひたいものだ。俺達は、一緒に一緒になつて今に又、やるぞ！友人達は、彼を、北方のアルヘンゲリスクへ來いと言つて誘つたのだが、彼等は、モスクワの英國領事と聯絡があつて、英國人が、何か計畫を樹てゐると言ふ情報を持つて來たのである。彼は、北へは行きたくなかつたし、好きで

行かぬが、行かぬのは嫌だつたからである。彼は、北方のゴルニツキ

フが、ウホリジエウイキの壓迫など、糞喰へと言つた強い住民のゐるシベリヤへ、
行きたかつたのだつた。

「さうだ、あの中尉とシベリヤへ行くんだ！」

彼は、ニキイツカヤ大門を振り向くと、そんな夢を描いたのだつた。

「あの土地には、闘志満々たるあの將校なら、以て來いの處だ。奴が生きて居れば、……」

さう思つた瞬間、彼は、二歩程前に、ばつたり、此方へやつて來たムウヒンに出喰はした。やせこけた顔だが、肩章のない外套を着て、徽章のない帽子を被つてゐたが、まさしく彼だつた、眉根の黒味がかつた、青い羅紗地の外套に、毛皮の帽子を被つた娘が、彼と腕を組んで立つてゐた。

「やあ！ 中尉！ 久しぶりですね！ 貴方の事を考へてゐた處でしたよ！
彼は手を延ばさうとしたが、ムウヒン中尉が、早速と彼に氣づかないので、

ニキイツカヤ門

娘に對して帽子を取つたのだつた。

今、彼等の立つてゐるその場所は、實に、ミインヤ・ムウヒンの若い血に依つて、泥血の池をつくつた所だつた。三人―二人の將校と將校の娘は、―は手を組み合せてツロイツカヤの學生集會所の燒跡から、ニキイツカヤ門へ向つて、新しい抗爭の道を辿り続ける決意をしたのだつた。

良

心

ア・カルホフスキ！

畫家のクルイロフは、描き終つたばかりの風景畫をみつめながら頭を振つてゐた。彼は不満だつた。十分ばかり、みつめてゐたが、やがて、彼はその畫の缺陷に氣がついた。絶壁にある靜かな河の水面の光澤が、全然、ないからだ。絶壁の壁の具合も、その同じ様な樹の並んだ寫生の生々した色も、微風に軽く揺いだ木の葉の模様も、又、それらの樹が水面に映つた陰影の彩り方もすべてよかつた。だが、水面そのものは、全く死んでしまつて、暗いのである。勿論、彼としては其處にほんの僅かだが光が出てゐる様には思へたのだが。駄目だ、それを濃く明るくした處で駄目だ！ 全體の調子が破れてしまふのだ。それで、此のまゝじゃ、印象が全然ないのである。クルイロフは又、頭を振つた。

良心

「さうだ！ 此處へも少し紺青色を塗ることつた！ さうすれば水面が生きて来る。」

突然、彼の後に誰かの聲がしたかと思ふと、その男は、薄く紫色に彩つた空の中に夕陽の光澤を出してゐる繪の右隅を、汚れた人差指で指したのである。

クルイロフは、驚いて振り返つたが、そこに立つてゐるのは、くしゃくしゃに頭髮を亂した汚れ臭つた瘦せつぼの顔をして、大きな碧い腫を妙にらん／＼と輝かした十四歳位のぼろ着を被た少年だつた。

少年は、急に、大膽な自分の行爲に氣がついたのか、手を引つ込めると二三歩、後退さりしてしまつた。

「紺青色を塗るつて言つたね、何處だい？」

彼は、少年がすつかりびく／＼してゐるらしいので、聲を柔げながら言葉を吐き出した。
「こつちへ御寄りよ。怖がることないさ。何處を直すんだい？ えッ？」

少年は、畏る／＼近づいて來ると、又、此處んところで、紺青色を塗るのは、と言つて先の場所を指した。

「ほんの一寸、灰色の影をつけたら……」

少年は、か細い聲で囁く様に言つた。

畫家は、微笑みながら、指された薔薇色になつてゐる處を、繪筆を取つて訂正し始めた。

少々、軽く油を塗るとすつかりよくなつてしまつた。その空のほん僅かの個處を塗り變へただけで、絶壁の水面は生々として光澤が出たのである。畫家は、すつかり、參つた形であつた。

「いゝなあ！ とつてもいゝ！」

彼の後で、又、少年の驚嘆する聲が起つた。畫家は、振返ると、少年はすつ

かり繪に惹きつけられたまゝ立つてゐるのだ。

—君は何んと言ふの？

クルイロフは、好奇心にみちた眼を、そのぼろ服の少年の顔に鋭く注いだ。

少年は、ぎくりとして吃りながら笑へた。

—僕……コステヤ……コステヤです。

—そお！ コステヤ、いゝ名だ。仲好しにならう。

彼は手を差し延べて言つた。

—僕は、ワシリー・アレクセイウイチだ。一體どうして、此處んところを直したらいゝつてこと、君は氣がついたんだね！

小いちやな汚れた手を握つて話し始めた。

—御覽なさい！ すぐ氣がつかますよ。僕は、ちつと見てゐる中に、貴方が直せばいゝがな……と思つたのです。氣がつかれませんでしたか？

少年は、地平線の方を指して言つた。

—さうなんだ。僕も、此處ん處がまづいと氣が氣でなかつたのさ。

彼は、絶壁の水面を指して答へた。

—ああ、でも、河はいゝんです。とつてもいゝんです。直さねばならんのは、僕の指した處です。

コステヤは、彼の言葉を遮つたが、ふいと又、自分の大膽率直な言葉遣ひに憶した様に身を退いたのだつた。

—是が分るとすれば、大したものだ。君は勉強をした事があるの？

—一寸ばかり……僕、二年級まで行つただけで、ママが死んで、止しちやつたの。

—いゝや、さうじゃないんだ。繪の勉強をした事があるかつて、まいてるのよ。

良心

—いゝえ、自分で描いた事は一度もないんです、けど、いつもパパが描くのを見てるんです。パパは、僕に、色の出し方を教へてくれたんです。あ、僕は、パパの繪の話は好きだな……でも、パパ、しょつちゆ、描かないの、僕の知つてるのはほんの僅かで、何時もは、お酒ばかり呑んじやつて……よく、パパが言つただけで、「今にお前に繪の描き方を教へてやるぞ、お前はきつと大畫家になれるからな、俺の言ふ通りにするんだ。お前には天分があらあー」。パパは死んじやつたんです。だから、僕は約束通り教へて貰へなかつたんです。

—そお！ 君、繪を習いたい？

クルイロフは、少年の話をちつと聞き終ると、かう言つて尋ねてみたのだが、少年は、頭を振つて、手を組み合せると祈る様な姿勢をするのだつた。

畫家は不思議に思った。

「僕は、何もしてません。僕は乞食です。……恥しいんです。人にねだるの
が。」—コスタヤはさう言った。

畫家は、妙にうら愁しくなつて少年に惹かれてしまつたが、話題を變へるつもりで彼は言葉を續けた。

「誰か身寄りの人はゐないの？」

少年は、急に生々した顔になつた。

「あります！」

彼は、何となく愛情のこもつた優しい眼差しになつて口を切つた。

「妹のアンナです。あの娘は、尙僕なんですが、とつても賢いんです。十歳で、女學校の一級生で一番ですよ！」

「學校に通つてるの？」

良心

クルイロフは、驚いて聞き返した。

「ええ、授業料なしで通學してゐるんです。でも、優等生なんだもの。僕はあの妹が女學校を出てくれるやうに祈つてゐるんです。でも、教科書が高くついて、喜捨のお金ちや足らないんです。」

コスタヤは、又、愁し相に頭を落した。二人の會話は、そのまゝ、一寸、途切れてしまつた。

「コスタヤ、ねえ、僕が教へて上げやうか？ どう？」

「貴方が？」

コスタヤは、餘りに唐突なので驚きながら、昂奮して言つた。

「も、もちろん、教へて下さい。嬉しいなあ！ いゝですか？ 僕、教へて下さる？ 本當に！」

彼はひとく驚いてゐた。

「うん、やるかね。」
ワシリイ・アレクセイウイチはにこ／＼しながら、歸宅の用意をし始めた。少年は、片付けを手傳ひながら繪具箱を持つたが、畫家は住所を告げると、大股に街に出て行つた。道端の門のあたりまでくると、彼はくると少年を振り返つた。コスタヤは立止まつて彼をみつめてゐた。

「明日、六時だよ、忘れない様に、ね！」

ワシリイ・アレクセイウイチは、朗かに叫ぶと手を振つて、少年と別れたのだつた。……

クルイロフは、コスタヤに教へる約束をした事を別段、後悔しなかつた。最初の日、すつかり、少年に天分の芽生えがある事を認めたからだ。彼は、實にいゝ天分を持つてゐた。伸び／＼と素直に、少年の腕は進歩して、ワシリイ・アレクセイウイチはすつかり、驚いてしまつたのだが、彼は、少年の慢心を

怖れてちつと辛へたまゝ決して賞めなかつた。

或時、コスチャが、何時もの様に彼の家へやつて来た時、畫家は言つた。

「コスチャ、今日は御稽古は止さう。僕は忙しいからね。」

すると、コスチャは、温順しく彼の言葉に従つて、椅子に腰を下ろしたまゝちつと、ワシリー・アレクセイウイチが、すつかり他所行きの構へをしてゐるのをみつめてゐたが、急に、口を切つたのである。

「女の人？」

クルイロフは、一寸、少年をみると頭を振つて笑つてみせた。

「今日はね、コスチャ、とつても、僕のお芽出度い日なんだよ。都合よく行

けば、一週間したら、此の家へはとて

も可愛い奥さんがくるんだよ。」

「ああ、あそこの隅つこの切れで包んだ寫眞の人ですか？」

「日彼女だよ。」

彼は笑ひながら答へた。

「何時、あの寫眞に気がついたんだい？ 君にみせた事はないがね。」

コスチャは、突然、生々して言つた。

「ねえ、僕の頭ん中に一つテーマがあんですけど、どうにも出来ないんです。」

僕が、貴方程、描けたらね。まつと、僕、描き上げるんだけど！」

「どんなテーマだい？ 言つて御覽よ。」

「大物ですよ。砂漠なんです。灼けつく様な太陽の光で、眞白い砂がぎら／＼光つてゐるのです。その周りは、草もなく、棘草も何んにもないんです。たつた一つ、ぎら／＼太陽に照りつけられた砂漠が、かすかにかう丘の様になつてゐるだけです。まるで、裸かの様な砂地です。遠くの方に、暗くなつてオアシスがみえるのです。それは、蜃氣楼の様でもあり、影になつた冷やりとした本當に安息所になつた處とも思へるのです。だけど、ぼやけて

良心

ゐて分らないのです。前面には、二人の人影があります。一つは男です。男の足許には、履き古したぼろ靴があつて、そんなの捨てゝもいゝ様なものなんです。彼の服は、あつちこつち、ぼろけて穴だらけで、陽灼けのした足の筋がみえてゐて、右腕の筋肉もむき出しなんです。頭の髪はだらりと落ちて、顔にかぶさつてゐるのです。汗ににじんだ顔は、ぐつと男らしく、大膽に、何處へでも、安息の場所に向つて突進して行く面つきなんです。でも、眼は、「行けるだらうか？ 力が續くだらうか？」と言つた不安の翳があるのです。男の手には女が抱かれてゐます。その女の頭の髪は、後へ垂れ、白い、恰度、大理石の様な額をして、眼は閉ぢて、唇は軽く笑ひかけた様な恰好をして、ほんの一寸、開きかけた風をしてゐるのです。少年は、長い話を立て続けにしたので、疲れたらしく、大きな息を吐き出した。

「恐らく卒倒してゐるらしいのです。女の右手は、力なく下へ垂れ、左手は弱々しく、男の首を巻いてゐるのです。女の全身は、全く力がなく絶望にみちた恰好なんです。……」
さう言ふと、コスチャは口を閉ぢた。畫家は少年の話を、着更へを止めて、ちつと聴き惚れてゐた。少年は、はつきり、砂漠とその二人の人物を描き出したのだつた。

「その繪の題を、君は何とつけたんだ？」

畫家は、ふと、昂奮に驅られて尋ねてしまつた。

「幸福への道」です。

コスチャは、眼を輝かしながらかう言ふと、又、ぼつり／＼言葉をつなぎ始めた。

「砂漠は、是は人間の生きて行く道です。オアシスは、此の砂漠の中にある

良 心

人間の進んで行かねばならぬ目標なんです。生活上の不幸や惨めな障害や、そうした一切の苦しみと闘つて、求めて辿りつく安息所なんです。詰り、幸福を意味してゐるのです。人に依ては、苦しみもなく、自由に、まるで愉快な散歩でもしてゐる様に、此の幸福への道を行くのですが、それは金も友達も、澤山あるお金持の行く道です。その人達は、易々と行けるでせう。此處には、又、文明と言ふものが、役に立つこともありませんが、でも、易々と幸福を掴む人は稀です。大多数は、この苦難の道を行かねばならないのです。此の砂漠の男の様に、みな、一生懸命になつて、元氣に、大膽に働かねばならぬのです。此の女は、男の妻か、許婚か、それとも妹でもないのです。兎も角、大切な事は、彼女は、男がどんな事があろうともオアシスまで連れて行かねばならない義務のある女なんです。

でも、男は彼女を捨て、置いてけぼりにして目的地へ行つたつていいの

です。それは彼も知つてゐます。又、男は、オアシスへ着いても、望んでゐた安息所も休息もみつけ出せない事も知つてゐるのです。と言ふのは、彼は勝者でないので、敗者だからです。……

コスタヤは、一寸、口をつぐんだ。

「私は、よく貴方の氣の行く様に話せませんが、何うして、「幸福への道」と名づけたか、貴方、お分りですか？

クルイロフは頭を振つてみせた。

「そして、私が男の手に誰をモデルにして、描かうとしてゐるかお分りですか？ コスタヤは、言葉を續けて行つた。

「その、そこん處にあつた寫眞の人です。

「ああ、そんなに奇麗にみえるのかい？

「顔の美しいと言ふ事じやありません。その人は、かう何と言つていいですか

良 心

……とにかく闘つて行けるだけの、その……この苦しい道を進んで行ける人の様に思へるのです。

ワシリー・アレクセイウイチは、コスチャに近づくと接吻した。

「有難う、コスチャ、だけど、不思議だね、君は、ちつとも彼女を知らずにゐて、よく、頭の中にはつきり描き出せたものだね。

「でも、はつきり、みえたんですから。

「で、男は？ 男は僕にしたのかい？

コスチャは、一寸、顔をしかめながら、クルイロフをみつめてゐた。

「ワシリー・アレクセイウイチさん、あなたは描きません。でも、御免なさい。その男と言ふのは、長い苦しい道を行かねばならないのです。でも、

あなたは、さうでないのです……とにかく、あなたは描きません。

「……何かい？ 僕の表情に哀れなものが出てないつて言ふのかい？

「コスチャは、益々しかめ面をして、殆ど聞き取りにくい程の低い聲になつた。
「御免なさい。

「そう、さうだね。

畫家は、一寸、頭をかしげながら、繪の幻想をもみ消すと、起き上つて言ふのだつた。

「コスチャ、時間だから左様ならするよ。その繪の話は、又、後でするとしやう。思ひつきはいゝね。

コスチャも起き上ると、去りかけたが、ワシリー・アレクセイウイチは少年に繪具箱を呼び止めて興へてやつた。コスチャは、びつくりした様に、彼をまざくみつめるのだつた。

「お取りよ。持つていゝよ。是は君の爲に購へたんだよ。昨日、繪具を集めといたんだ。紙もあるからね。

良、心

—有難うござります。

少年は、しつかり、繪具を胸に突きしめると、階段を飛ぶ様に駆け降りて、表通りへ飛び出したのだつた。と、突然、彼の腕を、ぐつと掴へた者があつた。

—やいやい、早いとこ盗つたな!

コスチャは放心した様にぼんやりなつてしまつた。彼はそれを盗んだのじやないと言はうとしたが、逆に逃げ出してしまつたのである。後から大聲で叫び立てる聲が聞えた。

—そいつを掴へろ! 泥棒を掴へろ!

コスチャは、行手に塞がつて、ぐつと掴へられてしまつた。だが、コスチャは、するりと抜け出して、別の方へ逃げ出したが、其處にも又、敵がゐるに到頭、彼は出道を失つてしまつた。誰かしらないが、がんと彼は背中を打たれたのだつた。コスチャは、本能的に手を縮めて、身體の平均を取つたのだが、大切な

繪具箱は橋の上で落ち、繪具は四方に散亂してしまつた。誰かの手が、ぐいと延びてコスチャの手を握つてしまつた。貴重な繪具がばらばらになるのをみつめなから、彼は思々しさに震へてかつと、その男の手にかみついたのでつた。

—やいやい、蛇の様な奴だな! 貴様! かみついたりなんぞしやがつて! 男は、かう言ふと、ぐわしんと一撃、彼の頬を殴りつけた。

コスチャは、卒倒し相になつたのだが、それでも、かみついて離さなかつた。彼の眼先はくらくらと暗くなつて、頭の中はがんがんと鳴り始めたのだつた。男は、又、立て続けに彼を撲りつけた。彼は男の手を離すと、両手で防ぎにかゝつた。だが駄目だつた。彼は強打をうけたので、足の力を失つてよろよろと、めると、橋に頭を打ちつけて全く意識を失つたまま動けなくなつてしまつた。だが、男達は猶も盲目滅法に、彼をなぐりつけ踏みつけるのだつた。

良 心

それから二週間経つた頃、クルイロフはすっかり少年の事を忘れて、新婚の幸福に酔つてゐた。彼の言葉通り、彼の家には若い主婦が來てゐたのである。彼女は可愛い均整の取れたすんなりとした身體をして、碧い瞳と濃い髪の毛をして、新鮮な空氣の様に爽かな感じを與へるのだつた。畫家の獨身の家は、かうして、暖かな美しい部屋に變つて行つた。接吻と楽しい數々の睦み事の中に、ワシリー・アレクセイウイチが、コスチャを思ひ出したか何うか。

或晩、おづ／＼と呼鈴を鳴らす音がして、クルイロフが扉を開くと、部屋へ入つて來たのは、小さな、見た處、七歳位の女の子だつた。彼女は尙儂だつた。彼文の瘦せた手には、畫家の見憶えのある繪具箱を包んで持つてゐた。ワシリー・アレクセイウイチは、すぐ、コスチャを思ひ出して、彼女が彼の妹である事を察した。

彼は娘に言葉をかけた。娘は、頭を縦に振ると、繪具箱を差し出した。

「コスチャが貴方に渡してくれと言つたので持つて来ましたの。……そして、コスチャにはもう用がなくなつたんです。

「どうして？ どうして又、あの子は自分でやつて来ないの？ 何かあつた？ 娘はごくくしゃくり上げるが、金切り聲で言ふのだつた。

「コスチャは永久に來ません。……コスチャは居なくなつたの。死んだんです。

彼女は先を續ける元氣もなく、唯、泣き出すばかりだつた。彼女の小さな身體は、泣きつゞけるので危ふく倒れ相になつてゐた。彼女は、ワシリー・アレクセイウイチにもたれる様にして手を顔にやつたなり、泣きじやくるのだつた。

その聲に出て來たクルイロフの妻は、娘の手を取つて、彼女をなだめ始めた。

良心

二人は、すつかり娘を宥めにかゝつてゐた。彼女を長椅子に坐らせて、二人は兩側に腰を下ろした。娘の髪の毛を撫でながら、優しい慰めの言葉をかけてゐたのだつた。

アーニヤは、やがて、氣分が靜まつてくると、ぼつりくくと二週間前の話を始めたのだつた。コスチャは血みどろになつて、見知らぬ人に運ばれてくると、一寸、譯を言つた切り、その人達は歸へつてしまつた。

そして、唯、コスチャは呻めきなから、「僕が盗つたんじゃない！ 繪具に觸つちやいかん！ ああ！ あんた達、繪具を放つちらかして、踏むんだ、踏むんだ！」と叫びつゞけたのだつた。そして、長椅子の上で、のた打ち始めた。三日ばかりはさうした状態が続いたのだが、近所の人達が來てみてくれたのだけれど、どうにも手のつけ様がなかつた、皆んな、乞食の様な人達ばかりで、何の助けにもならなかつた。

三日目の晩、コスチャは正氣づいて、眼を開くと、妹をみて、弱々しい微笑をすると、始めて口を利いたのだつた。

「繪具箱は？ 箱は？」

「アーニヤは、彼と一緒に持つて來てくれた箱を彼に差出すと、コスチャは、さもさも、嬉し相にそれを手で撫でながら、弱い聲を出して言つた。

「もう、是は要らん！」

そして言ふのだつた。

「若し死んだら、ワシリー・アレクセイウイチさんの處に届けておくれ。そして住所を告げたのだつた。それまで、ちつとも、畫家のことは言はなかつたのである。

「アーニヤ、泣かないでよ。僕の頼んだ通りするんだよ。忘れなさいね。

かう言つて、又、彼は意識不明になつてしまつた。そのまゝ、彼は死んでし

まつた。恰度、死ぬ直前、彼はがばりと起き上ると、何處かを指す様に手を出して言ったのだつた。

— 蜃氣樓！ 蜃氣樓！ 眞赤な太陽！ 白い砂！
さう言つたかと思ふと、力なく枕の上へ落ち込む倒れると最後に、

— 道は苦しい！ 遠い遠い！

と言ふのだつた。

アーニヤの話は以上の様なものだつた。二人は、彼女を家へ歸へさないで、眠た相に疲れ切つてゐる彼女を引留めてゐた。クルイロフは、アーニヤを娘として引取る事に決めてゐた。三人共、永い間、長椅子の上に坐つてゐた。ワシリ・アレクセイウイチは、一度も、コスチャの事を思ひ出さなかつた事が悔まれてならなかつた。若し、一寸でも、彼がコスチャの事を思ひ出したら、こんな事にもならなかつたかも知れないのである。恐らく、少年は生きてゐたに違

ひないのだつた。彼は妻に、コスチャの事を話し、少年の才能と彼が描きたがつたるた繪の話言つて聞かせたのだつた。そして、少年は、幻想を抱いたまま、死んでしまつた事を……

春の美術展が開かれた時、畫家は、自分の妻の肖像と、「春の風景」と、「幸福への道」を出品した。

コスチャのテーマは、すつかり、畫家の心を捉へてしまつて、彼はどうしても描かねば居れなくなつたのだつた。彼はその繪を、晝も夜も、一心になつて描きつゝたのだつた。時々、彼は、その繪を描いてゐる時、自分の後にコスチャが立つてゐて頭を振るのを感じたのである。或時など、彼は、どうしても、灼けつく様な砂漠の光りを出せないで苦しんでゐると、何かしら見憶えのあるあの汚れた手が、する／＼とカンパスに伸びて、此處ん處を直すんだと言ふかの

良 心

様に現れてくるのだつた。彼は、ぎくりとして振り返つたが、誰も居ない。だが、その幻の手の指した處を直すと、實に効果的な色彩になつた。

彼の妻は、その新しい繪をみて感激したのだが、唯、その畫面の女が彼女になつてゐて、而も胸をはだけてゐるので、一寸、顔を曇らせた。

畫家は繪を展覧會に出すと、それが不満だと言ふ譯でもなかつたが、何となく不安でならなかつた。あからさまに言つて、彼はその繪が立派で、否、むしろ、繪は美しすぎるのだと思つた。人物は全く生きてゐた。砂漠も熱い暑氣を充分出してゐたし、砂の光りもよく出てゐた。そして又、その畫面に手を置く手が灼けつき相な感じさへ出てゐると思つたのである。遠くもやになつた處には、オアシスが見えてゐて、それは蜃氣樓とも幻ともつかないものになつてゐた。

繪を描く権利がないと言ふ事だつた。彼はコスチャのテーマを盗んだからだ。繪を描いてゐる時、決してそんな事を考へもしなかつたのだが、つまり、すっかり、夢中になつてゐたからだ。然し、描き終ると、そこに疑ひが起つて來たのだ。他人のテーマを利用する権利があるかどうか？

不思議だが、彼としては後めたい氣持だつた。その繪のすべては、全くコスチャのものでつたからだ。彼は唯、繪筆を動かしたにすぎないので。而も、その繪筆も、眼にみえないコスチャの手が手傳つてゐたのである。彼は全く泥棒に等しいと思つた。彼は良心に苦しめられたのだ。それに又、コスチャの死を早めた罪が自分にある様に思へてならない事だつた。何故、彼はコスチャの事を一度も思ひ出せなかつたのだらう？ 何故彼に一言も言はなかつたのだらう。彼を救ふ事が出來た筈なのに。

妻は、唯、その繪を描く権利があるんですと強く言つてはくれるのだが、……

良心

「コスチャはもう死んじやつたじやありませんか。若し、あの子が生きてゐたとしても、そんなに描けたかどうか、あなたが、それを描いたからつて、何もとがめられる筋合のものじやないと思ふわ。」

彼女は、かう言つて彼を慰めたのだつた。

だが、疑惑はどうしてもクルイロフの心から去らなかつた。彼は繪を送つたが、自分の名は書かずに、唯、Eとのみ入れて置いたのである。

その繪は非常な反響を呼んだ。繪の前には人ばかりで繪がみえない位であつた。新聞紙の批評も又、大した賞め方であつた。「幸福への道」は第一等に入選してしまつた。その繪には買手がついて莫大な金額がつけられたが、畫家はきつぱり拒絶したのでつた。

新聞の批評をよんで、ワシリー・アレクセイウイチは、きりきり突き刺さる様な恥じさを覺えたのである。その繪が第一等になつた時、彼はすっかり心の平静を失つてしまつた。妻はそれに氣づかなかつた。彼は心の奥深く、沈黙するばかりだつた。

三日ばかり経つた或夜、彼は輝かしい顔をして妻に改まつて話しかけたのである。

「ねえ、僕はすつかり、此の繪で惱まされたんだが、お前には滑稽にみえるだらうね。そして又、不思議だらうね。だけど、僕はしよつちゆ、人に頭をみられるのさへ恥しい位、苦しいんだ。新聞の記事が、皆んな、「泥棒！」と言つてゐる様で仕方がない。で、此の問題を簡単に解決しやうと思ふのだ。又、出來る筈なんだよ。」

と言つて、彼は二通の手紙を取り出して妻に見せたのである。

「一つは新聞社へ、一つは審査委員會へ出さうと思ふ。」

かう言つて、彼は生々とした顔をしながら、此の手紙で自分は迂闊にも、自分

の二枚の繪と一緒に、他人の繪を一緒にしてつい出品してしまつた事を謝罪すると共に、簡単に、コスチャの不幸な最後を書き、十四歳の少年に依て此の繪が描かれた事實を述べて置いたと言つてきかせた。

若い妻は、昇奮して彼の言葉を聞き終ると彼を抱擁して言つた。

「ねえ、此の繪はコスチャのいゝ思ひ出になりますわね。賣つちや駄目よ！繪の賞金はアーニヤに授けられた。コスチャの唯一の身寄りとして彼女はうけ取つたのであつた。そして、「幸福への道」は、アーニヤの道を易々と明るくさせたのだつた。

邂

逅

ファイナ・チミツリエフナ

邂

逅

ファイナ・チミツリエフナ

病院の窓の向ふは、太陽が輝き電車が軋つて、如何にも活氣のある生活が脈搏つてゐた。かうして寝てゐるのは實に氣がひけて、あの活氣のある生活に入つて行く窓にさへ近づくと事が出来ないので情ない事だつた。それは全く愁しいどう仕様もないものだつた。

私は、本を持つて私のベッドの傍に坐つてゐたナターリヤ・ペトロフナの方に頭を向きかへた。患者達に「天絨鵝の姉」と呼ばれてゐる彼女は、ふいと頭をあげると、大きな優しい灰色の瞳を私に注いだのだつた。

「おれに？ 寝具合が悪いんですか？」

邂

逅

彼女は一寸、腰を浮かして私に言った。

「いゝえ、いゝえ……」

私は彼女を止めて、急に回復期の患者らしい駄々をこねてみた。

「退席なんだ！ 何か話してくれない？」

「ナターリヤ・ペトロフナは、本を閉じて、ちつと私をみつめてゐたが、

「ええ、いゝわ。何か面白いお話致しませうね。」

と言つて、急に聞くのだつた。

「どんな人達が一等意思が強いか、詰り、非常に強い感受力を持つた人は黒い瞳の人か、それとも灰色の瞳の人か、どつちだと思ひます？」

私は、急に返事など出来なかつたが、第一、そんな問題などはつきりしなかつた。

「私は、灰色の瞳の人の方が個性が強くつて、決断力があると思ふな。黒い

瞳の人と言ふのは、大抵、南方の人で粘着力と言ふよりはどちらかと言へば、受身の方じゃないかしら。

「ええ、さうね。じゃ、お話しますわね。話の主人公と言ふのは灰色の瞳の人でね、とても敏感な、そして自分の意思を譯もなくどんな人になつて押しつける事の出来る強い人の話ですの。とつても、繊細で敏感なので妾も、あの頃は若かつたし、その人の感受力をうけた事がありましたの。一寸、も少し、お樂にませう……さ、お聞きなさい。」

柔かい彼女の手が、私の肩のあたりに觸れ、私の手を取つたかと思ふと、枕がさつそく置き變へられて、私の頭は靜かにその上に置かれた。

1

ターニヤの本名はエルナ・オルガードと謂ふのだが、ロシア名の方が通り名になつてゐて、彼女も亦、ロシア風にすっかり従てゐたのである。彼女を取

置、
返

巻く周囲のロシア人の風習に従てゐたのだ。彼女は又、父親が管理人として二十餘年間も勤めてゐた或大工場のすべての人達を、家族同様に思つてゐた。ターニヤは工場で生れ、工場で育つたのだつた。彼女の大きな碧い瞳は、彼女の母親の眼にある様な遠いノルウエーの冷たい峡灣の翳はなくて、ウラルの物想ひに沈んだ靜かな湖の様な光であつた。房々とした髪の毛は、くつきりとして彼女の顔の後へ伸びて、ターニヤの輪廓は、ロシアの女達にも珍らしい程、柔かな靜かな美しさに光つてゐた。

優しい輝いた彼女の眼は、彼女の顔を落著きのある明るさにしてゐたが、時時、その眼の光が消えて顔中に言ひ様もない愁しい表情が表れるのだつた。さうした時、ターニヤの顔は全く異國の遠い人の様な顔になつた。顔にはノルウエーの峡灣にある冷たい水面がにじみ出て、丁度、見知らない眼に見えない聲が灰色の河や北方海岸の平地や鷗に就いての古いスカンデナヴィヤの傳説を囁く

のを彼女はちつと、聴いてゐるかの様にみえるのだつた。かうした時、想ひのこもつた大きな眼の少女ニアチャ・ペルコウフナは、とても、ターニヤが好きだつた。

ニアチャは、ひどく夢想的な娘だつた。肥つた足をして黒い縮れ毛を何時も亂して、ずんぐりした彼女は、ほつそり優しいターニヤ、姉のデナアヤと並ぶとひどく見劣りのする無恰好な娘だつた。だが、二人は彼女を散歩にも必ず連れて行つたし、ニアチャは決して二人を出し抜いたりひねくれた嫌な事をしなにし、反つて二人の手傳ひにもなり、力にもなるので二人は彼女を信じて何時も一緒になつてゐた。

ニアチャは、他人の感情がよく分る娘だつたので、例へば、ターニヤが急に顔の色を變へると、もう、彼女に隠すことは出来なかつた。何時も靜かに落着いた優しいターニヤの顔色は氣持の變化で全く違つた焦々した表情に變つてし

避 聖

まふからだつた。ニアチャには直ぐ彼女の心の秘密が見抜かれた。ターニヤが何時かはその秘密を彼女に告げるだらうと言ふ事を信じて、その機会を心待ちにしてゐたし、堅く此の事を信じてゐたので姉のジーナによく言つたのだが、ジーナは、或時寢床の中ではつきり、言つた事があつた。

「ねえ、ニアチャ、さうだとすれば、率直にターニヤに訊いてみればいゝじやないの？ 明日、姜達、「森の湖」へ行くんだから、その時、ターニヤを捉へて聴いてみるわ、若し、何でもなけりや、あんたを今週一杯は仲間外しよ、あんたの思ひ違ひを今夜は、はつきりみせてあげるわよ。」

ジーナは、かう言つて、壁の方へくると向いてしまつた。

ニアチャは、姉がどんな結果を明日掴んでくるかしらと想像しながら、ちよつと眞面目な顔つきになつてゐたが、すぐ、彼女の唇は微笑みに歪んで枕から

目を上げ天を望むやうな顔をしたのである。

「ジーナ！ ジーナ！ お聴きよう！
—なにさ？ 又？

「ジーナ、ねえ、約束するわよ、若し、ターニヤに何んにもなければ、妾、
ちつと温順しく家に居るわよ。鼻をつまんでね。でもターニヤに何かあつ
たら、その時は、今週一杯、あんたのお菓子半分は妾のものよ。えッ？
どう？

太い牛の様な足を彼女は床に踏み鳴らしながら、ジーナの細い手を、ぐいと
力一杯、丸々した手で握りしめると、自分のベッドへ戻つて行つた。二分ばか
りすると、彼女の規則正しい寝息が聴こえ始めてゐた。

ジーナは、仕方なく苦笑した。食ひ辛棒ね、何時でも甘いものばかり欲しが
つて。彼女は、又、ぶりぶりしながら壁の方へ向いてしまつた。

選 返 2

「森の湖」は、散歩にいゝ場所であつた。娘達は朝から其處へ来て晝頃まで
ヤマナランが四方からぎつしり繁つた斜面に腰を下ろしてゐた。谷川はその斜
面の右側から流れ出て、瀧になつて岐れると下の方へ小さな湖の様な形をつく
つてゐた。ナアチャは、此處を「森の湖」と名付けたのである。

柔らかい陽の輝いた朝だつた。陽の光りは、ヤマナランの透き通つた震へる
様な葉を透して、灰色の石に反射し、それは恰度、走る兎の様に閃めくのだつ
た。谷川は音をたてながら下へ流れ落ちてゐた。

ターニヤは頭の髪をいぢりながら、木に身をすり寄せて立つてゐた。ジ
ーナは木の葉を噛みながら稍々離れて腰を下ろしてゐた。時々、ターニヤの方
をみては口を切る機会を待つてゐたのである。ちつと離れた斜面の隅つこで、
ナアチャは腹這ひになつてうつむいたまゝ、水の音を聴いてゐた。娘達はかう

した通り、の姿勢で口を閉ぢてゐた。

は、わくわくしながら、ちつと胸をじめて待つてゐたのだつた。ターニヤは彼女を何となく愛してゐた。一寸、三人の間に間が續いたが、やがて、彼女は眞面目な顔になると、まるで違つた人の様な聲を出したのだつた。

「ナアチャの言ふ通りよ、妾、すいぶん前から、此の憂鬱を打明けたいと思つてたの。そして、私の希望もお話したいと思つてたのよ。よかつたら、今、お話しますわよ。」

姉妹は、息をこらして聽いてゐた。ナアチャは一言も聽き洩らすまいとして、ちつと、彼女を吸ひ込む様にみつめてゐた。やがて、ターニヤは二年前に起つた今でも、胸の底に灼きついてゐる想ひ出を話し始めたのだつた。

汽車は單調な車輪の音を刻んでゐた。ターニヤは窓に點綴して行くパブラマの風景を見つめながら坐つてゐた。薄闇になつて灰色の光に遠くが包まれてし

選 送

まふと、同じ様な退屈な風景がつゞくばかりだつた。

ターニヤは仕切室に獨りきりでゐた。彼女は街の叔母の家へ泊つて、買物をすましたので家へ歸へる處だつた。二週間ばかり滞在して父親と一緒に歸らうと思つてゐたのだつたが、父が發つ二日前、突然彼女は獨りで歸へることになつた。その日の朝から言ひ様もない烈しい憂鬱に襲はれてゐた。晝食がすむと直ぐ、叔母に別れの接吻をすると手荷物を持つて、驛へ行くと家へ電報を打つたのだつた。

夜は、汽車の中で過さねばならなかつた。窓の向ふの薄闇は、掛布の様にすつかり遠景を包んでしまつた。その帷りの中には、時々、街の燈が明滅してゐた。ターニヤは、多彩な風景に氣を紛らしてゐた。

汽車はやがて、電燈のついた驛についた。驛のプラットホームは、乗客でこ

軍火マントを着た背の高いがつしりした男の姿が扉の燈のついた扉に突然、生え出た様に現れたのだ。彼女は、はつとその人影をみつめた。汽車へ強い足取りで、近づかうとする若い將校は、やがて、彼女の仕切室へ向つて来た。何故か、その姿をみた時からターニヤは釘づけされた様に胸騒ぎがするのだつた。彼は、眞直ぐ、彼女をみつめながらやつてくる様に思へてならなかつた。ターニヤは突然、冷い手を力一杯、握りしめてゐたのに氣がついた。

窓の眞下へ来た時、ターニヤは人の好き相な優しい男の顔をみる事が出来た。力のこもつた顎鬚、ぐつと伸び上つた眉根、彼は如何にも大膽な中隊長の様だつた。若い將校はしつかり、劍を握ると急いで飛び乗つた。

ベルが鳴つて汽車は動き始めた。

ターニヤは、窓から身を退くとちつと扉の方をみつめて待つてゐた。廊下に拍車の音がしたかと思ふと、すぐ、扉の處で止まつて、彼の姿が現れ、一寸、

選
通

立止まつて、ぐるりと一瞥したがすぐターニヤに眼を落した。

後で考へても分らないのは、何うして、彼女は、すぐ起ち上つて彼に近づくと譯もなく手を差し延ばしたかと言ふ事だつた。彼も又、近づいて、大きな力強い手で彼女の手を握りしめたのである。

二人は、互ひにみつめ合つたまま、手を握つて唯、言葉もなく眼で物を言つてゐた。ターニヤの碧い瞳は、將校の灰色の髭かに輝く瞳に吸ひ込まれて彼の瞳は、現實を離れた何かしら眼に見えない力を持つてゐた。

汽車は單調な、高い聲を立てながら車輪を刻んでゐた。初めて顔を見合つて、すぐ手を取り合つてしまつた二人は、運命的に定められた人間の様に、互に夢の様な宿命に引ずられて行つた。

この程、時間が過ぎたのであらう。二人はやがて永い沈黙から醒めた。ターニヤは、夢の中の眼を閉つてゐた。最初に口を切つたのは彼だつた。

僕の名はアンドレ・クリツキーです。今朝、驛まで行けなくて、次の夜汽車を待つたのですが、どうも、その時から、貴女に逢へる様な気がしてゐました。

驚いてゐるターニヤの瞳をみつめて、若い將校は軽く微笑んだ。彼は、靜かに彼女の肩に觸れながら外套を取つて傍へ腰を下ろしたのだつた。

「びつくりなさつちや不可せん。深い因縁を持つた邂逅と言ふものは、あらゆるものなのです。かうした邂逅は、運命的に定められたもので、偶然ではないのです。すべてのものが、それに聯つてゐるのです。恰度僕が傷つて病院に寝てゐた頃、その負傷は重大な事件の最初の絆だと思ひました。

傷が癒えて前線へ戻りましたが、歸宅を許されました。そして僕の心から愛してゐる母に逢ひたくて、逢ひたくて矢も楯もたまらなくなつたのです。僕は、母と逢ふ事を朝から思ひつゞけてゐたのですが、何とかして前線で

邂逅

起つたあの運命の絆を破らないで行かうと思つてゐたのです、僕は誰かに逢ふ様な豫感がしてゐました。誰と言つて、それは知りません、……敵か、友達か、愛人か、一寸も分りませんでした。夜汽車を待つて遂に乗つてみると貴女にお逢ひしたのです。貴女は僕をみて手を差し延べられたので、僕を待つて居た人が分つたのです。ねえ、さうでせう？

灰色の瞳は、ターニヤの碧い瞳ともつれ合つた。彼女はクリツキーに朝から愛語だつた事、急に街を發つた事、そして彼をみ出した感激などを話したのでつた。彼は、ぢつと聽いてゐたが聴き終ると彼女の手に接吻した。やがて窓に近づいて行つた。汽車は單調な歩みを續けてゐた。窓の向ふは暗闇で、しばらく沈黙してゐたが、ふいと彼は振り返つて言つた。

「……小さな町に來ます。次の驛が僕の行く處です。僕は此處で一緒に……」

此の言、別れる譯にはいきません。もつと色々な事をお話したいですね。彼の言葉は力があつた、壓倒的で、ターニヤはそれを拒む力がなかつた。黙つて外套を肩へ投げかけると、黙つてクリツキーと並んだまゝ彼女は立つてゐた。かうして、完全に娘は、此の背の高い力強い男に掴つてしまつたのである。小さな町の通りは、言ひ様もなり明るい嬉しい感じを與へた。彼女はクリツキーと一緒にゐたんだから。その町にたつた一つある旅館の小ぢんまりとした部屋に入つて行つた。その夜、二人は幼友達のように融け合つてしまつた。二人は互ひにすべてを語り合つた。そして、二人は絶対に逢はねばならなかつた様な魂の融合を泌々と感じ合つたのである。ターニヤの本名であるエルナと言ふ名も彼は知つてしまつた。朝になつて、何もかも済んだクリツキーは家へ、ターニヤは自分の両親の許へ將來の契りを待ちながら歸らねばならなかつた。アンドレエとの幸福な未來を夢見ながら彼女は希望に満されて驛に立つたの

選 題

である。彼は、優しくターニヤの腫に接吻すると、昂奮した聲を震はせたのだつた。僕を待つて下さい。どんな事が起つても、僕の愛情は永久に君のものだ！ターニヤは喜びに震へながら、アンドレエの遠くなつて行く姿を何時までもみつめてゐた。彼女の餘りに幸福相な輝かしい顔を見ると、父も母も、拒む言葉がなかつたのである。五日ばかり経つて、アンドレエからの便りがないうで、母親は堪りかねて口を切つた。

—どうしたんだい？ お前のクリツキーはさ？
—アンドレエは嘘を吐く人じゃありません。ママ！ママの娘が、ヤクザ男を

—さうなるつて考へてらつしやるの？
—彼は、耳を塞いで聴かぬともしなかつた。彼女は、自分の愛人を強い

二日ばかり経つて、ターニヤに手紙が届けられた。それは、彼の母親から、クリツキーが歸へつた翌日、恰度、母と一緒にターニヤの家へ行かうとしたら、電報が来て、前線へ發つたと言ふのだつた。そしてその手紙の最後には、便りを寄越してくれる様にと書いてあつた（妾達二人で、彼の事を考へながら待ちませう）……と優しく書いてあつた。

愁しい日が続いて行つた。アンドレエからは何の便りもなく、新聞を開くと愛人の名が戦死者の中に出てくるのではないかと胸の騒ぐのを憶えてゐた。時、彼の母から便りが来た。ターニヤは長い返事を送ると又、愁しい胸を抱きしめるのだつた。かうして、二人の女は手紙のやり取りをする中に、愁しい、而し、希望にみちたお互ひの魂が融け合つて行くのを感じ始めたのである。二年間がかうして経過した。アンドレエ・クリツキーの名は、遂に現れた。（消息不明）となつて軍事欄に出たのである。

選 題

ターニヤは、父親も母親もわざと娘に思ひ出さすまいとしてゐたクリツキーの事を獨り想ひ續けながら愁しい日を迎へてゐた。時はゆるやかに流れて行つた。かうして彼女は夢の中に生きる様になつたのである。彼女は唯一つクリツキーとの邂逅を胸に描いたまま、生き續けたのだつた。

アンドレエはきつと歸へつてくる、最後に言つた彼の力強い聲が、今も猶、彼女の耳底深く木現してゐた。彼女はその言葉を決して疑はなかつた。日と共に、彼女の希望、深くなつて行くばかりだつた。

ターニヤは話し終ると、疲れたらしく眼を閉ぢて木に寄りかゝつた。谷川の響きだけが森の静寂を破つて聴えるのみだつた。數分経つて、突然、ナーチャは走り上るとターニヤに近づき、彼女の前に膝まついて、途切れ／＼の言葉を

「あんたはきつと逢つてよ、その人にきつと逢つてよ。ターニヤ、あんたの
アンドレエと逢へる様にお祈りするわよ。きつときつと逢へる様にね。そ
して幸福になれる様にね。……」

昂奮した娘は、ターニヤの膝に頭をやつて、何となく泣き出すのだつた。

ジーナは唇をかんで反つぽを向くと、ターニヤを真正面にみる事が出来な
かつた。眞蒼になつた、ターニヤの頬を傳つて、ナーチャの髪の毛の上へ、彼女
の涙が流れてゐたのだつた。

晝食の後で、お菓子が出るとジーナは、自分の皿をナーチャの方へ廻した。
ナーチャはそれを黙つて押し返すと、眼蓋を何度もばち／＼させながら湧き出
てくる涙を堪へ様としてゐた。ジーナはそつと彼女の手を取つた。

4

選 運

一年が経つた。突如として起つた嵐の爲に人々はその烈しい渦中に卷込まれ
てしまつた。時代は最早、意味のないものになつてしまつて、人々は生きて行
く希望を失つたのであつた。ロシアの廣い天地を走る汽車の車輪の響にも、リ
ズムを失つた焦立しい軋りしかなかつた。時代は全く、一變して不安な明け暮
れを人々に押つける様なものであつた。行方もなく彼等は疲れては立止まり、
又、重い足を曳すつて慌しく何處ともなく逃れ出やうとしてゐた。あらゆるも
のが混乱して不安に驅り立てられてゐたのである。

ナーチャ・ベル・コオバは、さうした環境に従いて行くのを止め、灰色の瞳は
新奇を求める子供つぼい愛情を失つてしまつた。長い眠られぬ不安な旅と、新
しい人々を見出す毎に不安に脅えるだけであつた。

エカチエリツブルグで散り／＼になつて別れてしまつたターニヤの事を思ひ
出すと、彼女の胸は烈しく痛むのだつた。事件が起つた當初、ターニヤの一家

は工場を引揚げてエカチエリンブルグに身廻り品などを持つて避難してゐた。三週間経つてベルコオバの家族は浦潮に著いた。ターニヤと別れるのが愁しいので、ナーチャは一緒に避難する様に彼女に頼んだのだが、ターニヤは彼女の家族と共に、エカチエリンブルグに留まつてしまつた。それにターニヤは、其處に留まつて、事件の落着を待つと共に、又、アンドレエを待ちたいからだつた。ターニヤの決意はどうにも覆せない堅いもので、それに顔を輝かして希望さへ持つて言ふのだつた。

ジーナと一緒にナーチャは、疲労した虚ろな身體をイルクーツクの驛の食堂に落着けた時、彼女は、同じ様に疲れた人達が食堂の椅子に坐つてゐるのを見出した。ナーチャは虚ろな視線をさうした人達の上に投げてゐた。と、突然、はつとなつて彼女は大きく眼を開いたのだつた。その卓子の一つを四人の軍人が圍んでゐたが、若い將校が近づくと皆一時に敬禮をしたのである。敬禮がお

選 進

互ひに交はされると。一人が椅子をすらして、若い將校は彼の横に腰を下ろした。

ナーチャは胸を蹴らせながら彼をみつめてゐた。優しい横顔、引き締つた口元、顎鬚、ぐつと延びた眉根、輝いた瞳、その顔は何うしても彼女の知つてゐる顔だつた。彼女は姉の手を握つて、昂奮しながら囁いた。

「ジーナ、御覽よ！ ほれ、向ふを、あの將校を。誰と思ふ？」

ジーナが、ちつとみつめた時、その將校も、又振り返つて彼女をみつめたのだつた。灰色の瞳の中には、暗い翳があつた。彼は、瞳をナーチャの方へ移した。

ナーチャは彼の瞳を大きく見張つた瞳でみつめたまゝ、血の氣を失つた唇を動かした。

「早く話してよ。誰だか名前、訊いてよ。」

「クリツキーだと思ふの？」

「ナーチャは黙つて頭を引いた。その時、將校は起ち上ると、急いで彼女達の卓子に來ると空いた椅子に腰を下ろして、いきなり、口を切つた。

「ターニヤを御存知ですか？ えッ、何處にゐるのです？」

「ジーナは、鼻奮の餘り、言葉をこんがらせながらやつと次の様に答へた。

「エカチエリンブルグにゐます。……家族も……ターニヤは貴方を待つてゐ

ます……」

クリツキーは頭を振りながら、エカチエリンブルグの情勢や、ターヤニと家族達の様子、などを畳み込む様に尋ねるのだつたが、ジーナはしどろもどろに答へるばかりだつた。

やがて、クリツキーは顔を輝かせながら、大きく胸を張つて言つた。

「お蔭ですつかり様子が分りました。今日は何をなく、僕は、ターニヤに逢

還
道

へなくとも、誰か、少くとも、彼女の便り位は分るだらうと言ふ豫感がし

たのです。全く好運でした。待ち構へてゐた様なものでしたね。

「かう言つて、彼は口を閉ぢるとナーチャをみつめた。ナーチャはやがて、思ひ切つた様に彼に向つて言つた。

「ターニヤの處へ居らつしやる？」

「クリツキーは軽く笑つて言つた。

「ええ、すぐ、僕は彼女を見つけ出します。たつた一人の僕の身内になつてしまひましたからね。

母が亡くなつたのです。

「僕が捕虜になつて居なくなつてからです。前線に出ると直ぐ、負傷して捕虜になつてしまつた。長い間、便りも出來ず、その機會もなかつたのです。つい先月、前線から歸つて來ました。おつとシベリヤに出で、今、

命令をうけて浦潮へ行く所です。浦潮へは代りをやつて、エカチエリン
 ルグへ戻る許可を願つてみます。

ナアチャは彼に手を差し出した。

「ああ、いゝ事ですわ。何んていゝ事ですわ。嬉しいわ。貴方にお逢ひ出来
 る様にとすればかりお祈りしてましたの。」

「タアニヤは幸になれますわよ。どうぞ、宜しくお傳へ下さいまし。妾が何
 時も、タアニヤの事ばかり思つてゐると言つて下さいな。……」

彼女は、かう言つて、涙を出してゐた。

クリツキーは、優しく彼女の手を取つた。

「泣いちゃ不可ません。私達は又、逢へますよ。あなた方と、私達とみんな
 一緒になる事があるでせう。」

「さあ時間です。エカチエリンブルグ行の汽車が出る時間ですから……有難

送
 返

うござりました。左様なら。

彼は、元の卓子へ戻つて行つた、その時、食堂の扉が開いて、荷物を取りに
 行つてゐた娘達の父親がやつてくると、慌しく汽車へせき立てたのだつた。

ナアチャは、最後の挨拶をクリツキーに送つた。彼も立つたまま、彼女を見送
 つてゐた。二人は別れの微笑を交はしたのでつた。

ナアチャは汽車の中に入ると、すつかり、静かな落着いた氣持になつた。タ
 アニヤは是で幸福だと思ふ事が出来た。夕暮れになつた頃、彼女は又、タアニ
 ヤの幸福を祈ると、ぐつすり、新しい生活を迎へる人達と共に深い眠りに落ちて
 入つた。

原作者の紹介

(著者より譯者へ)

親愛なるキタフさん!

小生、短篇の翻譯に同意致します。

さて、小生の略歴、左の通りであります。――

一八七二年十一月二十九日、キエフ市に生る。

キエフ士官學校卒業後、聖ペテルブルグ市にて第一級中學卒業試験をパスして、一八九〇年、ペテルブルグ大學博物科、歴史科に入學す。ペテルブルグの軍事裁判所に勤務せる陸軍中將たりし父の没後、大學を中退、軍務に服す。士官學校卒業後中尉となり、チフリス市の第十六ミングレリスク擲彈聯隊に所屬し、ニカライ・ミイヘイロウ

原作者の紹介

白系露人作家短篇集

イツチ大公の指揮下に屬す。大公並びに有名な旅行家ブルジエワリスキー、化學者マ
ンデレニーフ、動物學者ラツヂ教授等と知己になり、やがて、極東、特に滿洲への關
心とみに起り、元東支鐵道守備隊たるザアムール管區ボグラニチナヤ警備隊に轉ず。

大公の斡旋に依り、帝國學士院より滿洲の動物蒐集指令をうけ、やがて、同地帯の
科學調査を行ひ、學士院に結果報告をし、「學士院通信會員」と成り、次で、その功に
依り、ウスリー地方の土地五百デシヤチンを與へられる。一九一四年―一九一九年に
かけて、第一次世界大戰に参加、論功行賞の結果、大佐に進級す。猶、同大戰にて負
傷す。一九一九―二〇年にかけて、南露白色義勇軍に入り、コーカサスにてヴォリシ
エビキと抗爭。一九二〇年、パラチブスとなり、家族と共にエデプトに逃れ、印度に
至る。一九二二年、滿洲に歸り、科學調査及び文學活動を始め、一九二三年、「滿洲
地方研究所」及び博物館設立に創立發起人となり、同研究所終身名譽會員となる。

作家活動は、一九〇二年に始まり、主として滿洲に關する短篇で――雑誌「處女地」

「自然と人」「世界」「自然と狩獵」「狩獵の友」「ロシア語」等に發表す。

一九一五年、ペテルブルグより處女出版「滿洲の山と樹木」を出す。

一九二四年——三〇年にかけては、科學調査報告書で、「滿洲の虎・熊・牡鹿」「馴鹿の飼育」「黒貂」「湖沼地域」「職業としての狩獵」等である。

一九三四年以後の主要作品次の如し。

「滿洲の密林」——一九三四年

「偉大なる王」——一九三六年

「白光に沿ひて」——一九三七年

「ざわめく密林」——一九三八年

「焚火の傍にて」——一九三九年

「傳 説」——一九四〇年

「牝 虎」——一九四〇年

原作者の紹介

白系露人作家短篇集

「吾等の友」——一九四一年

「滿洲獵入手記」——一九四一年

「黒シキヤピタン」——一九四三年

等で、日本に紹介されたものは、「偉大なる王」「ざわめく密林」「牝虎」「吾等の友」である。

猶、海外では・佛・伊・英・獨・葡・チエコ語に翻譯されてゐる。

エン・ア・ハイコフ

(著者より譯者へ)

小生、短篇の日本譯、御同意申上げ候。

さて、小生は、シベリヤのアルタイ山麓に一八八六年生れ、元々、新聞記者育ちにて、現在、ハルビンの「サリヤ」紙編輯に携り居り、一九一四—一八年の第一次世界大

戦に参加せる元帝政露西亞將校に候。

滿洲國に住むこと二十年、エミングラント各新聞・雜誌に發表せる小生作品は約一〇〇篇餘、その中、一部を取纏めて、「ザリヤ」紙出版部より單行本として、一九二六年出版、一九三七年、同社より又、滿洲のエミングラント生活をテーマとせる「緑の戦線」を出版、一九四〇年には、短篇集「古の家」を出版致し、目下、著作に精進し居るものにて候。

ザブーロフ・コンスタンチン・サウエリエウイツ

(ニカライ・アムールスキーについて)

彼は、哈爾濱に居たらしいのだが、日本へ行つたとも謂はれ現在は所在不明である。

第一話白鳥、第二話イ・フウ氏共に、彼の「ウスリー地方の話」の中から二つ採つたもので、何れも、一九〇〇年初頭のウスリー地方の生活を書いたものである。

原作者の紹介

白系露人作家短篇集

作家と言ふよりは、詩人であつたらしく、さして、作家活動の跡は見られないが、特殊な地域の報告として興味がもたれる。

(著者より譯者へ)

小生作品の翻譯に就いては、喜んで御同意申し上げます。

小生の略歴であります、――

一九一六年一月二十三日、ベルム縣クングール市に生れ、一九二〇年滿洲に來り、フア・エム・ドストエフスキー冠稱中學を卒へ、哈爾濱市の聖ウラヂミール學院に學

ぶ。

一九三五年、學生の時分より、作家活動を始め、「ナシニ・プーチ」紙に據る。

當時の筆名、エン・ウラリスキーと稱す。

一九四一年、雑誌「ルベニユ」誌に短篇を掲載し始めてより、本格的な作家活動

に入る。

同志に發表の主なる作品次の如し。

「紺青の十字架」「曆日」「運命の鐘」「燈の村」季刊誌「プリボイ」誌發刊と共に、同志のエミグランド文學の國民主義傾向に従ふ。

最近作としては、「プリボイ」第一巻で「金の粒」を、「ナアチヤ」紙に「雪の夜」及び「歸宅」を夫々、發表す。

一九四三年三月一日、

ナウーモフ

(ボリス・ユリスキーについて)

ユリスキーは、一九〇一年イルクーツクの生れで、既に、「路傍の花」「ミヤウ」「原作者の紹介

白系露人作家短篇集

ンタウの月」其他、シベリヤの密林を背景とした人間を主として描いた短篇物を「ルベニシユ」「プリボイ」等に發表してゐる。現在、在哈作家中では、最も制作欲に燃えた作家である。エミグランド懸賞短篇小説に一九四二年、當選し、彼の作家的將來は大いに注目されてゐる。

一つは年齢的な相違もあらうが、バイコフに較べて、餘りにロマンチックであり、密林の重厚な描き方が足りない様である。謂へば、甘すぎるのである。だが、それだけに、密林の中から生れ出る人間心理へ喰ひ入らうとする作家的氣構へが、やがて、熟した將來には大いに見えるべき傑作を生む事とならう、その點、本篇は注目される。

(著者より譯者へ)

親愛なるキタフさん！

私の作家經歷は次の様なものであります。

私はモスクワ時代から作品發表を始めてゐました。私の最初の詩集、短篇等は、一九一一年、モスクワ、ペテルブルグの各新聞、雑誌に發表したのです。

處女作品集(短篇)は、一九一四年、モスクワで出版した「戦ひの頁」です。何れも、第一次世界大戰をテーマとした短篇です。

私は、帝制時代の將校です。有名な吾がロシア帝國の將軍、スウオローフ直屬の第十一フアナゴルスク擲彈隊に屬してゐました。シベリヤでは、ヴォリシエビキと抗爭し、一九二〇年、浦潮に來ましたが、當時、日本紙「浦潮日報」と言ふのが露西亞人の出版所から出てゐました。

原作者の紹介

浦潮では、又、短篇、詩等を書き始め、若干、詩集を出版しました。一九二四年、哈爾濱に逃れ、かくて、多數の詩、短篇を、主として「ルベエシュ」誌「亞細亞の光」誌、「ブリボイ」誌等に發表する事になつたのです。

哈爾濱では、詩集を多く出版しましたが、最近のものとしては「白色艦隊」があります。此の詩集の出る數年前、上海から、長篇「戦争物語」を出しました。以上が、私の作家経歴です。

現在、多數の短篇を各エミグラント誌に發表してゐますが、何れも、日本の讀者にも興味あるものと信じます。

猶、私の本名はミツロボリスキー・アルセエニイ・イワノウイツチです。

ア・ネスメーロフ 拜

(ア・カルポフスキーについて)

カルポフスキーは、「ルベエシュ」誌に最近、最も活動して多くの讀物的短篇を發表してゐる才氣煥發な作家の一人である。

テーマも多彩で、主として、哈爾濱のエミグラント生活を探りあげてゐるのだが、大衆的な臭氣は強く、此の點又、逆に、エミグラントの讀者層を掴へる魅力ともなつてゐる。

年齢も中年期であつて、益々、彼が、本格的に大衆小説を書く様になれば、反つて、大成した一風格をつくり上げるのではないかと思ふ。

原作者の紹介

白糸露人作家短篇集

(ファイナ・ヂミツリーエフナについて)

本集では、女流作家を別の機會に譲る、ために一應除いてゐたのはあるが、「ルベエシュ」誌の常連作家の一人としては、本ファイナ・ヂミツリーエフナも、加へる必要があり、此の意味で、此處に採輯したのである。

作者は、在上海に目下ある作家で、發表作品は大體「ルベエシュ」に據り、未だすべてに未知數ではあるが、將來に待たれていゝ素質が窺はれる點、買ふべきものがあらうと思ふ。

未だ年齢的に、若くはあるが、作風の健康な點で、男性作家に伍して恥しくないものを持つてゐる。感傷癖が漸次、より高い面へと推し上げられて行く將來を以て觀るべきものが制作されるであらう。

後記

本短篇集に收めた八人の作家に就いては、大體、紹介通りの在滿作家であつて、何れも所謂、エミグ
 ラント作家を代表するものと見ていい。従て又、所謂、エミグラント文學作品の一端も是に依て大凡、
 窺はれるのではないかと思ふのである。

作品技術の點からしても作家精神に於ても、前代のロシア文學に較べると、未だく世界文學の標準
 に達するは洋々たるものを持つてゐるが、此後、彼等が、大東亞共榮圏の一環たる滿洲の文化の爲に精
 進していさゝかなりとも、盡す所あらんとする努力と熱意は、吾々、日本人として汲んでやるべきもの
 があらうかと思ふのである。

此の意味で特に、文化關係の指導的立場にある日本人各位の嚴正、且、温情ある御批判を與へられん
 ことを希ふ次第である。

四月二十一日

記 林 星

譯者 識



白系露人作家短篇集

印刷 康徳十年六月一日
 發行 康徳十年六月五日
 部數 第一版三〇〇〇部
 定價 貳圓八拾錢
 著作者 新京興安胡同一一一 北尾水
 發行者 新京南關大街六四 佐藤 壽
 印刷者 新京中央通四四 和木本 久
 印刷所 新京中央通四四 滿洲新聞社印刷所
 發行所 新京南關大街六四 五、星、書、林
 配給元 新京五馬路一〇七 滿洲書籍配給會社

No.

Date

